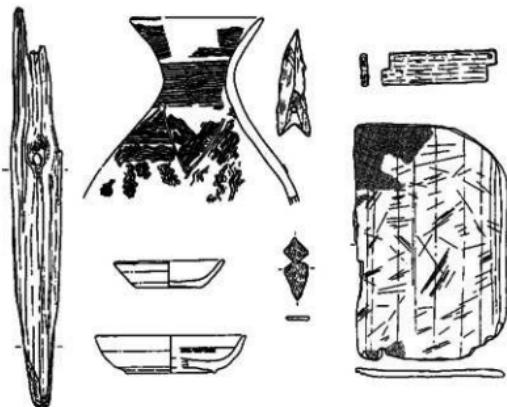


山梨県中巨摩郡甲西町

# 大師東丹保遺跡 I 区

一般国道52号（甲西道路）改築工事  
中部横断自動車道建設工事

に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1997・3

山梨県教育委員会  
建設省甲府工事事務所  
日本道路公団東京第二建設局

山梨県中巨摩郡甲西町

# 大師東丹保遺跡 I 区

1997・3

## 序

本書は、1993(平成5)年度に実施した、中巨摩郡甲西町に所在する大師東丹保遺跡の発掘調査報告書であります。この調査は、建設省甲府工事事務所が行なう一般国道52号(甲西道路)改築工事ならびに日本道路公団が行なう中部横断自動車道建設工事に伴うもので、富士川右岸地域で行なった大規模な発掘の一つであります。この事業にかかわり現在までに10ヶ所の遺跡の調査が行なわれましたが、本遺跡はそのうちの最も下流域に位置する低位の遺跡であります。

本遺跡は広範囲に広がることからI、II、III、IVの4区画に分け、調査を進めました。それぞれの地区で個性はあるものの、鎌倉時代の祭祀場を伴う居住域(II区)とその周囲に展開する水田域(I区、III区、IV区)を加えた中世を中心とした遺跡であることがわかりました。今回、それぞれの地区的報告書が刊行されますが、本書は大師東丹保遺跡の中では最も南端に位置する区域のI区に関する報告であります。居住区の南に広がる水田跡や水路、それに杭で補強された護岸施設がその中心であります。特に杭については膨大な資料であり、杭の作り方や護岸の構築から中世前期の土木工事の一端に触れることのできる好資料かとも思われます。この地域はかつて洪水常習地として知られていましたが、歴史的にも水とのかかわりの強い土地であったことがわかります。

この鎌倉時代の面の下にも、弥生時代後期と中期の生活面が確認されました。弥生後期では小区画の水田や水路、それに畦畔や岸を寸断するかのように走る地震の噴砂も発掘され、中期の面からは水路やそこに残る建築用材であったとみられる木材が発見されました。特に水路底面や地表の窟みには富士山の噴火によると見られる火山灰の堆積も認められ、当時の自然環境復元にも役立つものと考えます。

甲府盆地における低湿地遺跡の一例として、また本県における鎌倉時代を中心とした集落や生産地遺跡の事例として、隣接するII区・III区・IV区の成果とともに御活用いただければ幸いです。

末筆ながら調査にあたって御指導・御協力を賜わった関係機関各位、並びに調査・整理に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

1997年3月

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 大塚初重

## 例　言

- 1 本書は、1993(平成5)年度に実施した山梨県中巨摩郡甲西町大師字東丹保に所在する大師東丹保遺跡の発掘調査報告書である。遺跡はⅠ～Ⅳ区に分かれるが、本書はⅠ区を対象とした報告書である。
- 2 Ⅱ区・Ⅲ区については山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集、Ⅳ区については同133集を、それぞれ参照していただきたい。
- 3 調査は一般国道52号(甲西道路)改築工事・中部横断自動車道建設に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が建設省および日本道路公団より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 4 本書の執筆・編集は新津 健、田口明子が行なった。文責は各章の最後に記したが、第4章第4節については帝京大学山梨文化財研究所 河西 学氏にお願いした。
- 5 遺物の実測、トレース、図面原稿整理については、石原由美子、齊藤律子、清水真弓の諸氏の協力を得た。
- 6 調査に当たって地質については帝京大学山梨文化財研究所 河西 学氏、噴砂については通産省工業技術院地質調査所 寒川 旭氏の御教示を得た。また、植物遺存体はパレオ・ラボ(株)、木材樹種はパリノ・サーヴェイ(株)にそれぞれ鑑定を委託した。
- 7 また、湿地であることから各面から昆虫類も出土し、愛知県立明和高等学校の森勇一氏に鑑定を依頼した。この成果については東丹保遺跡全体を含めてⅣ区の報告書にまとめて掲載する。
- 8 整理作業に当たって、土器類については、特にⅡ区を中心に鶴見大学 河野眞知郎氏に御教示いただいた。
- 9 さらに、木製品の年輪年代測定については、奈良国立文化財研究所 光谷拓実氏にお願いした。
- 10 本遺跡にかかる出土品・記録図面・写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

## 凡　例

- 1 遺構・遺物挿図の縮尺は原則として次のとおりである。

[遺構]全体図・遺構配置図 1/200、杭列・遺物出土状況図・土坑・建物群 1/40・1/60、噴砂断面図 1/20

[遺物]種子類実測図 1/2、土器実測図・拓本・木製品実測図 1/3、杭実測図 1/6、木材実測図 1/8

- 2 遺構断面図中の、レヴェルポイント部分にある数字は標高を表わす。

# 目 次

序

例言、凡例

|                       |    |
|-----------------------|----|
| 第1章 調査の経緯と概要          | 1  |
| 第1節 調査に至る経緯           | 1  |
| 第2節 発掘調査の概要           | 1  |
| 第3節 調査組織              | 3  |
| 第2章 地理的環境             | 4  |
| 第1節 立地と周辺の遺跡          | 4  |
| 第2節 遺跡の層序             | 7  |
| 第3章 発見された遺構と遺物        | 13 |
| 第1節 第一面の調査            | 13 |
| (1)概要                 | 13 |
| (2)水田址                | 13 |
| (3)杭列【1号杭列～5号杭列】      | 13 |
| (4)1号建物群              | 15 |
| (5)1号土坑               | 18 |
| (6)出土遺物〔土器・磁器類、木製品、杭〕 | 18 |
| 第2節 第二面の調査            | 26 |
| (1)概要                 | 26 |
| (2)水田址                | 29 |
| (3)水路【1号水路、2号水路】      | 29 |
| (4)地割れと噴砂             | 29 |
| (5)出土土器               | 30 |
| 第3節 第三面の調査            | 32 |
| (1)概要                 | 32 |
| (2)溝【1号溝～3号溝】         | 32 |
| (3)木材集中区              | 36 |
| (4)出土遺物〔土器、牙鑄、石器、木製品〕 | 36 |
| 第4章 自然遺物についての調査・検討    | 45 |
| 第1節 植物遺存体             | 45 |
| 第2節 樹種について            | 54 |
| 第3節 モモ、クルミについて        | 65 |
| 第4節 スコリア質テフラ          | 67 |
| 第5節 年輪年代測定と遺跡の時代      | 69 |
| 第5章 遺構・遺物の検討          | 70 |
| 第1節 錦倉時代              | 70 |
| (1)杭列と水田址             | 70 |
| (2)杭の製作               | 71 |
| (3)歴史的背景              | 72 |

|               |    |
|---------------|----|
| 第2節 弥生時代      | 76 |
| (1) 弥生時代の生活環境 | 76 |
| (2) 噴砂について    | 77 |

## 挿図目次

|                                   |                                  |
|-----------------------------------|----------------------------------|
| 第1図 大師東丹保遺跡発掘区(1/2500)            | 第二面水田址・溝断面図(1/100)               |
| 第2図 遺跡位置図(1/25000)                | 第22図 噴砂断面図(1/20)                 |
| 第3図 土層断面図(1/80)                   | 第23図 第二面出土土器(1/3)                |
| 第4図 第一面遺構配置図(1/200)               | 第24図 第三面1溝・3溝土層断面(1/20)          |
| 第5図 第一面水田址と3号杭列                   | 第25図 第三面(1号・2号・3号溝)(1/200・1/100) |
| 第6図 第一面水田址木片出土状況(1/80)            | 第26図 第三面木材出土状況(1/40)             |
| 第7図 第一面1号杭列実測図(1/40)              | 第27図 第三面出土土器実測図(1/3)             |
| 第8図 第一面3号杭列の位置と見通し図(1/300)        | 第28図 第三面出土土器拓本(1/3)              |
| 第9図 第一面4号杭列(1/60)                 | 第29図 牙鑑(1/1)                     |
| 第10図 第一面3号杭列見通し図(1/60)            | 第30図 第三面出土石器・木製品実測図(1/3)         |
| 第11図 第一面1号建物群実測図(1/60)            | 第31図 第三面出土木材実測図(1/8)折り込み         |
| 第12図 第一面1号土坑(1/40)                | 第32図 モモ・クルミ(1/2)                 |
| 第13図 第一面出土土器実測図(1/3)              | 第33図 杭製作の復元(1/6)                 |
| 第14図 第一面出土木製品実測図①(1/3)            | 第34図 大師東丹保遺跡周辺の環境                |
| 第15図 第一面出土木製品実測図②(1/3)            | 付図1 第一面全体図(1/200)                |
| 第16図 第一面出土杭実測図①(1/6)              | 付図2 第二面・三面全体図(1/200)             |
| 第17図 第一面出土杭実測図②(1/6)              | 付図3 I区～IV区中世遺構中心の全体図(1/500)      |
| 第18図 第一面出土杭実測図③(1/6)              |                                  |
| 第19図 第一面出土杭実測図④(1/6)              |                                  |
| 第20図 第二面水田址・水路・地割れ痕(噴砂)平面図(1/200) |                                  |

## 表目次

|               |    |                  |    |
|---------------|----|------------------|----|
| 表1 第一面出土遺物一覧表 | 43 | 表5 クルミ計測表        | 44 |
| 表2 第一面杭一覧表    | 43 | 表6 大型植物化石分析結果一覧表 | 47 |
| 表3 第三面木製品一覧表  | 43 | 表7 樹種同定結果        | 56 |
| 表4 モモ計測表      | 44 |                  |    |

## 図版目次

|                                  |  |
|----------------------------------|--|
| 図版1 1. 遺跡全景 2. 遺跡の層序             | 図版9 1. 第三面全景 2. 1～3号溝 3. 1号溝                                   |
| 図版2 1. 第一面の遺構 2. 水田の畔 3. 発掘中の水田址 | 図版10 1. 発掘中の1号溝 2. 弥生土器出土状況 3. 3群木材                            |
| 図版3 1. 1号杭列の平面 2. 1号杭列の側面        | 図版11 1. 第三面のスコリア層 2. スコリア層部分                                   |
| 3. 1号杭列(部分)                      | 図版12 1. 木製品① 2. 木製品② 3. 木製品③                                   |
| 図版4 1. 3号杭列と溝 2. 3号杭列のたちわり風景     | 図版13 1. 第一面出土かわらけ 2～3. 杭の接合                                    |
| 3. 3号杭列出土の木製品                    | 図版14 第二面出土の弥生土器  |
| 図版5 1. 3号杭列の側面 2. 同上のしがら組み状況     | 図版15 第三面出土の弥生土器  |
| 3. 付近の純出土状況                      | 図版16 1. 牙鑑 2. 打製石斧 3. 漆で接合された土器片<br>4. 黒漆の塗られた土器 5. 漆状の塗布ある土器片 |
| 図版6 1. 1号土坑と1号建物群 2. 1号建物群の柱根    | 図版17 第三面出土遺物   |
| 3. 1号建物群の柱根                      | 図版18 1. 第三面出土木製品 2. 第一面出土モモ核<br>3. 第二面出土モモ核 3. 第三面出土モモ核        |
| 図版7 1. 第二面全景 2. 第二面の水田址          |  |
| 図版8 1. 畦を切る地割れ 2. 水路を切る地割れ       |  |
| 3～5. 噴砂断面                        |  |

# 第1章 調査の経緯と概要

## 第1節 調査に至る経緯

本遺跡は甲府盆地の西端の富士川右岸地域に位置しているが、この一帯は建設省が行なう国道52号のバイパスおよび日本道路公団が行なう中部横断自動車道の建設計画地に該当している。のことから山梨県教育委員会と建設省甲府工事事務所では計画地内における埋蔵文化財の保護についての協議に入り、平成元年度(1989)から山梨県埋蔵文化財センターによる工事区域内の遺跡所在確認調査が始められた。その結果第1期工事区間にあたる南巨摩郡増穂町大門～中巨摩郡白根町在家塚の8km間に10箇所の遺跡が所在することが確認できた(第2図)。

本遺跡は平成3年度(1991)の試掘調査により発見されたもので、同時に確認された甲西町内の遺跡としては、中川田遺跡、宮沢中村遺跡がある。この一帯の東側は富士川の後背湿地に繋がる水田が広がっており、古くから水田下より杭が発見されたり、地割が整っていたりすることから田島条里と呼ばれていたが、集落遺跡については殆ど知られていなかったところである。但し山に繋がる西側には湧水の多い微高地が続いており、住吉遺跡や清水遺跡など弥生時代以降の集落遺跡が多いことから、調査前は水田跡などの遺跡が埋没していることは予測されていた。ところが試掘調査を始めて見ると、地表下1m位の深さから木製品や杭列が出土し始め、やがて青磁やかわらけ等の土器類、刀子、古銭、馬の歯、斎串などが発見されるに及び、水辺の祭祀遺構を伴う大規模な中世集落であることが推測されるに至った。しかも生活面はさらに下層にも続き、花粉分析によりプラントオパールも検出されたことから、水田跡も埋没していることも予測できた。

そこで山梨県教育委員会と建設省甲府工事事務所では改めて協議を行ない、平成5年度から本格的な発掘調査を実施することとなった。遺跡の範囲は450mにもおよぶことから、調査区をI～IVの4区画に区分し2年にわたり調査を行なうことで了解された。遺跡は大字大師小字東丹保地区と大字清水小字川原田の両地区を含むものの、最初に調査を行なった大師地区を代表として「大師東丹保遺跡」と命名した。

本報告書はこの内のI区にかかるものであり、発掘調査は平成5年4月12日から同年12月27日まで実施し、報告書作成は平成8年度に行なった。

### 【文化財保護法に基づく手続き】

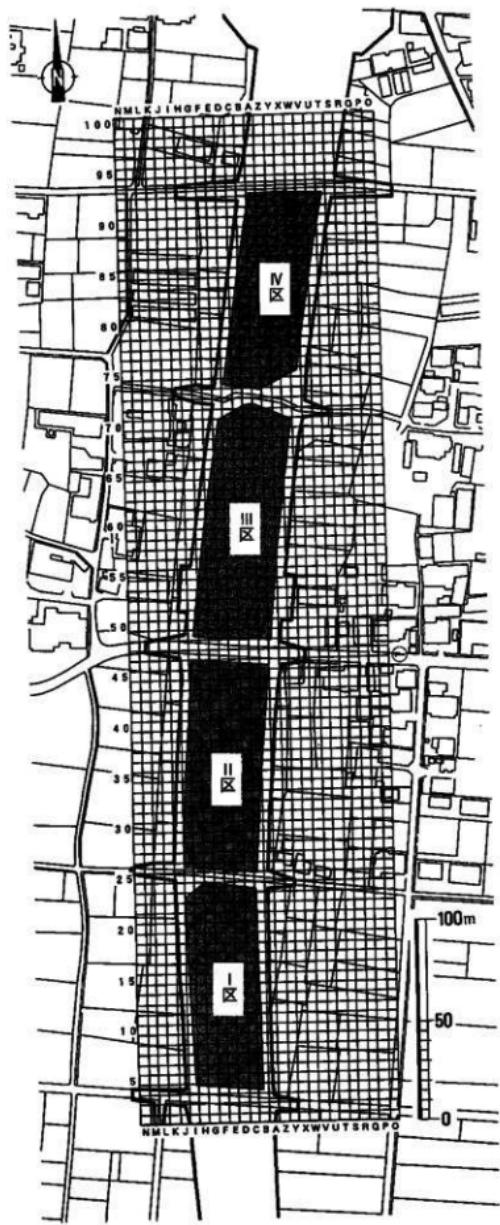
- ・平成5年(1993)4月19日 遺跡発掘通知、文化庁長官に提出
- ・平成5年(1993)11月22日 文化庁長官より発掘通知の受理通知
- ・平成6年(1994)1月10日 遺物発見通知、小笠原警察署長に提出

## 第2節 発掘調査の概要

調査は道路工事が行なわれる幅約40m、長さ約100mを対象として行なった。調査区は、公共座標に基づきI～IV区通して一辺5mの方眼を設定してある(第1図)。

調査の方法は、出水が激しいことや安全面を考慮して調査区全体に鋼矢板を打ち込み、重機により表土や洪水による砂利層を除去することから始め、ベルトコンベアを用いながら人力により全面的な調査を行なった。遺構が面的に掘り上った状態でラジコンヘリによる写真測量で図化を行なった。

調査では3面の生活面が確認された(第3図)。まず地表下1.5mに安定した粘土面が表われ、水田址や建物跡などが見られる面が確認できた。これを第一面とした。この下層に1.2m程の洪水砂利層をはさみ水路や水田跡が残る第二面が広がっている。さらに第二面下1.2mに水路や建築用材が発見された安定した面があり、これを第三面とした。これ以下については鋼矢板の長さや出水の関係から調査を継続することはできなかった。



第1図 大師東丹保遺跡発掘区(1/2,500)

以下に各面の概要を記す。

#### [第一面]

出土遺物や隣接するⅡ区との層位関係から、鎌倉時代(13世紀後半から14世紀前半)を中心とした面。水田址6面、杭列5列、土坑1基、建物跡1群が調査された。土坑は出土したかわらけから戦国時代のものと見られる。杭列は主に護岸用の杭と思われるが、特に3号杭列は60m以上も続くもので、長さ1m以上の杭の連続するものである。桟を中心とした材であり、400本余が確認された。相当の労力を費やした工事であり、水流から水田や生活城を守るという治水の成果を窺い知ることができる資料である。水田址は畦畔の一辺が15mの大きいものであるが、水害により床や畔が流されている箇所が多い。

#### [第二面]

弥生時代後期の面である。水田址4面および水路2本が確認できた。水田の畦畔はわずかな高まりとして残っているにすぎないが、一辺が5mほどの方形をなす小規模なものである。水路については、第一面の杭列や洪水の流れが北東—南西であったものが、第二面では北西—南東というように、流路が変わっている。上流の主体となる河川の位置が弥生時代と鎌倉時代とでは変化したことがわかる。

なお、第二面からは水田や水路を切って、地割れが走っており噴砂も確認できた。このうちのいくつかについては立ち割って、土層観察を行なった(第22図)。

#### [第三面]

弥生時代中期後半の面であり、溝が発見されている。この溝は下流では1本に合流するが、上流方向の北側では3本に分かれていることから、調査順に1号から3号まで番号を付した。特に下流域では木材が多く検出でききたが、これらの中には建物の建築用材も含まれていると思われる。溝中や第三面を覆う細かい砂層中からは、トチ、

カヤ、クルミ、モモなど多くの種子類が出土した。

また、溝底付近や第三面の窪みからは富士山を発生源とする火山灰スコリアが確認できた。人工遺物には、弥生土器、打製石斧、木製品、牙鑑などがある。

(新津 健)

### 第3節 調査組織

|          |   |
|----------|---|
| 調査主体     | 山梨県教育委員会  |
| 調査機関     | 山梨県埋蔵文化財センター  |
| 調査担当     | 新津 健（山梨県埋蔵文化財センター主査・文化財主事）<br>田口明子（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）   |
| 作業員・整理員  | 秋山進也、秋山とみ、秋山正文、麻生菊江、石川修二、井上時江、今津 勝、内田武子、大木つや子、大堀あき子、乙黒さつき、小野ゆき子、折居きく、金丸初子、黒田美江子、斎藤利男、斎藤直江、佐久間竹雄、佐藤勝子、佐野とみ江、鈴田真理、志村京子、鈴木福子、瀧澤かねじ、丹沢政一、鶴田久子、新津光明、野沢昭子、桶口市蔵、桶口京子、桶口とよ子、桶口瑞穂子、深沢 繁、宮本一子、望月和子、山崎正行、横内定平、依田友弘、渡辺あけみ、渡辺浩司、渡辺千恵子、渡辺俊夫、雨宮加代子、石原由美子、斎藤律子、清水真弓 |
| 協力者・協力機関 | 青沼藤雄、井上栄一、小川和茂、塙沢金之介、広瀬和弘、古屋兼雄、甲西町教育委員会、甲西町役場   |

## 第2章 地理的環境

### 第1節 立地と周辺の遺跡(第2図)

本遺跡は富士川右岸の標高245mを測る冲積地に位置する(第2図1)。この地域の西方には赤石山地(南アルプス)の前衛、巨摩山地が連なっており、遺跡の正面には標高2000mを超える櫛形山がその山容を誇っている。この山々のさらに前面には、市之瀬台地などの断層により形成された標高400m前後のなだらかな丘陵がつづいており、甲府盆地をはさみ曾根丘陵と対峙するかのように、縄文時代から古墳時代の遺跡の密集する高台の地が広がっている。この南東地域一帯には巨摩山地や丘陵地域から流れ出る坪川(市之瀬川)や淹沢川などにより形成された複合扇状地が発達しており、ここにも鎌物師屋遺跡に代表される縄文時代や平安時代の集落が発達している。さらにその扇端部は湧水豊富な微高地状の地域が展開しており、住吉遺跡や清水遺跡のような弥生時代から古墳・平安を経て中世にいたる集落遺跡が数多く立地する地形が発達している。

大師東丹保遺跡は、この複合扇状地の扇端部のさらに富士川寄りの低地に位置するが、発掘により確認された3面にわたる生活面のそれぞれの間層には砂利層が厚く堆積していたことから、遺跡部分にも河川による礫の搬入が盛んに行なわれ、複合扇状地の影響を強く受けていることが分かる。特に第三面は現地表から4m以上も下がっており、その間の砂礫層の存在から、相当激しい河川作用が想定できよう。ちなみに本遺跡の西250mに位置する清水遺跡では地表下50cmほどで弥生後期の集落が確認できることから、現在よりも高低差の大きい当時の地形を考えることができる。急速に埋没していく低地ではあるが、弥生時代後期以後も、古墳時代や鎌倉時代、さらには戦国から江戸時代にも生活の場として、有効な土地利用がなされながら現在にいたったものと考えられる。ことに江戸時代後期には現在と変わらぬ地形になっており、水のつき易い水田地帯となっていた様子が窺われる。

さて、以上のようにこの地域は丘陵地域から扇状地を経て扇状地先端部、さらには沖積地まで含む変化に富んだ自然地形から構成されるところであることから、各地形ごとの遺跡(発掘調査の行なわれたもの)の分布について触れておきたい(遺跡の番号は第2図の番号に同じ)。まず、標高400mラインの丘陵上には、縄文、弥生、古墳時代の集落址である、櫛形町長田口遺跡や隣接する六科丘遺跡を始めとして、集落遺跡が多い。また同町上野地区には加えて櫛城なる戦国期の城館があったと伝えられており、地中探査や発掘調査で堀や地下式土壙の所在が確認されている。この上野台地の突端には前期古墳の「物見塚」古墳(17)が富士川流域を見下ろすかのように位置している。この高台を下った標高300m程の扇状地の扇尖部には「塚原」という地名が示すように、後期古墳の密集地帯が広がる。今に残るものは少ないが「往村古墳」(18)は甲西町の文化財に指定されている。この扇状地上には先に述べた櫛形町鎌物師屋遺跡(16)がある。ここからは縄文時代中期および平安時代の集落址が調査されており、特に縄文土器と土偶が一括して国の重要文化財に指定されている。また平安時代については隣接する木本遺跡と一体となった集落であり、古代「大井郷」を考える上での重要な資料となっている。またやや北にずれるが八田畠遺跡(20)では試掘調査で弥生初期の条痕土器や弥生後期から古墳時代初頭にかけての土器が出土している。

この扇尖部の末端を国道52号が南北に走っており、これを越えると「大井」「清水」「鮎沢」という地名からも分かるように湧水地帯へと入っていく。この扇尖部の湧水により解析された標高250m前後の微高地に弥生時代から中世までの遺跡が発達している。特に甲西町地域には、弥生後期の住居が調査された住吉遺跡(13)、隣接して弥生、古墳、中世の遺物のある清水遺跡(12)、古墳時代中期の住居が発掘された鮎沢遺跡(14)、古墳時代から平安時代の土器が出土した淹沢通り遺跡(15)などがある。

以上のようにこの地域は、大きくは三種類の地形区分ができる、それぞれに特徴的な遺跡が所在することが確認できる。今回の高規格道路の建設は、これまでの地形区分の中では遺跡の所在の東限に近い、富士川寄りの箇所であり、甲西町域では最も低位置の部分に当たっており自噴井も多く、ここから遺跡が発見されたことは、地形区分からみても実に興味深いことである。時代による土地利用の実態を考えるうえでも貴重な発見であり、さらにこれらの遺跡の



第2図 遺跡位置図(1/25,000)

広がりが低地に延びている可能性も高くなってきたことになる。

洪水常習地＝無住というイメージを払拭し、歴史的な流れの中での集落形成や土地利用区分を考える必要性を今回の調査はもたらしたと言えよう。今後、各時代の景観の変遷を追いながら地理的環境の検討に当たっていくことになろう。

最後に、国道改良・中部横断道関係の一連の調査で発見された遺跡を概観する。今回の第1期工事区間は「御動使川属状地」の中央までの箇所であることから、北に進むほど遺跡が希薄になっている。最も北方に位置するのは櫛形町七ツ打C遺跡(10)(中世・近世)であるが、集落として大規模な形状を認めるのは櫛形町から若草町にかけて広がる十五所遺跡(9)、村前東A(8)遺跡である。御動使川属状地の扇端部に位置するこの遺跡では、厚く堆積した砂礫層の下から方形周溝墓を作った弥生時代の集落や古墳時代から平安時代にまでおよぶ集落が確認された。ことに弥生時代の水田と見られる跡が、従来の扇状地の下に埋没していたことは驚きでもあった。河川の作用と集落の形成を時間経過の中でとらえる必要性を覚える事例である。地表の砂礫分布からみた扇状地末端に位置するのは新居道下遺跡(7)である。ここからは古墳時代中期および平安時代の集落が発見された。また近世近代の瓦製作用の粘土採掘跡も発見されている。ことに若草町加賀美地区は江戸時代から瓦生産地としてよく知られているが、粘土採掘跡は地域の特色をよく表わした遺構ということができよう。地理学的にも、扇状地の上部砂礫層の下に良質な粘土層が形成されていることは興味深い。

この新居道下遺跡を境に、東西に県道が走っているがこの県道を境に南側は水田地帯となる。北側が桑畠や果樹地帯であったこととくらべ大きな土地利用の形態差である。掘抜き井戸もあり水位の高い土地で、扇状地末端の湧水地帯であり、先にふれた甲西町の複合扇状地末端に位置する大井、清水などの地域に共通する立地である。ここには二本柳遺跡(6)がある。この遺跡は上層に戦国時代の井戸?基や区画溝が確認され、隣接する福寿院跡(二本柳遺跡)(11)と一緒にになった中世寺院とその周辺に広がる特殊な空間であった可能性がある。特に付近には加賀美氏とつながる古刹法善寺や春を呼ぶ祭り「十日市」の開かれる十日市場なる地名もあり、中世空間の構成をみることができる。このような地形に中世の遺跡があることは重要であり、後述する大師東丹保遺跡とも共通するところもある。なお二本柳遺跡の下層からは室町時代から平安時代に遡る水田も発掘されている。

滝沢川をわたるとそこは甲西町に入り、前述した低地部分から水田址を中心とした遺跡となる。向河原遺跡(5)は弥生中期末から後期初頭の小区画水田の発見で話題になったが、上層には鎌倉時代さらには江戸時代の水田が形成されていた。隣接する油田遺跡(4)でも弥生時代以降平安時代までの水田址ないしは祭祀に伴う遺構が調査され、中川田遺跡(3)は平安時代から江戸時代の水田址と言うように、この一帯は弥生時代から江戸時代まで水田としての土地利用がなされてきた地域である。北からみればこのような水田地帯の延長、西からみれば扇状地末端を幾分過ぎた低位に大師東丹保遺跡(1)が立地していることになる。

なお、本遺跡の南には宮沢中村遺跡(2)がある。この下層からは中世の水田や護岸施設が発見されているが、主体は江戸時代後半期の寺を中心とした集落である。度重なる水害のため移村を余儀なくされた集落の一部である。まさに水との共存、そして戦いの長い歴史がこの土地に刻まれているのである。

## 参考文献

- 甘利亀雄 「地形と地質」「甲西町誌」 1973  
甲西町教育委員会「住吉遺跡」 1981  
櫛形町教育委員会「物見塚」 1983  
櫛形町教育委員会「六科丘」 1985  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第60集「七ツ打C遺跡発掘調査報告書」 1991  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第72集「二本柳遺跡」 1992  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第77集「中川田遺跡」 1993  
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第86集、102集「大師東丹保遺跡」 1994、1995

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第87集「油田遺跡」

1994

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第88集「向河原遺跡」

1994

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第89集「新居道下遺跡」

1994

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第90、103、112集「村前東A」 1994、1995、1996

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第101集 「宮沢中村遺跡」 1995

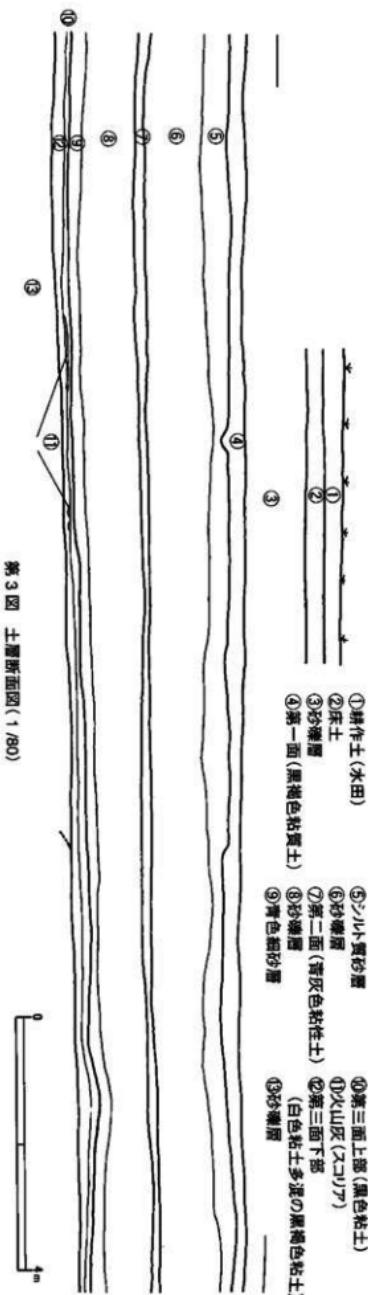
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第104、113集、「十五所遺跡」 1995、1996

## 第2節 遺跡の層序(第3図)

本遺跡の発掘調査では3面にわたる生活面が確認され、それぞれに伴う構造が発見された。それらの層序について概観する。

この一帯は水田として利用されており、この耕作土ならびに床土が地表を覆っている(第3図①②)。この表土層を剥がすと砂利層があらわれる(③)。厚さ1mほどに堆積しており、これを除去すると良好な粘土面にいたる(④)。よく観察すると細かい砂や小石も部分的に含む黒褐色粘質土で、この面に杭が並んだり水田の畦畔が設けられている。この面を第一面としたが、出土遺物やⅡ区との比較から鎌倉時代の生活面と判断できる。地表下約1.5mの深さで発掘区ほぼ全面に広がっている。

第一面を形成する安定した土壤は20~30cmの厚さであるが、漸移的に堅く締まったシルト質の非常に細かな砂層(⑤)となっていき、さらに再び砂礫層(⑥)となる。この砂利層も80cmから1mと厚いものである。この層を除去すると、青色の粘性土になる。細かい純粹な砂が均一に堆積しており、水田の畦畔とみられる高まりや水路が確認できた。これを第二面とした(⑦)。出土土器から弥生時代後期の生活面であることがわかる。なおここからは地割れと噴砂が確認できた。この第二面の残存状態はあまり良くなく、発掘区北側の20mほどの範囲に限られ、それ以外の南側では砂利層が続く。第二面自体の厚さも10~20cmしかなく、短い安定期間の中で形成された土層であろう。その下は80cmほどの厚さに砂礫が堆積しているが(⑧)、Ⅱ区ではこの砂利層の中位に薄い青色粘質土がみられ弥生後期の土器が出土している。



⑤層を取り除くと青色をした非常に細かい砂層(⑨)となる。この層には細かい木片やトチの実などの種子が多く含まれていた。この層を調査していくと黒色粘土層(⑩)となるが、これは下部にて白味の強い粘土層(⑫)へと漸移していく。この中間にスコリア(⑪)が部分的に堆積している。このようなスコリアが1号溝の底近くに堆積していることから、溝の掘込みは⑬層上面ということになる。他の木材などは溝内の覆土に落ち込む状態や⑭層に乗った状況で確認されていることから、溝は⑬層の時期にも機能していたことが窺われる。従って⑬層と⑭層合わせて第三面として取り扱った。出土土器から弥生時代中期後半とした。

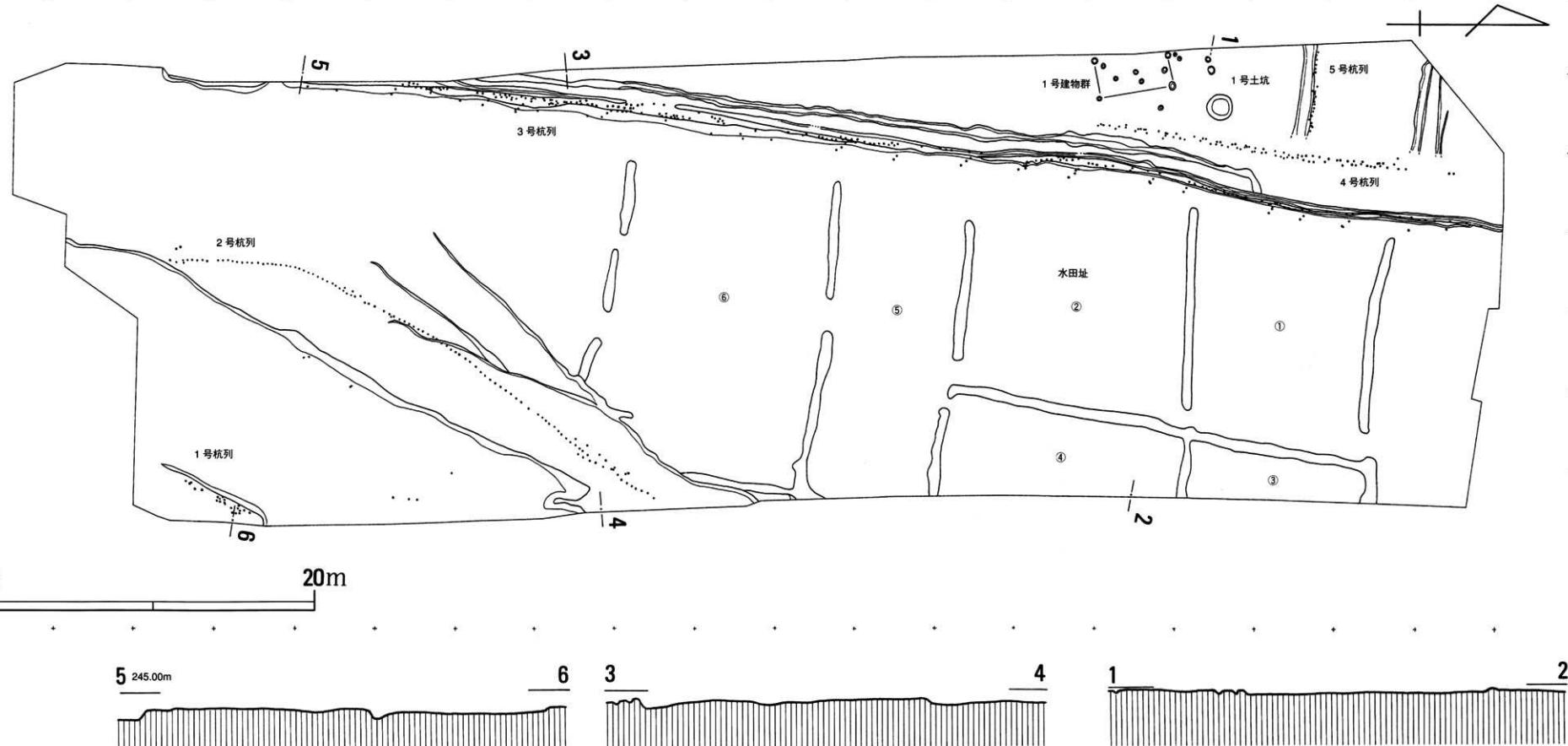
⑭層は部分的には厚く、出水が激しいことから最終的な厚さの確認できなかった箇所もあるが、以下は砂礫層となる。さらに下部の状況も確かめたかったが、不可能であった。但し排水ポンプ設置の並場壁からはさらに粘土と砂礫の互層がみられたことから、さらに古い文化層が埋没している可能性もある。

なお、各生活面とも洪水の痕跡が大きく、水田の床や畦畔が大きく削られていた。特に第一面では杭列の杭が全て南方向に傾いていたことは北からの激しい洪水を想定させる。水田を流し、護岸の杭をねじ曲げ、Ⅱ区の建物をも押流している。このような結果が③層のような砂礫層の堆積をもたらしたのである。

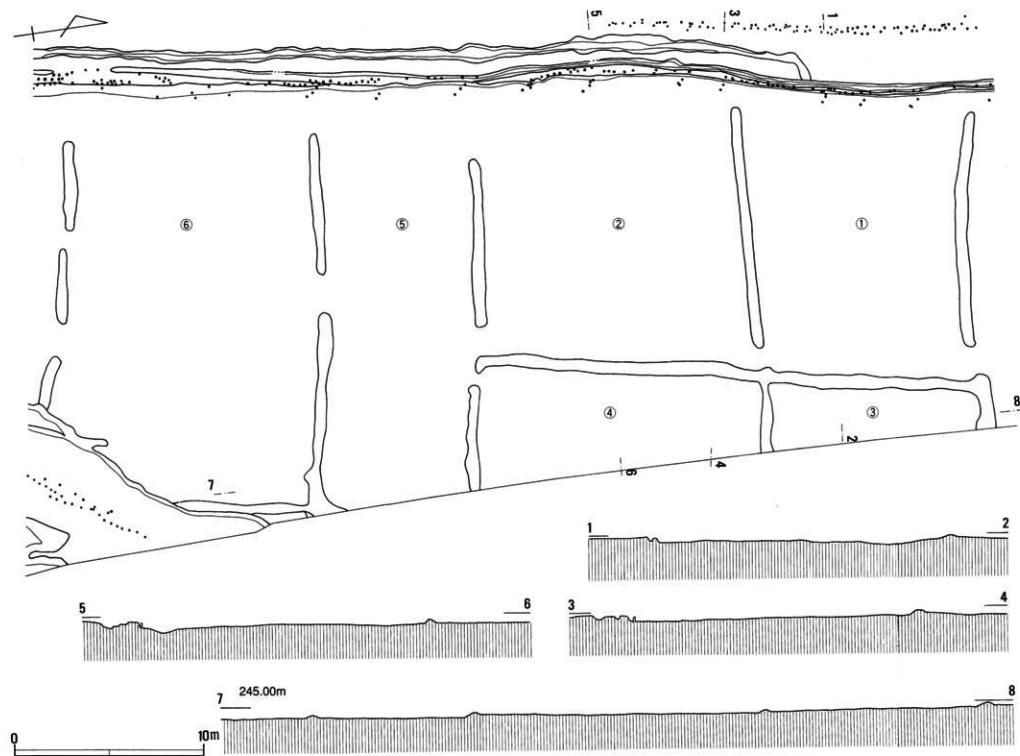
この洪水の方向は面によって異なっており、第一面では北東からの流れ、第二面では北西からの流れである。扇状地における河川路の変化に基づくものであろう。

以上の2面に比べて、第三面は緩やかな流れであったものと思われる。というのもスコリアの堆積が溝内だけなく、造構外の平坦面の小さな窪地にも残っていたからである。さらにこの面を覆っていた⑨層が細かい砂層であったことは、静かな流れであったこと、あるいは逆流による洪水であったことを意味しよう。いずれにしても、弥生時代中期には、川がゆるやかにうねりながら流れる低湿地であったことが推測される。藍鉄鉱が検出されたことからも、静かな湿地であったことを物語る。

(新津 健)



第4図 第一面遺構配置図(1/200)



第5図 第一面水田地と3号杭列(1/200)

## 第3章 発見された遺構と遺物

### 第1節 第一面の調査

#### (1)概要(第4図)(付図1)

現地表下約1.5mに第一面があり、一面の上層は、砂利層が約1m堆積している。この面は鎌倉時代を中心とした層で、水田址、杭列5条、建物跡1群、土坑1基が発見された。水田址は最低6面を数えることができ、またその西側には、平行して3、4号杭列がある。1、2号杭列は水田址の南東端をかすめるかのように、北東から南西方向にはほぼ並行して走る。1号建物群は4号杭列の西側に位置し、その北東には、1号土坑が近接する。遺構の遺存状態については、杭列の残りはよいが水田址部分は洪水により畦畔や床が削られており、かろうじて確認できた部分も多い。特に3号杭列沿いや南端の1号杭列と2号杭列とに挟まれた箇所については水流によりえぐられた所も多い。洪水による水流方向は北東から南西に向かっており、概ね1号杭列と2号杭列の方向と一致する。この北東方向の上流に氾濫をもたらした河川が走っていたことになる。

なお水田や3号杭列、杭列に沿って検出された溝などの方向はN-8°~11°-Eと国土座標南北方向より10度前後東にずれているが、この方向は概略I区からIV区を含めた大師東丹保遺跡全体の鎌倉時代遺構に共通するものであり、当時の地形に基づいた地割りの方向であったことが窺われる。

#### (2)水田址(第4図、5図)(図版2)

調査区の北側約3分の2に水田址が確認されたが、洪水を受け残りは良くない。最低6枚が北東から南西方向に並んでいる。畦畔は、幅約40~80cm、残りの良い箇所では約15~20cmの高さがあり、部分的に途切れている。北から1・2・3~6面として、以下に詳細を述べる。面ごとの規模は、畦畔から畦畔(中央)までとする。

【1面】 西側に畦畔が認められず、3号杭列により区切られるが、南北約11~12m、東西約14~15mの東西にやや長い方形を呈し、北畦畔の東側に約1.5m、南畦畔の東側に約1mの隙間がある。

【2面】 1面の南隣にあり、1面と同じく西側は3号杭列により区切られるが、南北約14.5m、東西約14~15mのほぼ正方形を呈する。東西に走る畦畔は、北側では1面と共有し、南側では5面と共有しているが、南側の畦畔は約8.7mと短く、3面や4面の畦畔と約1.5mの隙間がある。確認された畦畔も非常に低いことから洪水で流されてしまい、その下部がかろうじて残ったものであり、他の水田区画との隙間も洪水によるものと見なされる。

【3面】 1面の東隣に位置し東側が調査区外に伸びるため、東西の規模は明かではないが、南北は約12mを測る。畦畔の遺存は良く、特に北側部分では20cm以上の高さがある。

【4面】 3面の南隣に位置し東側は調査区外に続くため、東西の規模は明かではないが、南北は約15.5mである。南側の東西畦畔は、西側で約50cmの隙間が開く。この隙間については水口とも考えられたが、下流部(5面の4面寄りの部分)に畦畔と同質の粘性土の塊が数個転がっていたことから、水流により畦畔が壊された可能性が高い。なお、3・4面中には流木が多く、この4面の隙間に向かって流れ集まつた様子が認められた(第6図)。

【5面】 3・4面の南隣にあり東側畦畔の一部を残し、調査区外になり、また西側は3号杭列に区切られるが、南北約8.5m、東西約21mの東西に長い長方形の区画をもつ。2枚の水田であったが水流により南北の畦畔が流されてしまったものかもしれない。南側の東西畦畔ほぼ中央に約2mの隙間が開く。

【6面】 5面の南隣に位置する。西側は3号杭列に接し、南東隅は流路に切られる。南北は約13.5~14.5m、東西約21.5mと東西に長い長方形を呈する。これも2枚の水田であった可能性もある。南側の東西畦畔は3分されている。

#### (3)杭列(第4図、5図)

5条の杭列のうち、1、2号杭列の方向は水田址の畦畔と異なる向きだが、3、4号杭列は南北の畦畔と、5号杭

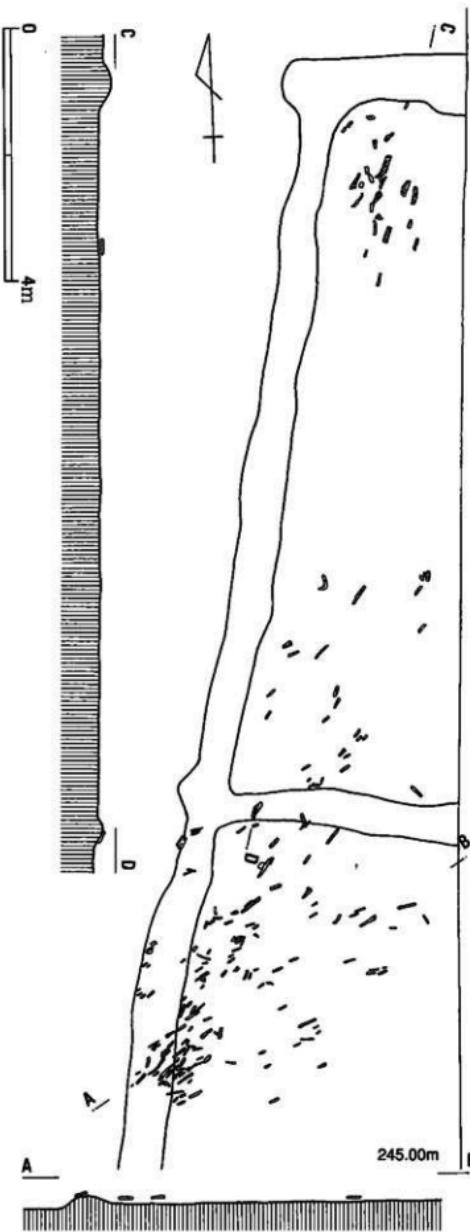
列は東西の畦畔と並行に走る。4号と5号を除き、杭の先端はすべて第一面下の礫層に達している。

#### [1号杭列] (第7図) (図版3)

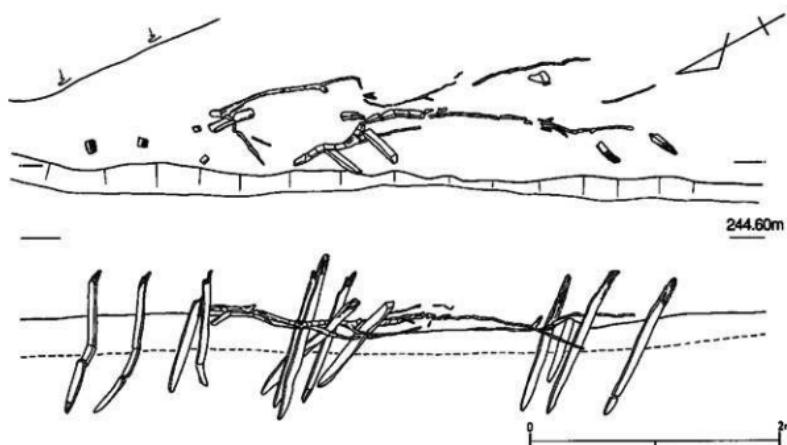
調査区南東隅に北東から南西方向に走り、長さは約5mである。さらに調査区外に伸びている可能性がある。ほとんどの杭が南西に傾いており、杭頭部がさくくれているものが多く、強い水流が想定できる。小枝により「しがら」が組まれている部分もある。杭は17本が確認されたがこのうち9本について樹種同定をおこなったところ、8本がヒノキ属であった(表7)。長さ約60~140cmの角杭が用いられているが、この内の1本(第19図12)は建築用材の軸用かと思われる。しがらには二叉の枝も用いられている。

#### [2号杭列] (第4図)

1号杭列から西へ約15mといったところで、ほぼ並行して走る長さ約35mのもので、その北端は調査区外に伸びる。約4分の3南西に向かったところで南向きに変わる。杭は1号と同じく角杭であるが、長さ約50~90cmと小振りのもので、38本が残っていた。それ以外に杭跡の穴が多く続いている。1号杭列と2号杭列とはほぼ平行して走っており、しかもこの主たる方向はN-31°~35°-Eと3号杭列や水田の方向より大分東に振れることから、地割とは異なった自然流路に関わるものという見方ができる。また水田址の第6面の南東隅をかすめていることから、洪水により新しくできた流路の両岸に打たれた護岸の杭列であったと思われる。なお、1号杭列の東側にも流路が広がることから、複数の洪水により流路も幅や位置を変えている様子が窺われる。



第6図 第一面水田址木片出土状況(1/80)



第7図 第一面 1号杭列実測図(1/40)

[3号杭列](第8図、10図)(図版4、5)

水田址の西隣に北北西から南南西に向かって走る長さ約75mの杭列で、その西には1条ないし2条の細い溝が同方向に流れる。南・北は、調査区外に伸びる。杭列はややくねりながら走るが、その主たる方向はN-8°-Eを中心としており、水田の地割とほぼ同じ方向である。この杭列を境にして東側が30~50cm下がった水田域、やや高い西側が居住を中心とした生活域であったとみられる。この3号杭列の水田側直下は他の面より低くえぐられていることから、水田と杭列との間に水路が設けられていた可能性が高い。杭の間から蓋、折敷、漆碗、斎串などの木製品が出土している(第14図2、6、7、第15図)。杭は430本ほどが確認できた。ほとんどが角杭であるが、厚さ1~2.5cmと薄い板状の杭が若干と先端部以外加工を施していない丸杭が混ざる。角杭については長さ34~135cmとばらつきがあり、複数の列から構成されることから、部分的に何度も補強をしたものであろう。また小枝によるしがらもみられる。杭の材質については、第4章で述べるように8割以上がヒノキ属である。第10図からも分かるように、杭には南に傾くものが多く、また頂部がさきくれ立ったものも見られることから、この杭上まで洪水が及んだものと見られる。

[4号杭列](第9図)

3号杭列より約3m西に並行に走り、長さは約23mで、北は調査区外に続く。皮のついた丸杭や板状の杭で構成される。形状は、丸杭が一番多くみられ、約7割を占め、次に板状のものが約2割、角杭は1割に満たない。

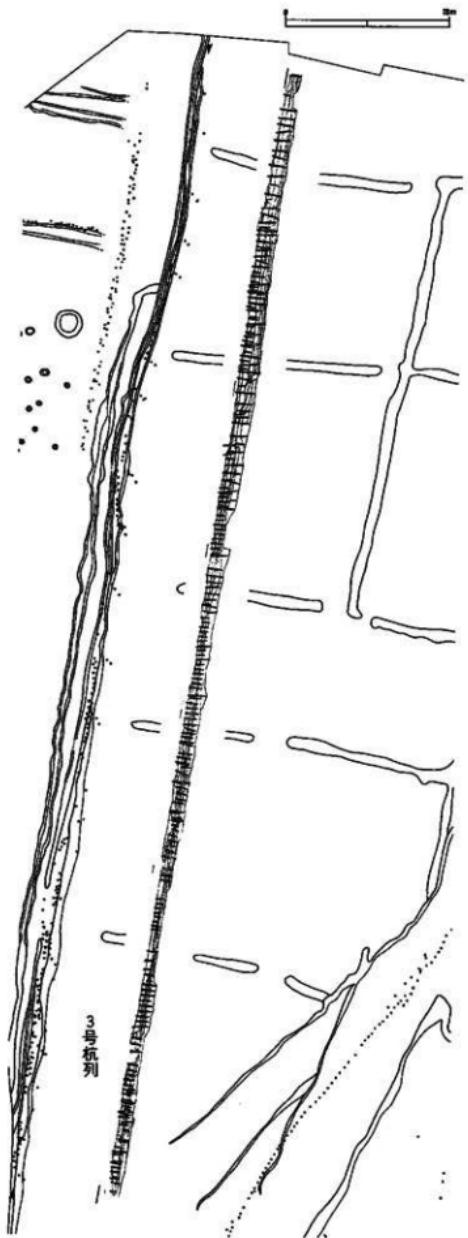
[5号杭列](第4図)

4号杭列に直行するように西北西から南南東に向かう杭列で、長さ約6mを測る。西は調査区外に伸びるが、東は4号杭列にぶつかる約1.5m手前で途切れる。4号と同様丸杭である。

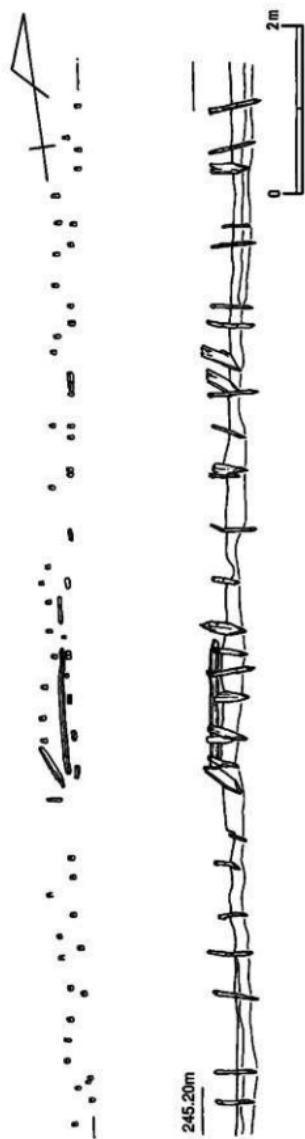
4号杭列と5号杭列は、1号~3号とは異なり短い丸杭や板が用いられており、しかも頂部がいたんでいない。また砂利層への打ち込みもほとんど無いことから、時期的には洪水以後であり、しかも大分降った江戸時代以降のものとみられる。地割区画は鎌倉期と共通している。

(4) 1号建物群(第11図)

3号杭列の西側の高い区域に小穴が10数個検出された。この内の3個に柱根が残っており、建物跡の柱穴とみなしした。建物規模や配列についてはよく分からぬが、穴の大きさや並びから少なくとも2棟分はあったと思われ、第11図に示した。但し水田址や杭列の地割方向とずれることから、時代が降るのか、柱の組み合わせが異なるのか問題は残る。

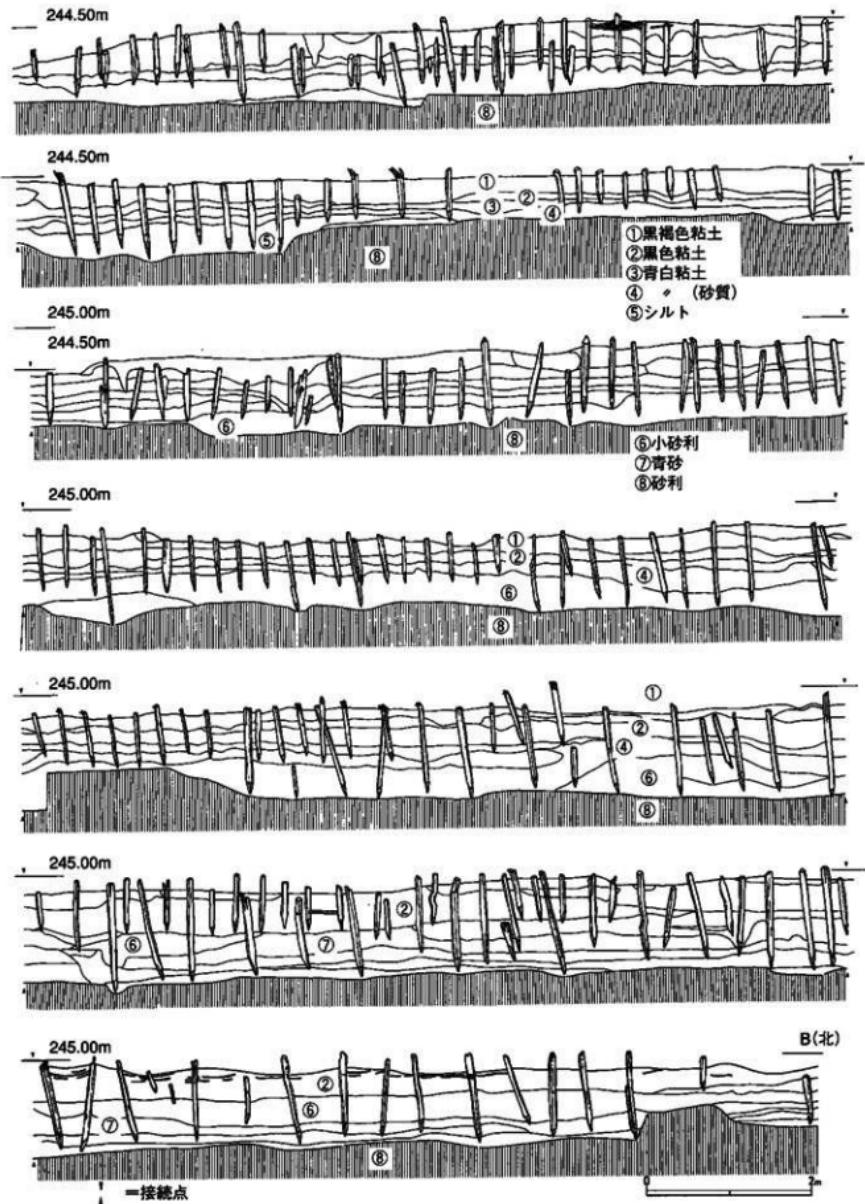


第8図 第一面3号杭列の位置と見通し図(1/300)



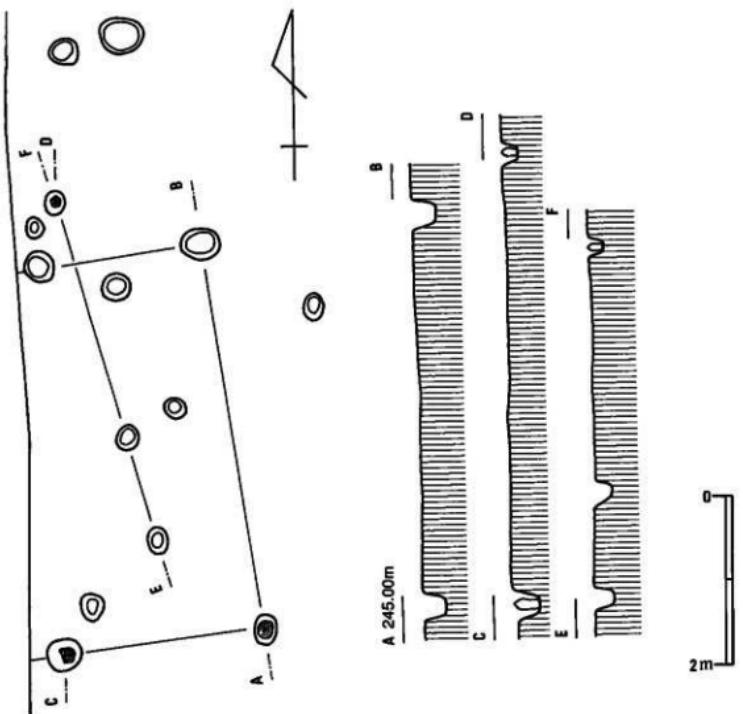
第9図 第一面4号杭列(1/60)

A(南)



B(北)

第10図 第一面 3号杭列見通し図(1/60)



第11図 第一面1号墳物群実測図(1/60)

(5) 1号土坑(第12図)(図版6)

1号建物群の北側、H-20区に位置し、1.6×1.5mの不整円形を呈する。深さは約75cmあり、また覆土中からは、かわらけ4点(第13図5~8)と箸1本(第15図8)が出土した。底面付近からワラ、モミ等の植物遺体が出土した。

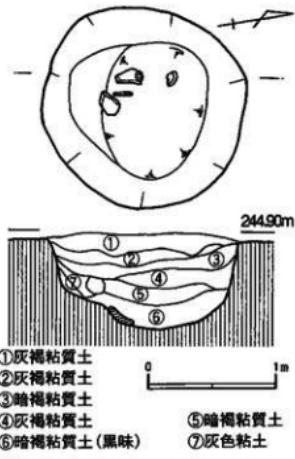
(6) 出土遺物(第13図~19図)(図版12、13)

出土した遺物は、陶器、土器、木製品、杭などである。他に水田址および3号杭列付近から馬の歯や大腸骨が少量出土した。祭祀にかかる遺物であろうが、洪水等により原位置を保っている可能性は少ない。

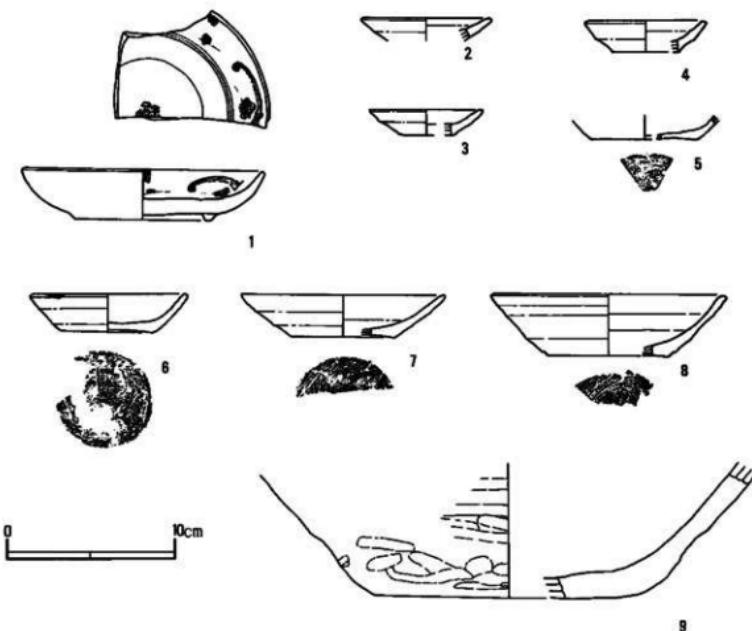
[土器・磁器類]

第13図1は一面上層から出土した磁器小皿。約4分の1が残存する。推定口径約14.6cm、器高3cm、底径8cm。内面には、崩し唐草の染め付けが施され、見込みにコンニャク判による五弁花があることから、肥前系の18世紀後半の所産と思われる。

第13図2~8は土師質土器。いずれも破片から復元して実測



第12図 第一面1号土坑(1/40)



第13図 第一面出土土器実測図(1/3)

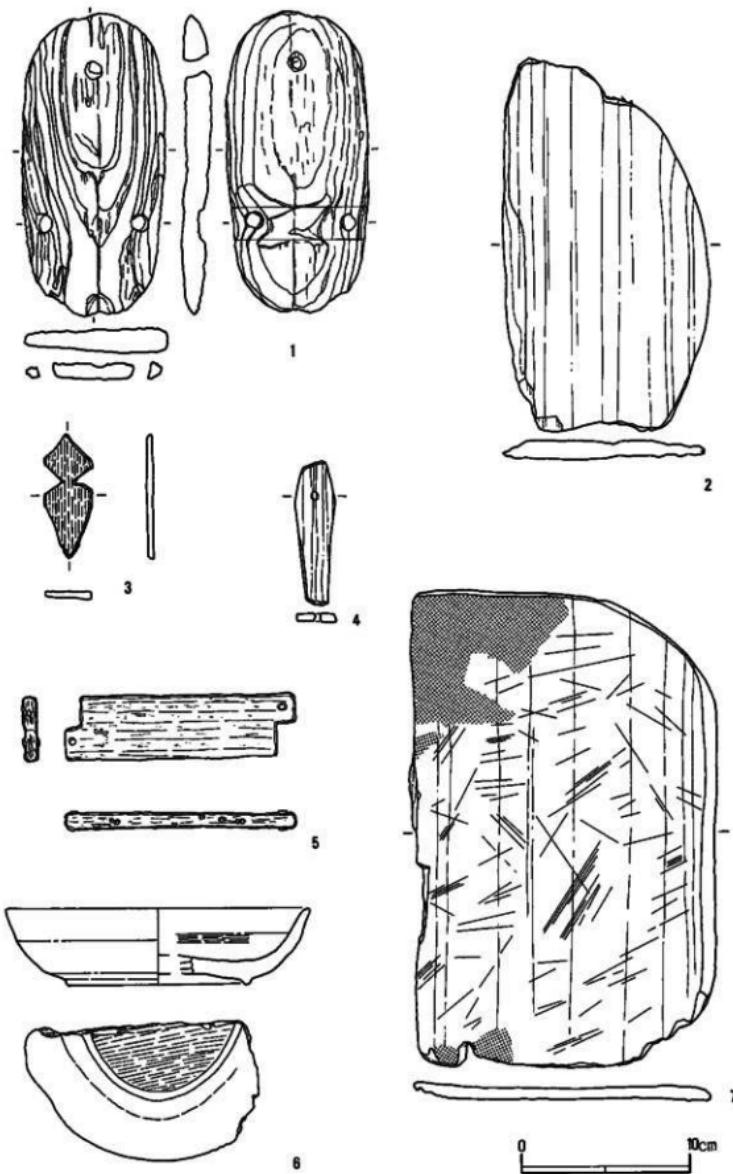
した。2～5は、灰色を呈し内面に自然釉の付着がみられる。2は口径約7.8cm、口縁は開き気味に立ち上がる。3は口径約6.8cm、底径約3.2cmで体部に緩やかな稜をもつ。4は口径約7cm、底径約3.9cmで体部に角張った稜をもつ。5は底径約6.3cmで、底部に回転糸切り痕がある。6はにぶい黄橙色を呈し、口唇部内面に煤の付着がみられることから灯明皿に用いられたものであろう。口径約9.6cm、底径約5.6cm、器高2.2cmで、底部には回転糸切り痕がある。7は、にぶい橙色を呈し、胎土に赤色粒子を含んでいる。口径約11.4cm、底径約6.2cm、器高2.5cmで、口縁は開いて立ち上がる。底部に回転糸切り痕がある。8は、にぶい褐色を呈し、胎土に赤色粒子や砂を多く含む。口径約14cm、底径約7.2cm、器高3.8cmのやや深めのもので、底部には回転糸切り痕がある。

第13図9は素焼きの鉢形土器破片。胎土には赤色粒子と白色粒子を含み、外面に横なでを施している。

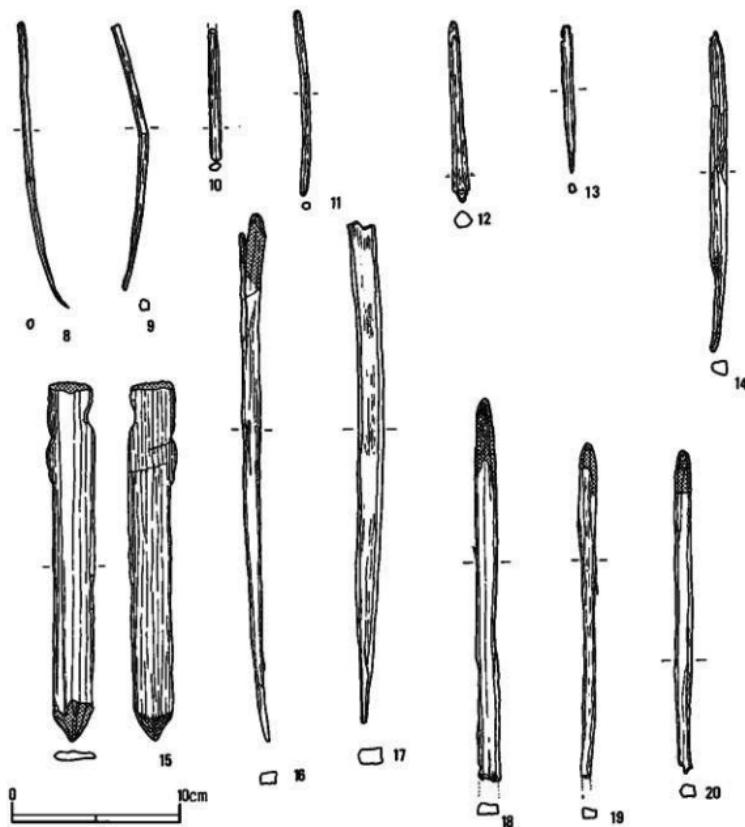
以上の土器類の出土位置については、2～4が第一面検出途中の砂疊層下部、5～8が第1号土坑、9が第一面包含層からのものである。2～4は特に内面が溶けてガラス化していることから、金屬を融かすのに用いられた可能性がある。5も同様である。時期については、土師質土器の3や4のような形態は藤崎市大輪寺東遺跡に、また7、8については勝沼町岩崎氏館跡出土品中にそれぞれ類似している。前者は16世紀後半、後者は15世紀代に位置づけられていることから、これを参考にしたい。また9の鉢形土器はⅡ区から多く出土しており、13世紀後半から14世紀初頭のものである。

#### [木製品](第14・15図)

下駄、漆桶、蓋、折敷、斎事等があり、総数20点を越える。内訳は下駄1、蓋1、折敷1、漆皿1、箱の部材1、箸4、斎事8、用途不明3である。1の下駄は、一木から織り出しており、全長18cmの平面橢円形を呈し、ぱっくりのような形態である。前歯と後歯の塊をなす部分のえぐりは約3cm残っている。H-23区から出土したものであるが

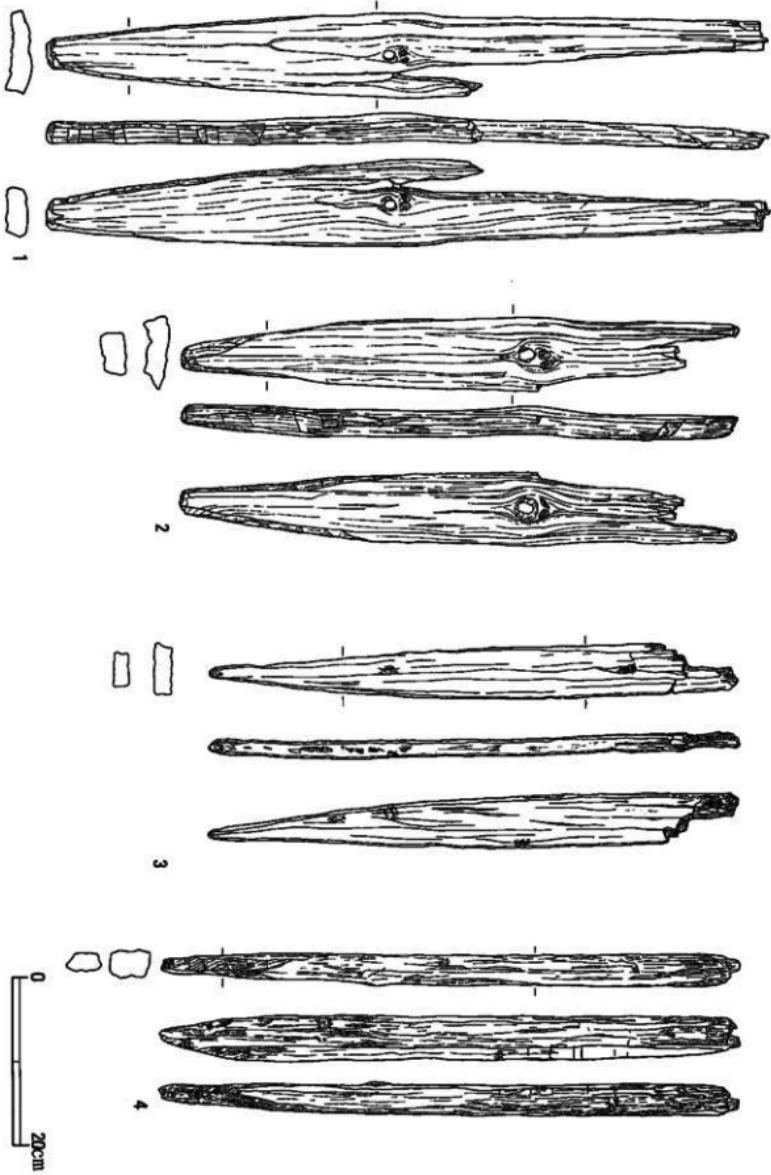


第14図 第一面出土木製品実測図①(1/3)



第15図 第一面出土木製品実測図②(1/3)

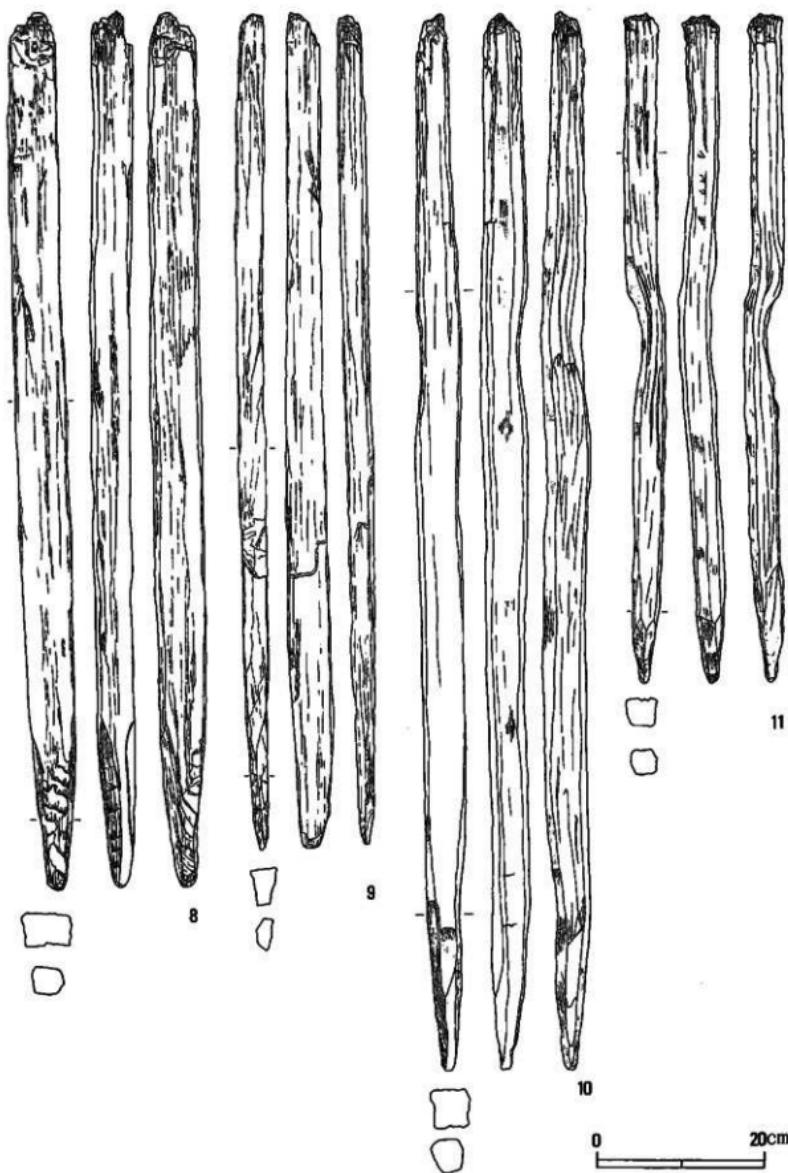
面としては一面の上層にあたり時代は障るものであろう。2は蓋であり、約2分の1が残存している。厚さは、0.6~1cmと不均一で、下部は炭化している。F-22区の3号杭列から出土。3、4は用途不明の木製品である。3は、上部が菱形で、その下に逆長三角形がつく。ほぼ完形で、角は面取りをしている。厚さは、約4mmと薄い。C-15区の第一面粘土層中から出土したものの。4は、上下端わずかに欠損しているが、残存部中央より約2分の1上に径約3mmの小孔が貫通し、その両脇は膨らんで角をなす。約5mmの厚さである。D-19区の水田面に入れたトレーナーの粘土面から出土したもの。5は、箱物の部材である。横の長さは13.5cmで、高さは3.7cmを測り、両端部にはぞを施している。側部は、2個の木釘、底部は6個の木釘が残っている。表面には花びらの押し形がある。D-14区から出土。6は漆桶の破片で、内外面ともに黒色である。推定口径は18cm、器高4.7cm、底径10.6cmと比較的小形である。G-21区の3号杭列から出土。7は、約2分の1を欠損している折敷である。厚さは約8mmあり、形態が隅丸方形である。表面は滑らかに加工され、また刃物による微細な傷があるため、俎板として用いられていた可能性も考えられる。焼けている部分があり、スクリーントーンで表現した。3号杭列から出土。年輪年代測定を行った。



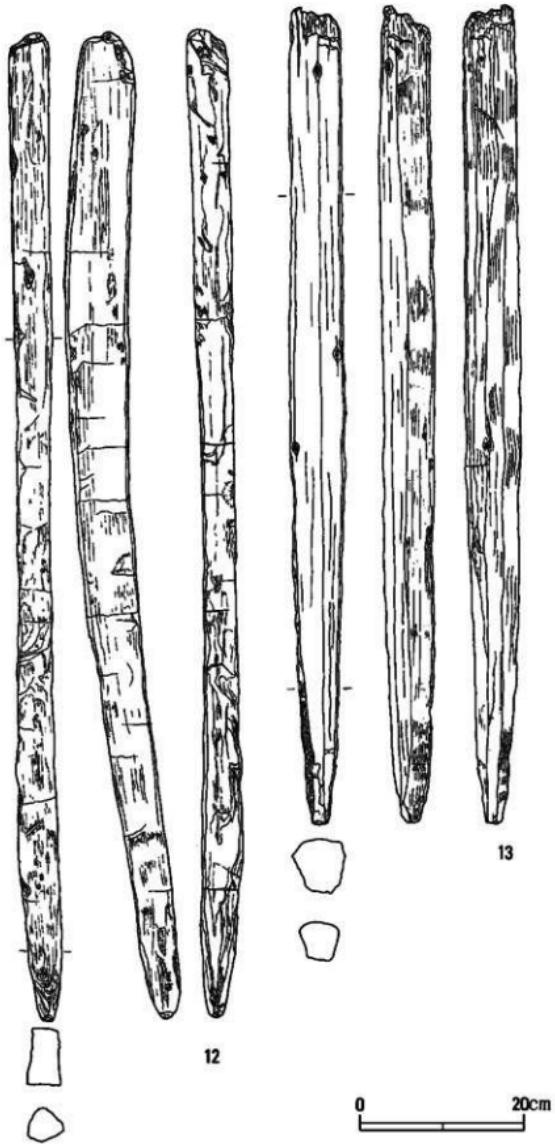
第16圖 第一面出土杭実測図①(1/6)



第17図 第一面出土杭実測図②(1/6)



第18図 第一面出土杭実測図③(1/6)



第19図 第一面出土杭実測図④(1/6)

8~11は、箸であるが、8以外は破損している。8は1号土坑から出土したもので、全長約18cmある。断面は全て多角形を呈し、作りは雑である。12は用途不明だが、断面は下部に向かって径が小さくなるほぼ円形を呈し、先端部は円錐形の突起となる。13~20は斎申と思われ、片端が炭化している14~16、18~20(スクリーントーン部分)と、炭化していない13、17に分けられる。特に15は上部に切れ込みがみられ、比較的扁平である。

これらの斎申は18・20が3号杭列、17が第一面下粘土層中、他が第一面包含層中から出土したものである。

[杭](第16~19図)

総数580点を数え、その内訳については遺構の項でふれたように、1号杭列は17本、2号杭列は38本、3号杭列は430本、4号杭列は95本、5号杭列は24本である。このうち1号杭列と3号杭列の中から特徴的なもの13点を図示する。第19図12は、1号杭列のものであるが、その他のは、全て3号杭列のものである。これらの杭はいわゆる「みかん削り」によって形作られ、さらにそれを輪と直交するように削って板状ないし角柱状に仕上げている。この割り方からみて、第16図1~3のような薄い板状のものは木の外側に近い部位であり、第16~18図4、7、9のような厚いものは比較的内面のものである。第19図13は細い丸

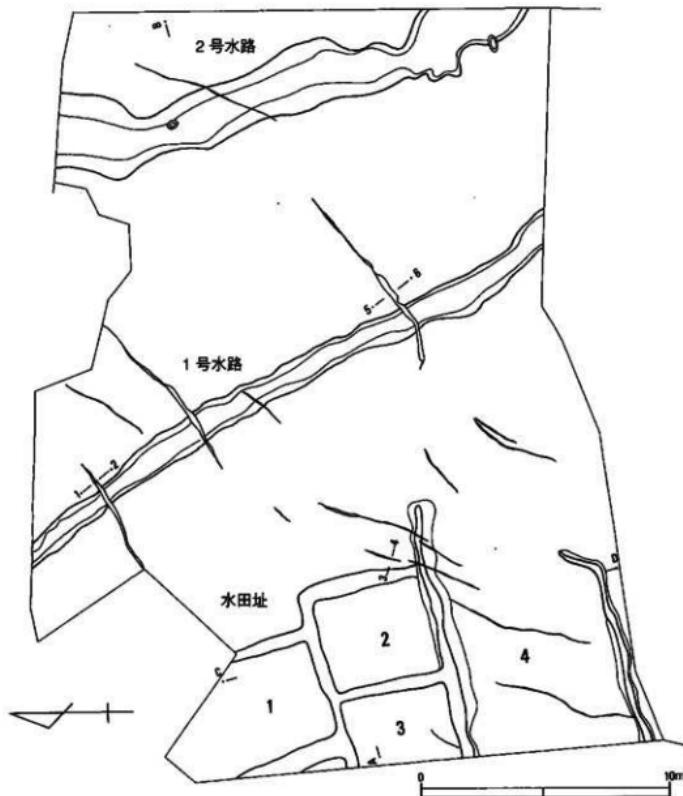
太から8分割されている。先端は鉈のようなもので削ってある。実測図は向かって左に外側(皮のある方向)、中央に側面、右に内側を表わしてある。1と2、8と9、10と11は同一の材から削られ、接合する。特に2は1の内側から剥がされたもの。接合する杭同士は、非常に近い距離に位置しており、そのことから材を運んできてその場で削り、加工したものと思われる。樹種については第4章で述べるように、ヒノキ属を主体にモミ属が加わっているが、図示した杭の材質は全てヒノキである。

(田口明子)

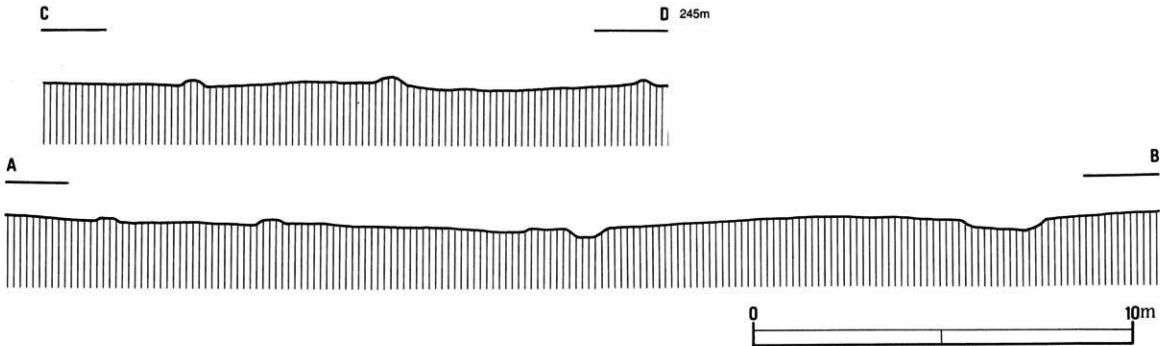
## 第2節 第二面の調査

### (1)概要(付図2)

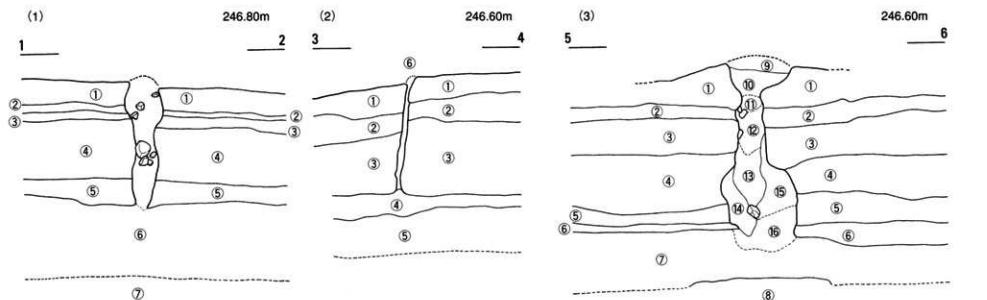
第一面調査終了後、1mほど堆積している層の砂礫層を除去し、本面の調査を行なった。第二面は発掘区全体に残ってはおらず、北側の20数mの範囲に限られており、しかも二面自体がのる安定面も薄いことから残存状況はよくない。それでも水田址4面、水路2本、それに地震による地割れおよび噴砂が調査された。出土土器から弥生後期の面と判



第20図 第二面水田址・水路・地割れ痕(噴砂)平面図(1/200)



第21図 第二面水田・水路断面図(1/100)



①青砂層

②小礫砂

③粘土(第二面)

④砂瓦層

⑤粘土層

⑥中礫層

⑦砂礫

⑧砂瓦層

⑨砂土層

⑩中礫層

⑪青灰色砂質粘土(第二面水田)

⑫砂層

⑬砂瓦層

⑭粘土層

⑮砂層(小石混入)

⑯砂層

⑰粘土(第二面)

⑱砂瓦層

⑲粘土層

⑳砂層

㉑青砂

㉒粘土層

㉓中礫層

㉔砂

㉕大・中・小礫層

㉖小礫層

㉗粘土

㉘粘土

㉙青砂質粘土

㉚砂

㉛小石混入粘土

第22図 噴砂断面図(1/20)

断した。水田址の方向は真北からみてN-12°-W、水路はN-28°-Wと、第一面の地割りとは逆方向に振れている。

#### (2) 水田址(第20図)(図版7)

砂礫層の下に細かい青色砂が確認されたことから、これを注意深く調査していくと粘質土が帯状に確認された。全面の細砂を完全に除去すると、帯び状の高まりは方形区画となり、複数の面が確認されたことから水田址であると判断した。水田区画は明確なもの3面、残存状態の悪いもの1面の合計4面が確認された。水田の並びは南北よりやや西にずれた方向を軸としており、水路の流れる方向に近い。このうち全形が分かるものは第2区画(第20図内の番号)だけである。これは南北4.5m、東西3.7m(畔に囲まれた内径)を測る南北にやや長い方形の小区画水田である。畦畔の幅は下端で30cmから70cm、高さは10cm~20cmであるが、洪水で破壊されている面も多い。第1区画の北辺は確認できなかったが流されているものと思われ、西辺の確認できなかった第3区画と合わせて、第2区画と同様の規模であったと推測できる。第1区画の畔は第2区画および第3区画の畔の中央に位置しており、交互に並ぶ水田の配置状況が分かる。第4区画とした面は凹凸が激しく、また他の水田面より大分下がっており水田の現況はとどめているが、南端に畦畔状の高まりが認められたことから、水田の可能性あるものと考えた。水田とした場合一辺が6m近くと他の区画より大きくなり、あるいは中央に畦畔が設けられていたのかもしれない。水口は確認できなかったが、地形は北から南に傾斜していることから、第1区画から第4区画に向けて掛け流したものとみられる。全体に水田床は凹凸があり、足跡等は確認できなかった。

#### (3) 水路(第20図、21図)

##### ・1号水路

発掘区の中央を北西から南東に走っており、水田址からは7mほど離れている。幅1mから1.5m、深さ30cm余を測る。やはり洪水を受けたためか、底面は凹があり壁上部も削平されているものと見られる。しかし、壁の立ち上がりはしっかりとおり、流れる方向も一定していることから水田と一緒に人工の水路と判断した。覆土の砂利層中から土器が出土するが、東側の平坦地から第23図7の土器が置かれたかのような状態で出土した。

##### ・2号水路

発掘区の東端に位置する。幅1mから3mと不規則であるが、概ね2m部分が多い。洪水により相当擾乱されてしまったものと見られる。深さ30cm~50cmであるが底はやはり凹凸が激しい。立ち上がりが緩やかで流れる方向にうねりがあることから、自然流路の可能性もある。砂や砂利が堆積していおり、土器破片も出土する。北西から南東に流れている。

#### (4) 地割れと噴砂(第20図、22図)(図版8)

水田の畔や水路を切って地割れが走っている。方向は第二面の遺構とは90度東に振れており、発掘区を南西→北東方向に斜めに横切った状況である。長さ1mから8mとばらつきがあるが、概ね3mから4mのものが多い。この地割れの断片をつなぐと、2号水路北端から水田址第4区画まで、全体的には逆S字を描くかのように走っている様子が窺われる。

この地割れには砂礫が充填されているが、下から持ち上げられた噴砂と見られるものである。地割れの幅は最大で20cmほどであるが大半は数cmである。地割れの両側に段差が生じているもの(特に畦畔を切った写真図版8-1)や、1号水路の底や壁にずれを起こしているもの(写真図版8-2)もみられる。この地割れをもたらした地震の時期については、土層断面図第22図3(セクションポイント5-6)箇所が参考になる。ここでは、噴き出した砂が地面に広がる傾向を見ることができた(写真図版8-5)。この砂が広がる面は第二面の上面に堆積している細砂層の表面であることから、第二面が埋没して間もない頃のものと考えられる。従って弥生時代後期後半から、そう遠くない古墳時代初頭までの時期の間に起きた地震により発生した地割れということになろうか。

第20図平面図に地割れ箇所を図示したが、このうち3ヶ所の断面を図示した。第22図(1)は1-2間の断面である。

1号水路を直角に切っている地割れで、最大幅20cmの割れ目部分に砂礫が詰まっているが下部の⑥層から持ち上げられたものであろうか。上部から中位にかけておおきめの塊がみられる。

(2)は水田の畦畔を走っている3~4間の断面図。畔の左右に段差を生じさせている地割れで、細いながらも直線的に割れ目が入っている。小石の入る砂が割れ目に詰まっているが、下の層は粘土層(④層)でありここから上がった砂ではなく、落ち込んだものなのであるか。ちなみに砂礫層はさらに下の⑤層である。

(3)1号水路を切る地割れの断面である(5~6間)。地割れの下端は幅40cmもあり、上あるいは途中の土層から粘土が落ち込んでいる(③⑤層)。噴砂に含まれる礫は上の層ほど多く含んでいる。下層には⑦層とした疊層があり、ここから持ち上がった砂礫であろう。地割れが確認された面には、先述したように砂がやや広がっており、地震当時の地表面に近い箇所であったと考えられる。

#### (5)出土土器(第23図)(図版14)

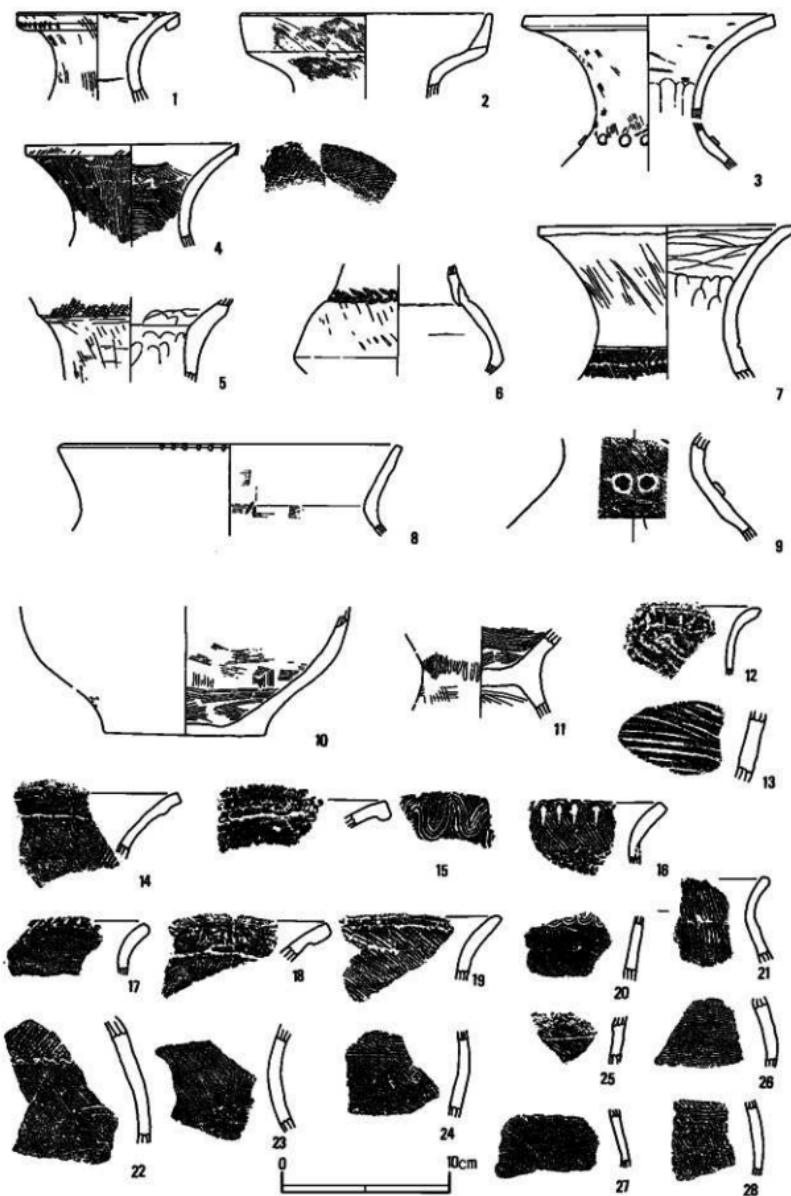
第二面精査中ならびに水路発掘中に土器が出土した。多くは破片であるが、器形の分かるものもある。1~7、9は壺形土器である。1は折り返しの二重口縁で、内外に刷毛目痕が残る。折り返しの下端部に櫛状工具の圧痕が連続し、縄文のような感がある。1/2ほどの破片。2号水路西側外から出土。2は単純口縁ながら受け口状に立ち上がる。立ち上がる部分の接合状況がよく観察できる、古墳時代始めの土器に多い技法である。外面には非常に細かい刷毛目が走る。全体に磨滅しており、内面は熱を受けたように赤化している。口縁部の1/4破片。水田址4面を覆う砂層中から出土。3は二重口縁をなし、強くくびれた頸部下に円形貼付文がみられる。これは4個一単位と思われる。内外面ともに刷毛目痕が残る。4もわずかながら二重口縁をなし、内外面に刷毛目が明瞭。また内面上部には結節を含む縄文が施されている。割れ口面はやや磨滅している。口縁部1/4破片。3、4ともに2号水路西側の平坦面砂層中から出土。7は2本の水路の間でやや2号寄りの第二面上に、口縁を逆さにした状況で出土した頸部から上の土器。頸部直下に羽状縄文がめぐる。全体に灰色をしており、磨滅している。5、6は第一面の3号杭列を取り上げるため、深掘りした際に砂層中から出土した破片。5は細いへらないし櫛状工具を押し付けて了擬縄文の土器。6も縄文の効果をねらった文様であるが、施文具はよくわからない。胴下半部に最大径があり、縦が明瞭につく小型の壺である。8は壺の口縁部1/4ほどの破片。10は底部を中心とした破片。壺形土器と思われるが、内面に刷毛目痕がよく残る。8、10ともに第二面の砂層中から出土。11は台付壺の破片。水路の間から出土したもの。

12から28は小破片のため拓本で示した。12、13は条痕文土器。いずれも周囲が磨滅して丸くなっていることから、上流地域から流されて来たものであろう。12は刻目凸帯のある壺の口縁部破片。14、15、18は壺形土器の口縁部破片で、いずれも二重口縁をなす。15は内面に櫛描き波状文、18の内面には縄文が見られる。その他壺の破片には20、22、23があるが23は頸部、20、22が胴部破片。22には結節縄文、20には波状文が施されている。16、17、19、21は壺の口縁部破片。19を除き口唇部に刻みが連続する。25~28は胴部破片。

以上の土器は中期初頭の12、13を除き、全て弥生後期後半に位置付けられるものである。この近辺では住吉遺跡からまとまった資料がある。本遺跡の土器についてはこの住吉遺跡とほぼ同時期と思われるが、2や4などはやや新しい可能性もある。

これらの出土土器からみて、第二面の時期は弥生時代後期後半に位置付けられ、この時期の水田がこの一帯に広がっていたことが確認されたことになる。

(新津 健)



第23図 第二面出土土器(1/3)

### 第3節 第三面の調査

#### (1)概要(付図2)

発掘区の19列以南では第二面が残っていなかったことから、第一面調査終了後いきに第三面の調査に移っていった。レベル的には第二面下約1mを測り、地表からは約4mの深さにある。第二面下から続く砂礫層を取り除くと、青色の細かい砂層となる。この層から植物種子が出土しはじめ、やがて10cmほどで粘質の安定した面となる。この面を掘込んで溝が走っている。溝は発掘区の中央で合流し1本となるが、上流部では3本が認められる。西端を流れるものを1号(合流後も含む)、中央を3号、東側の細い流れを2号とした。この番号については下流部から調査を進め、確認された順に名付けたものである。溝の合流点以下からは木材が多く出土した。また、溝の底近くには火山灰(スコリア)が堆積しており、その中や直上から弥生時代の土器が出土した。火山灰は溝以外の平坦面の窪地にもわずかずつではあるが堆積しており、溝の中だけに流れてきたものではなく、第三面全体に降ったものと考えられる。

また、発掘区南西隅付近のH-6区を中心とした区域は他よりもやや高くなっている、ここからは建築用材とみられる木材が出土した。

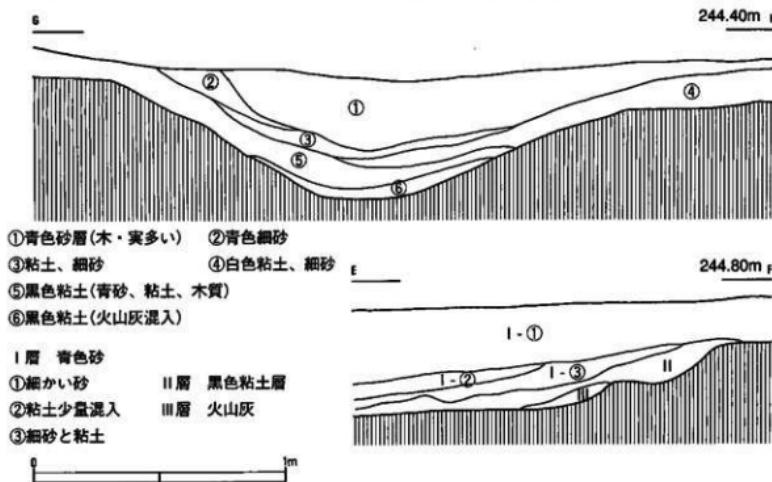
この面の時期は、溝を中心に出土した土器から弥生時代中期後半とできる。

#### (2)溝(図版9)

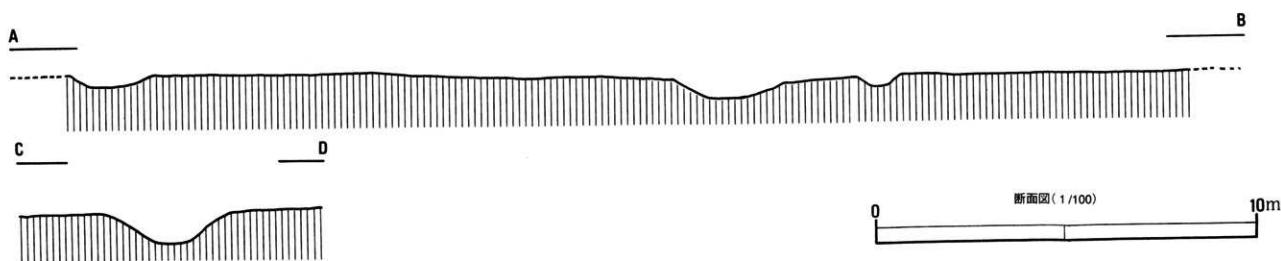
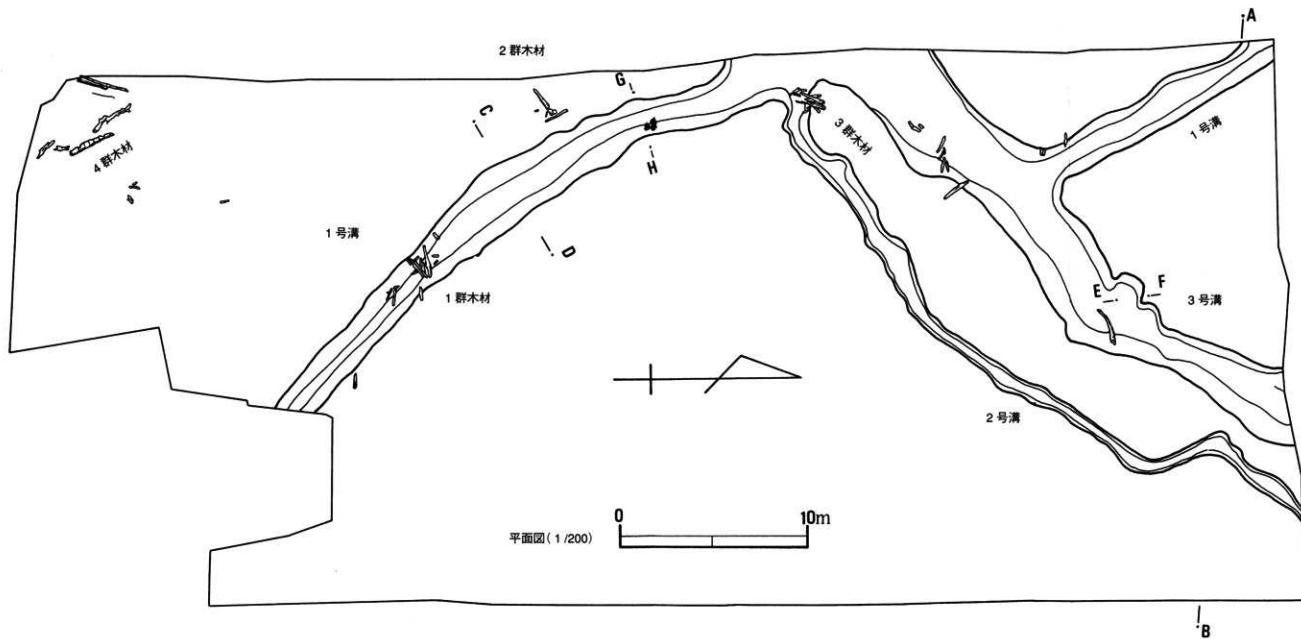
##### ・1号溝(第24図、25図)

最初に確認されたもので、発掘区の北西から南東にうねりながら流れる溝である。2号、3号もこれに合流するがこれらの溝は低湿地を蛇行して北から南に流れるものと見なされ、本来は一つの流れとしてとらえられるものであろう。溝内を埋める土壤については第24図に示したが、下層にスコリアを含む黒色粘土があり、最上層に青色砂層が厚く堆積している。遺物は①層の青色砂層と⑤から⑥層に多く、木質や種子類(トチ、ドングリ、クルミなど)が出土した。特に⑤～⑥層では土器片も出土した。なお火山灰については⑥層だけではなく、溝の壁上部にも層としてではないが、へばりついたような状況で確認できた。

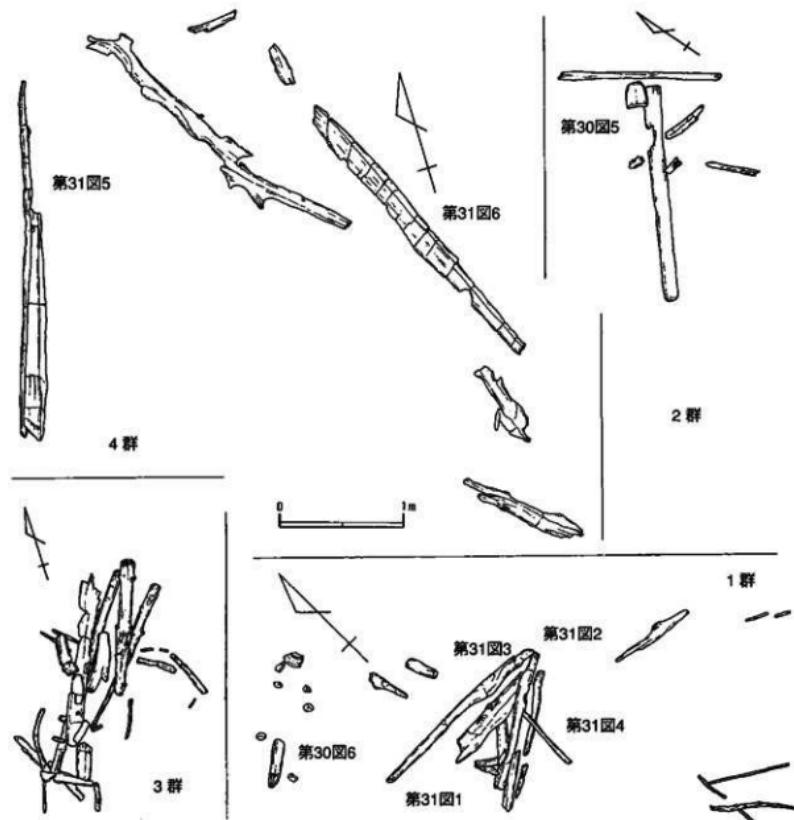
溝の規模については、下流で幅1m深さ90cmから1mを測る。2号溝との合流部より上流では幅2mを越すほど広



第24図 第三面1溝・3溝土層断面(1/20)



第25図 第三面(1号・2号・3号溝)



第26図 第三面木材出土状況(1/40) (各番号は第30・31図と共通)

くなるがこの部分での深さは30cmから40cmである。出水は激しく、排水しながら発掘しても翌朝には満水となりゆっくりと流れる昔日の様子が窺われた。

木質については全体から出土するが、特に下流部分(1群木材)と2号溝との合流部(3号木材)に集中していた。第26図に微細を図示したが、まず1群木材では上層部で溝を横切るかのように集中している(図版10-1)。人工の加えられているものもあり第31図1~4に示した。樹種については一覧表にしてあるが(表7)、モミが多くクリ、コナラなども含まれる。3群木材は自然木がほとんどで、特に節の数多く残る丸木も見られるがこれらはカヤ、モミで他にヤマグワやヤナギが含まれている(図版10-3)。

#### ・2号溝(第25図)

発掘区の西端のH-13区にて1号溝に合流する幅50cm前後、深さ20~30cm程度の浅い溝である。北東側から流れ込んでおりさら上流では3号から分かれている可能性がある。いずれにしても蛇行しながら分流を繰り返したものであろう。出土遺物は木片程度である。

#### ・3号溝(第24図、25図)

発掘区北西部のH-16区で1号と合流する。これが本流であろうが発掘の順序からこのような番号を付したもので

ある。幅は1mから2mと一定せず、自由にうねっている様子が窺われる。上流部では深さ20~30cm程度、合流部で30~40cmと浅い。

この溝の北壁部分には火山灰がよく残っていた。特に断面図を作成したポイントE-F間では、厚さ最大5cmでレンズ状の堆積をしていた(第24図)。出土遺物は自然木が中心である。

### (3)木材集中区

#### ・4群木材(第25図、第26図)

H-6区を中心に木材が集中していた。この部分は他の面よりも20cm余り高くなってしまっており、そこから発見されたものである。これらは長軸を概ね南北に向けており、粘土面に平に張り付くかのような状態で出土している。従って、この位置に元からあったのではなく、北西方向からこのやや高い箇所に流れ着いたものと考えられる。26図4群の図中に示した5と6とは共にエノキ属の板材であり、建築用材とみられるものである。その間に丸木はヤナギ属の自然木である。また5と接して丸太が出土しているがこれはモミ属であり、節目がなだらかになっていることから、建築用材かもしれない。

#### ・2群木材(第26図)

1号溝の西壁外にまとまる一群。こももわずかに土手状に高くなっている箇所であり、流れ着いたものと見られる。モミ属が多いが、第30図に図示した5は板材でありクヌギ節の一種とされる。

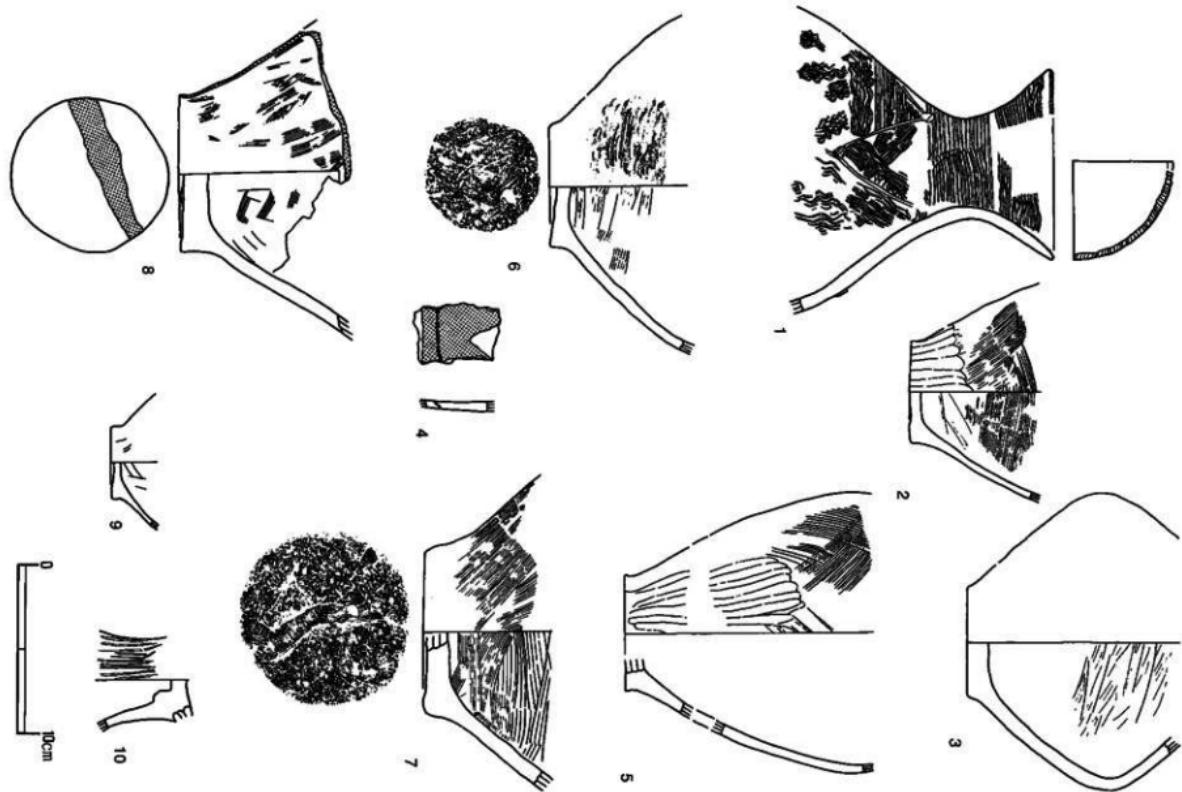
### (4)出土遺物(第27~31図)(図版15~18)

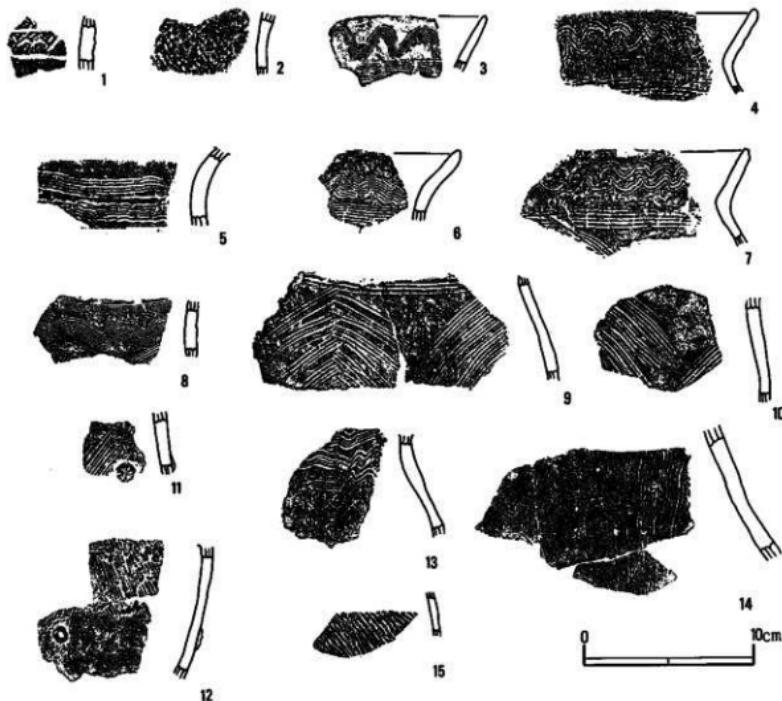
#### 1 土器(第27、28図)

第三面の土器はほとんどが1号溝中からの出土であり、それに1号溝の近いところから出土したもののが加わるもので、他からは出土していない。まず第27図1は2号溝が合流したすぐ下流の1号溝西壁際の平坦面からまとまって出土した土器。2もこの一群に含まれるが直接には接合しなかった。あるいは同一個体かもしれない。1は胴部上半部であるが櫛齒状工具による施文が中心で、頸部には平行櫛描線文、口縁部と胴部には波状文がみられる。頸部の平行線文帯は上下のやや深い沈線により区画されている。肩部には三角状に沈線が連続するが、三角の頂点には円形貼付文が付く。口径11.3cmを測り口唇には刻目が続く。胴部器壁の剥落は激しいが煤の付着する部分もある。色調は灰色から黒色。2は底部付近で、胴部および内面には刷毛目が少々残り、特に外面には櫛齒状工具によるとみられる、斜線の末端が延びている。色調灰褐色。3は壺の胴下半。器面はよく調整され磨かれているが、最大径部分を中心に煤が付着している。色調灰褐色。4は1号溝の底部から出土した胴部の小破片であるが、接合されている破片であることから図示した。光沢のある黒色物により接着されており、漆かと思われる。またこの破片の表面も光沢ある黒色を呈することから(スクリーントーン部分)、黒漆が塗装されているものとみられる。内面にも光沢はさほどではないものの、黒褐色の付着物が残る。5は破片から推定復元した壺。櫛齒状工具による斜線文が交差するが下端はヘラで削られる。内面には底部付近、外面には斜線文部分から上にそれぞれ炭化物が付着している。色調は明るい灰色。7も底部中心の破片で、外面には刷毛目、内面にはヘラ状の工具によるとみられる整形がなされる。底面には初あるいは茎状の压痕が認められる。色調は明るい灰色。6も底中心の破片。4や8と同じく黒色の塗布物がみられる。特に外面には光沢のある黒褐色の付着があり、4と同じ漆の可能性がある。底面には初痕が認められる。8は1号溝底部から出土した壺の底部。外面には細かい刷毛目が残るがさらに帯状に黒褐色の付着物が認められる(スクリーントーン)。特に底面では著しい。9は器壁3~4mmと薄い、小型の土器の底部である。10は高环とみられる脚部破片。6~8、10は1号溝底面近くから出土している。

第28図もほとんどが1号溝から出土したもので、破片資料である。1は壺の頸部破片で、縄文が施される土器。平行沈線内には縄文とともに半截竹管によるとみられる沈線が波状に入る。赤褐色の色調。2も縄文のみられる壺の頸部破片。色調灰褐色。3から7は壺の頸部から口縁部の破片で、櫛描き波状文のみられる土器。5を除き頸部に廉状文がめぐる。いずれも内外面に炭化物が付着するが、特に4、6、7の外面には著しい。8から10は頸部から肩部に

第27圖 第三面出土土器素描圖(1/3)





第28図 第三面出土土器拓本(1/3)

かけての破片。8では簾状文の下に波状文、9・10では羽状の沈線がみられる。いずれも外面黒色で煤が多く付着する。13も同様の器種であろう。11、12は円形貼付文の土器。貼付文については12はドーナツ状、11には細い刺突がみられる。12の外面には炭化物付着が著しい。14は胴部破片で、櫛歯状工具によるゆるやかな波状文が縦方向につけられている。色調赤褐色。15は細い条痕の土器。赤褐色を呈する。以上についての出土層位は、特に4、5、7~10、12、14が1号溝の底面付近。15が3号溝出土。

以上の土器の時期についてまとめると、器種では壺、甕、高杯がある。壺では櫛文の施されるもの(第28図1、2)と櫛描文(第27図1)とがある。第27図3、6~8も壺と思われるがこれらは胴下部であることから、文様はみられない。この内第27図1が特徴的な文様構成にある。特に櫛描文が多様されており、肩部には螺旋状の沈線文や円形貼付文が加わっている。また器形については強くつぼった頭部から外反しながら立ち上がる単純口縁で、最大径は胴下半部にある、やや縦長のものと推測される、このような特徴は長野県松本方面の中期後半から後期始めの土器群に類似する要素を含んでいる。胴の分かる第27図3も同様である。また、甕については波状文・簾状文・羽状文などの櫛描文が多用されており、中期後半から後期前半の感がある。ただ、波状文の密度からは古式の様相が窺われる。こうしてみると、櫛文をもつ土器については特に第28図1にみる波状沈線は栗林Ⅱ式にみられ、第27図1を含めた櫛描文の土器群は百瀬式に近いものとみられる。特に1の壺の胴部に施される櫛描波状文が縦方向にもなっていることは、中期の様相を止めるものと考えられる。従って、1号溝の走る第三面は弥生中期後半、それも後葉に位置づけられるものとしておきたい。

2 牙鑑(第29図)(図版16-1)

3号溝横の浅い窟みから出土したもの。長さ3cm、最大幅0.9cm、厚さ0.24cmの細い二等辺三角形状をなす。無茎で、えぐりこみに近い箇所に孔が貫通する。片面には牙を思わせる光沢ある表面が残る。猪牙製と思われる。

3 石器(第30図)(図版16-2)

1は1号溝の壁に張り付いた状況で出土した打製石斧。長さ23.5cm、刃部幅8.3cm、基部幅4.3cmを測る。片方の面には自然面を残しており、この面の刃部(地面に接すると見られる面)には磨滅痕が認められる。粘板岩製。2も粘板岩製の打製石斧破片。基部側は細いが片側は途中から有肩状に張り出し始めており、1よりも大型か。1号と3号とが分かれたH-17区からの出土。3は石片であるが打製石斧の破片の可能性がある。粘板岩。

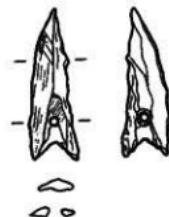
4 木製品(第30図、31図)

第30図4は円形に作られた製品であり、蓋のようなものか。直径8.8cm、厚さ1.5cm前後のヒノキ属の一種とされる。5は2群木材中から出土したもの。厚い板状の製品であるが、各面はよく削られ丸味がある。クヌギ節の一種。6は1号溝の西壁付近で、1群木材の近くから出土した杭。直径6.7cmほどの丸木を尖らしたもので、長さ35cmを測る。樹皮は残っていない。

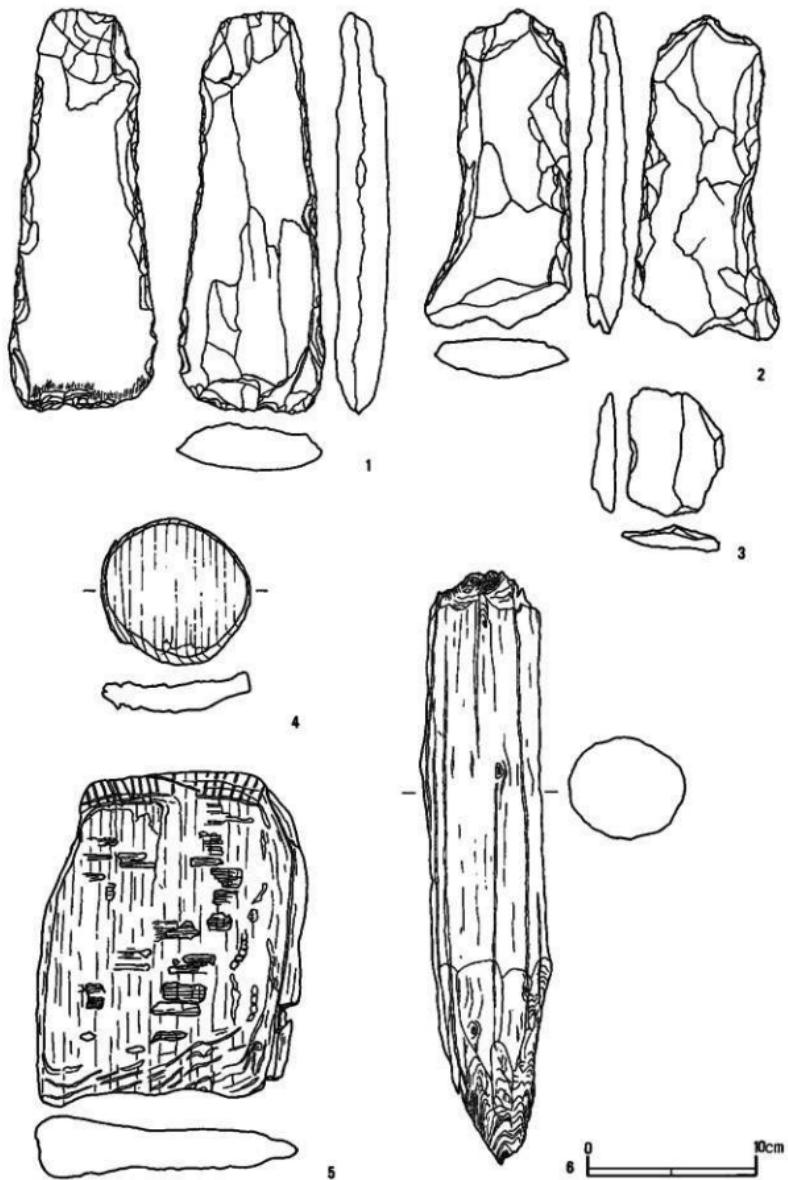
第31図1~4は1号溝1群木材中に含まれるもの。1は厚さ3cm弱の板材で、両端が細くなっている。これが人為的に加工されたものは疑問が残るが、加工したものとすれば戸にかかる部材ということもあり得る。長さ1.02m、最大幅15cm。2~4は丸木を半截し加工したとみられる木材。5、6は4群木材に含まれるもの。いずれもエノキ属の板材で、同一の建築物を構成していた建築用材と考えられる。5は厚さ5cmから3cmで小口の片方が厚い。6は断面が楔形をなすが、丸太から割り出す技術的な方法に起因するものであろうか。あるいはこのような形状を必要とする建物構造であったのだろうか。5は長さ179cm、最大幅12cm、6は長さ271cm、最大幅18cmを測る。

その他、流木や種子類等の自然遺物も多く出土した。これらについては、第4章に記載してあるがそのほかにも、木の葉が出土した。図版17-4がこれであるが、バラ科の植物と思われ特にサクラの可能性がある。写真是保存処理後のものであるが出土時同様に紅葉した感じの色合いである。

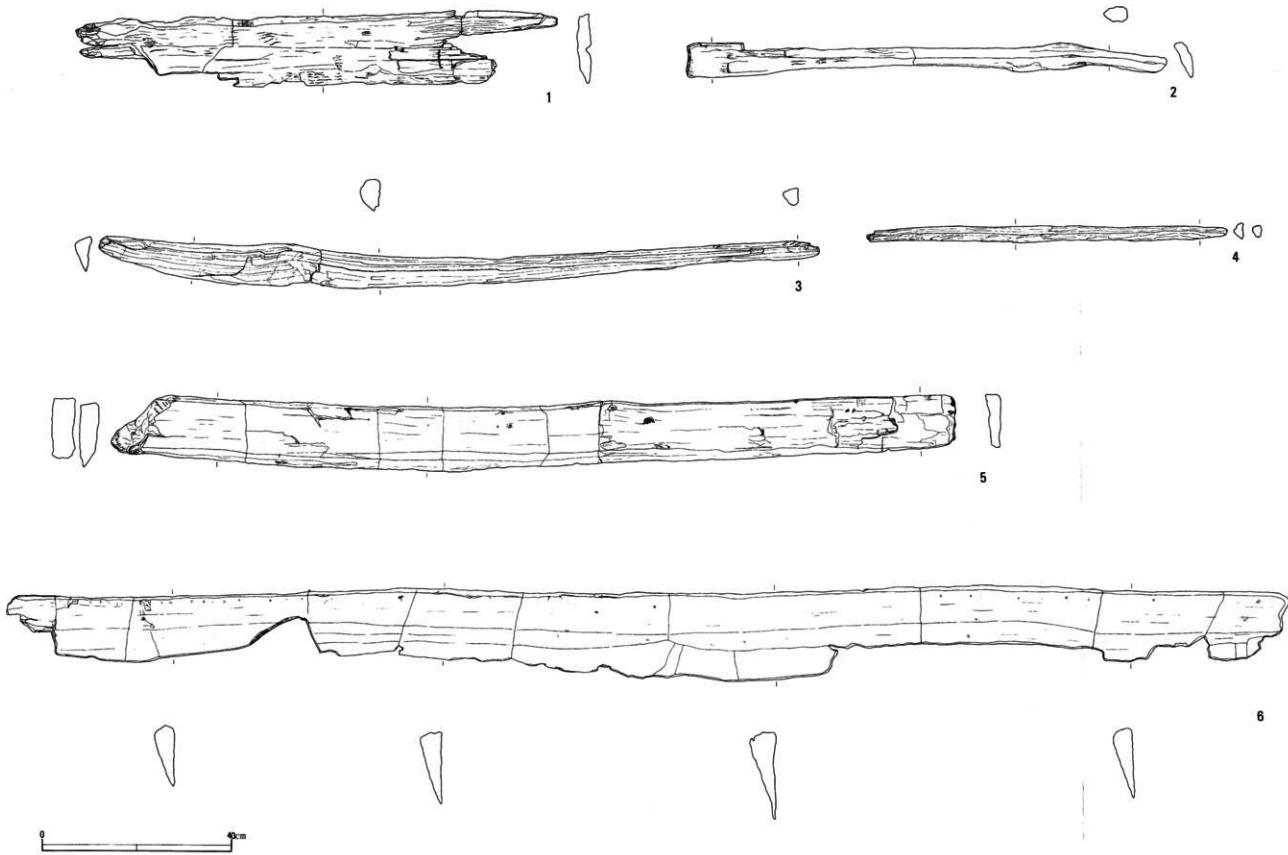
(新津 健)



第29図 牙鑑(1/1)



第30図 第三面出土石器・木製品実測図(1/3)



第31図 第三面出土木材実測図(1/8)

表1 第一面出土遺物一覧表

| 図  | 番号 | 名 称  |        | 出土地点       | 備考     |
|----|----|------|--------|------------|--------|
| 13 | 1  | 染付皿  | 口縁 1/3 | 上層         |        |
|    | 2  | かわらけ | 口縁 1/3 | H-20       | 熔融ガラス化 |
|    | 3  | ◆    | 1/4    | D-20表土下繊層  | ◆      |
|    | 4  | ◆    | 1/4    | H-12表土下繊層  | ◆      |
|    | 5  | ◆    | 底 1/4  | 1号土坑       | 一部熔融   |
|    | 6  | ◆    | 1/6 欠  | ◆          | 口縁に焼   |
|    | 7  | ◆    | 1/2    | ◆          |        |
|    | 8  | ◆    | 1/3    | ◆          |        |
|    | 9  | 鉢    | 底部     | 萬一面        |        |
| 14 | 1  | 下駄   | 完      | H-23       |        |
|    | 2  | 蓋    | 1/2    | F-22, 3号杭列 |        |
|    | 3  | 木製品  | 完      | C-15, 粘土中  |        |
|    | 4  | ◆    | ◆      | D-19, 粘土中  |        |
|    | 5  | 箱物   | 一部     | D-14       | 木釘残存   |
|    | 6  | 漆桶   | 1/2    | G-21, 3号杭列 |        |
|    | 7  | 折敷   | 1/2    | 3号杭列       | 一部焼ける  |
| 15 | 8  | 箸    | 完      | 1号土坑       |        |
|    | 9  | ◆    | 欠      | C-21, 粘土中  |        |
|    | 10 | ◆    | ◆      | D-18, 水田   |        |
|    | 11 | ◆    | ◆      | D-17, 水田下  |        |
|    | 12 | 木製品  | 完      | H-20       |        |
|    | 13 | 箆串   | 欠      | H-12, 3号杭列 |        |
|    | 14 | ◆    | ◆      | F-18       | 一部焼ける  |
|    | 15 | ◆    | 完      | F-10       | ◆      |
|    | 16 | ◆    | ◆      | F-20       | ◆      |
|    | 17 | ◆    | 欠      | F-16, 粘土中  |        |
|    | 18 | ◆    | ◆      | G-20, 3号杭列 | 一部焼ける  |
|    | 19 | ◆    | ◆      | F-19       | ◆      |
|    | 20 | ◆    | ◆      | H-17, 3号杭列 | ◆      |

表2 第一面杭一覧表

| 図  | 番号 | 長さcm  | 巾cm | 厚さcm | 杭列 | 樹種   | 備考     |
|----|----|-------|-----|------|----|------|--------|
| 16 | 1  | 87    | 11  | 2.6  | 3号 | ヒノキ属 | 2と接合   |
|    | 2  | 67    | 8.9 | 3.0  | ◆  | ◆    |        |
|    | 3  | 63.5  | 6   | 2.1  | ◆  | ◆    |        |
|    | 4  | 69    | 3.9 | 5.1  | ◆  | ◆    |        |
| 17 | 5  | 128   | 8.6 | 3.9  | ◆  | ◆    |        |
|    | 6  | 115   | 8.8 | 4.2  | ◆  | ◆    |        |
|    | 7  | 126   | 4.2 | 5.2  | ◆  | ◆    |        |
| 18 | 8  | 104   | 5.8 | 4    | ◆  | ◆    | 9と同一か  |
|    | 9  | 98.8  | 3.4 | 4.4  | ◆  | ◆    |        |
|    | 10 | 125   | 5   | 4.2  | ◆  | ◆    | 11と同一か |
|    | 11 | 79.5  | 4   | 3.3  | ◆  | ◆    |        |
| 19 | 12 | 117.8 | 4.2 | 5.6  | 1号 | ◆    | 転用     |
|    | 13 | 97.4  | 6.4 | 6.4  | ◆  | ◆    |        |

表3 第三面木製品一覧表

| 図  | 番号 | 種類  | 樹種     | 出土地点 |
|----|----|-----|--------|------|
| 30 | 4  | 蓋?  | ヒノキ属   | D-17 |
|    | 5  | 板   | クヌギ節   | 2群木材 |
|    | 6  | 杭   | アカメガシワ | 1群木材 |
| 31 | 1  | 板   | モミ属    | 1群木材 |
|    | 2  | 半截材 | コナラ属   | ◆    |
|    | 3  | ◆   | ケンボナシ属 | ◆    |
|    | 4  | 加工材 | モミ属    | ◆    |
|    | 5  | 板材  | エノキ属   | 4群木材 |
|    | 6  | ◆   | ◆      | ◆    |

表4 モモ計測表

| No. | 第32回 | 出土位置      | L    | W    | T      |
|-----|------|-----------|------|------|--------|
| 1   |      | 表土下繭層     | 2.20 | 1.70 | 1.35   |
| 2   |      | *         | 2.35 | 1.70 | 1.40   |
| 3   |      | *         | 2.25 | 1.65 | (1.50) |
| 4   |      | *         | 2.20 | 1.60 | 1.20   |
| 5   |      | *         | 2.60 | 2.15 | 1.60   |
| 6   |      | *         | 2.60 | 1.90 | 1.35   |
| 7   |      | *         | 2.10 | 1.65 | 1.15   |
| 8   |      | *         | 2.50 | 1.70 | 1.35   |
| 9   |      | 一面 No-792 | 2.95 | 1.95 | 1.55   |
| 10  |      | *         | 2.60 | 1.95 | 1.40   |
| 11  |      | *         | 2.45 | 1.50 | 1.15   |
| 12  |      | *         | 3.00 | 2.60 | (2.40) |
| 13  |      | *         | 2.50 | 2.60 | (2.50) |
| 14  | 1    | *         | 1.95 | 1.90 | 0.75   |
| 15  | 2    | *         | 2.60 | 2.20 | 1.70   |
| 16  | 3    | *         | 3.30 | 2.20 | 1.80   |
| 17  | 4    | 二面        | 2.60 | 2.20 | 1.55   |
| 18  | 5    | *         | 2.40 | 2.25 | 1.55   |
| 19  | 6    | *         | 2.75 | 2.35 | 1.70   |
| 20  | 7    | *         | 2.75 | 2.50 | 2.00   |
| 21  | 8    | 三面 1溝     | 2.80 | 2.20 | 1.65   |
| 22  | 9    | *         | 2.60 | 2.00 | 1.50   |
| 23  | 10   | 三面        | 2.50 | 2.00 | 1.50   |
| 24  | 11   | *         | 2.90 | 1.90 | 1.50   |
| 25  | 12   | *         | 2.40 | 2.25 | 1.55   |
| 26  | 13   | *         | 2.15 | 1.85 | 1.30   |

表5 クルミ計測表

| No. | 第32回 | 出土位置    | L    | W    | T      |
|-----|------|---------|------|------|--------|
| 1   | 14   | 一面 E-14 | 3.10 | 2.70 | (1.80) |
| 2   | 15   | 二面      | 3.05 | 2.75 | (3.00) |
| 3   | 16   | 三面 1溝   | 3.40 | 2.30 | 2.40   |
| 4   | 17   | *       | 3.50 | 2.35 | 2.15   |
| 5   | 18   | 三面      | 4.20 | 2.70 | 2.60   |
| 6   | 19   | *       | 2.70 | 2.70 | (2.30) |
| 7   | 20   | *       | 2.80 | 2.35 | (2.60) |
| 8   | 21   | *       | 2.35 | 2.40 | (2.00) |
| 9   | 22   | *       | 3.25 | 2.80 | (2.80) |
| 10  | 23   | *       | 2.60 | 2.65 | (2.50) |
| 11  | 24   | *       | 2.95 | 2.55 | (2.30) |
| 12  | 25   | *       | 3.10 | 2.20 | 2.50   |
| 13  | 26   | *       | 3.30 | 2.35 | 2.30   |

## 第4章 自然遺物についての調査・検討

### 第1節 植物遺存体

本遺跡の各面の土壌サンプルを水洗し、種子類を選別したものである。第一面では水田に堆積していた砂質土を探集したもので、水田址3と4が中心である。この水田址には自然木が大量に流れ込んでいた(第6図)が、この部分の土壌サンプルが大部分である。特にD-18・19区からのサンプルが多い。表6からも分かるように、ここからはホタルイやタガラシといった水田雑草に加えて、メロン仲間の種子や炭化したイネ・オオムギ・コムギが検出されており、鎌倉時代の栽培種を見るうえでの良好な資料を加えたことになる。第二面では水田と水路の土壌サンプルであつたがここでは有機質が少なかったことから、種子も多くない。第三面には砂質土や粘質土の堆積が豊富で調査中からクルミやトチ等の大型種子や皮が採集された。また1号溝中の堆積物は厚く、ここからのサンプルも多く探集し水洗選別を行なった。これらの資料は抽出後、パレオ・ラボ(株)に同定や考察を依頼した。以下にその成果を記載するが、紙面の都合から成果報告の一部(産出分類群の形態記載の項)は削愛するとともに、一覧表もまとめ直した箇所がある。

(新津)

### 東丹保遺跡I区から産出した大型植物化石

吉川純子(パレオ・ラボ)

#### 1. 試料及び分析方法

大型植物化石試料は、おもに弥生時代中期頃と推定される3面の粘土層、弥生時代後期と推定される2面の粘土層、鎌倉から室町時代と推定される1面の粘土層から、発掘調査時の現地取り上げ試料として採取された。3面には溝があり、1面には畦畔と土坑、旧河道が分布している。

各試料は、小瓶に約50%アルコールの液浸標本とし、保管してある。

#### 2. 大型植物化石の同定結果と若干の考察

##### a. 3面(弥生時代中期)

3面(弥生時代中期)の試料は、I-9、1溝と、3面とだけ記されている3試料である。木本は大変多く、温帯性針葉樹ではイヌガヤ、カヤ、モミ、モミ属を産出した。照葉樹は、わずかにヤブツバキを産出した。沢沿いに生育する落葉広葉樹はオニグルミ、サワグルミ、トノキ、ミズキ、サワシバを産出した。林分の縁辺に見られる、つる植物のフジ属、マタタビ、ブドウ属、カナムグラや、開けた場所にあるアカメガシワをわずかに産出している。また、アサダ、イヌシデ、イヌブナ、クヌギ、コナラ、ナラガシワ、ケヤキ、サクラ属サクラ節、イタヤカエデ、ミツデカエデ、イロハモミジ近似種、カジノキ、キハダ、ムクロジ、ホオノキ、エゴノキ、ハクウンボク、ニワトコを産出した。I-9からはナラガシワのみを産出した。タラノキは刺のみを産出し、核を産出しない。森林としてはモミ、カヤなどの針葉樹を交えた温帯樹林である。

草本では湿地性の植物としては、ウキヤガラ、ホタルイ属、ヤナギタデ近似種、ツリフネソウを産出した。比較的乾燥した場所に生育する種類としては、エノキグサ、ヘビイチゴ属/オランダイチゴ属/キジムシロ属を産出した。スマレ属、キランソウ属、キイチゴ属などは林縁などに多い。

また、メロン仲間、ヒョウタンはいずれもウリ科の栽培植物である。

堆積の場は湿地性草本が繁茂する湿地または流域で、周辺にナラガシワ、クヌギなどの落葉樹を主な構成種とし、温帯性針葉樹を交えた森林が広がっていたようである。

オニグルミは多量に産出しているが、完形や食痕のある核よりも、人為的に破壊されたと思われる、割れ目のある核や破片が大も多い。オニグルミ、メロン仲間、ヒョウタンは人為的に破棄された可能性がある。

b. 2面(弥生時代後期)

2面は弥生時代後期とされるが、わずかにトチノキとオニグルミを産出しただけであった。

c. 1面(鎌倉から室町時代)

1面(鎌倉から室町時代)からは、木本はオニグルミ、トチノキ、クリなどの比較的大きいものも産出しているが、量的には少ない。針葉樹では、マツ属単維管束亞属、ツガ属、モミ属、カヤ、サワラを産出している。しかし、マツ属とツガ属はかなり周囲がぼろぼろになっていて、遠方から運ばれたか、といったん堆積したものが洗い出されたようにも思われる。ブナの體斗を産出しているが、同様のことがいえるかもしれない。落葉樹ではハンノキ属、サワグルミ、ヒメグルミ、サワシバ、クワ属、ウメ、サクラ属サクラ節、ナナカマド近似種、ミズキ、ハクウンボク、ニワトコなどである。つる植物のフジ属、ブドウ属、ノブドウ、マタタビも産出している。これらの構成種をみると、針葉樹を交えた温帯樹林であることが分かる。

草本では、栽培種のイネ、オオムギ、コムギ、メロン仲間を産出する。特に着目する点は、イネの穂は未炭化の状態で産出されるが、イネ、オオムギ、コムギの胚乳部分がいずれも炭化した状態で産出することである。これら3種の穀類を近接して栽培するかどうかは不明であるが、炭化していることから、人為的に手を加えられていたことは確かであろう。

水田または湿地に伴って産出していると思われる草本は、ヒルムシロ、ホタルイ属、タガラシ、ウキヤガラ、コナギ、イボクサ、イヌビエなどである。また、イシミカワ、ポンクトクタデなどのタデ属も湿地を好む。未炭化のイネ、水田雜草、畦畔跡の確認などから、まずこの場所で水田耕作が行われていた可能性は極めて高い。

ヒユ属、シロザ近似種、オナモミ、メナモミ、エノキグサ、ギシギシ属などは比較的乾燥した場所を好み、ムギ類などの堆積もある。このことは湿地の周辺が開けたことを意味しているとも考えられる。とくにヒユ属は畑作にともなってできる日当りのよい乾燥地に多い。

しかしながら、水田や耕作に伴った植物化石が堆積しているにも関わらず、同層準で温帯性の森林を構成している多種に及ぶ植物化石をも産出しているということは、以下のようなことが考えられる。多量の流水による周辺からの植物の流入、または時間的に少し差がある層位がほとんど区別がつかず、同層準として採取されてしまった場合である。特に、泥炭層や粘土層などは不整合が分かりにくいことが多い。

以上、産出した大型植物化石群から、弥生時代には、人が関与していたものの、周辺に森林があった湿地的環境があったが、鎌倉時代には畦畔や植物化石に示されるような、耕作を主とする環境が存在したことが推定できる。そして、植物化石を含む層の間にはさまれる砂礫層や、植物化石の構成から、比較的流入の激しい不安定な環境であったと推定される。

表6-1. 大型植物化石分析結果一覧表1

| 分類群名      | 産出部位  | 1面 | 2面 | 3面<br>1ミリ | 他  |
|-----------|-------|----|----|-----------|----|
| 木本        |       |    |    |           |    |
| カヤ        | 種子    | 1  |    | 29        | 12 |
|           | 葉     | 1  |    | 13        |    |
| イヌガヤ      | 種子    |    |    | 2         |    |
| モミ        | ぼう鶴   |    |    | 1         |    |
| モミ属       | 葉片    | 23 |    | 125       |    |
| ツガ属       | 風化球果  | 10 |    |           |    |
| マツ属單球管束亞属 | 球果    | 1  |    |           |    |
| サワラ       | 小枝    | 6  |    |           |    |
| サワグルミ     | 核完形   | 3  |    | 1         |    |
|           | 核半分   | 8  |    | 5         |    |
| オニグルミ     | 核完形   |    |    | 3         | 2  |
|           | 完形食痕  |    |    | 2         | 11 |
|           | 完形風化  |    |    | 2         | 1  |
|           | 完形割れ  |    |    | 1         | 1  |
|           | 半分    |    | 1  | 6         | 6  |
|           | 半分食痕  | 2  |    | 2         |    |
|           | 半分割れ  | 1  |    | 73        | 8  |
|           | 破片    | 1  |    | 163       | 17 |
| ヒメグルミ     | 核半分   | 1  |    |           |    |
| イヌシデ      | 果実    | 3  |    | 13        | 17 |
| サワシバ      | 果実    | 1  |    | 14        | 5  |
| アサダ       | 果実    |    |    | 26        | 10 |
| ハンノキ属     | 果軸    | 3  |    |           |    |
| ブナ        | 競斗    | 1  |    |           |    |
| イヌブナ      | 競斗    |    |    | 2         |    |
| コナラ       | 果実    | 2  |    | 3         |    |
|           | 競斗    |    |    | 4         |    |
|           | 果実    |    |    | 6         | 1  |
| ナラガシワ     | 競斗    |    |    | 20        | 19 |
|           | 果実    |    |    | 8         |    |
| クヌギ       | 競斗    |    |    | 14        | 23 |
|           | 果実    |    |    | 5         | 3  |
| クリ        | 果実破片  | 1  |    |           |    |
| ケヤキ       | 果実    |    |    | 23        | 36 |
| ムクノキ      | 内果皮破片 | 5  |    |           |    |
| カジノキ      | 内果皮   | 3  |    | 2         |    |
| クワ属       | 種子    | 3  |    | 1         |    |
| ホオノキ      | 種子    |    |    | 1         |    |
| キイチゴ属     | 核     | 9  |    | 1         |    |
| ウメ        | 核     | 5  |    | 1         |    |

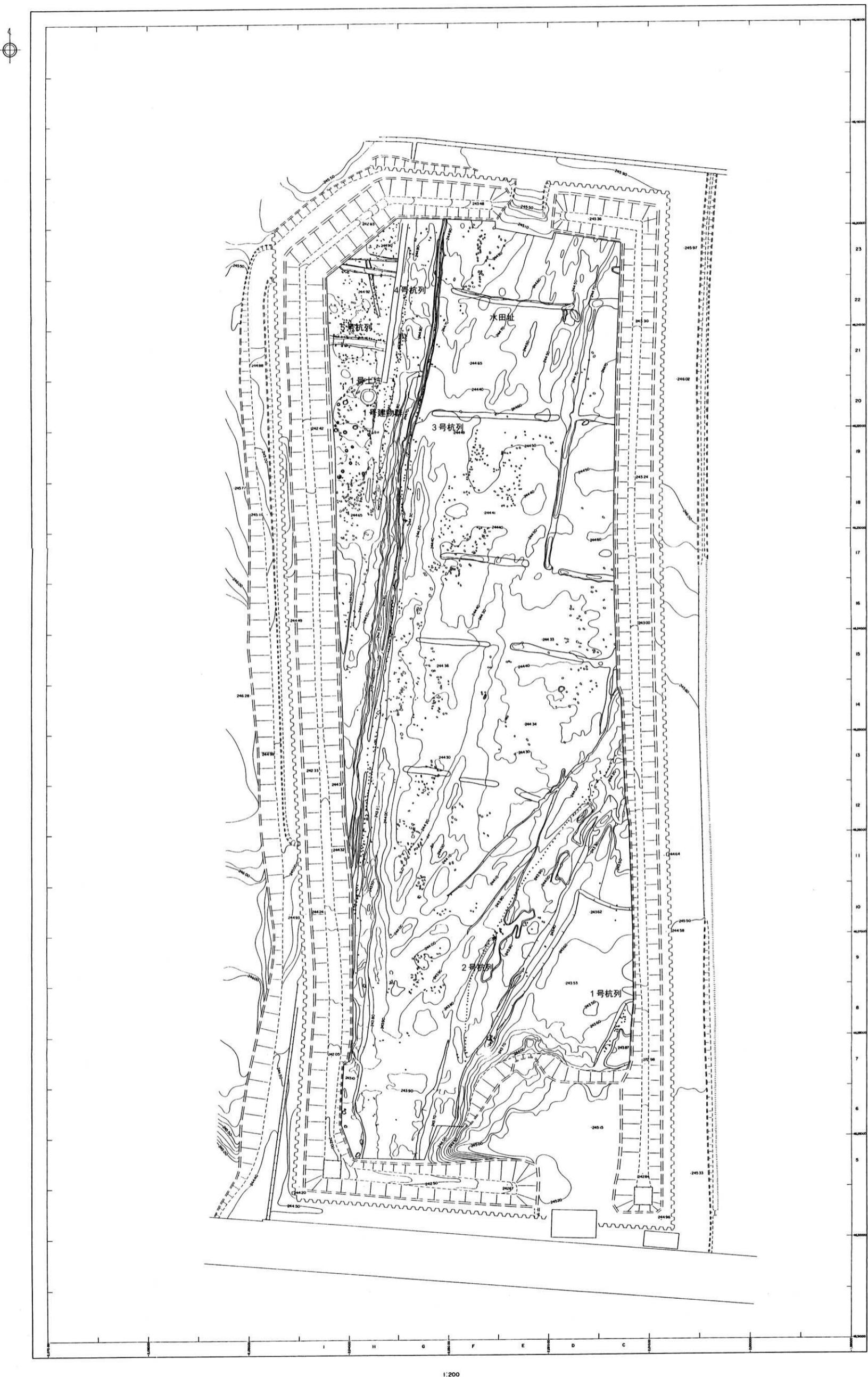
表6-2. 大型植物化石分析結果一覧表2

| 分類群名      | 産出部位  | 1面  | 2面 | 3面<br>1ミリ | 他  |
|-----------|-------|-----|----|-----------|----|
| サクラ属サクラ属  | 核     | 6   |    | 1         | 1  |
| ナナカマド近似種  | 核     | 20  |    |           |    |
| バラ科       | 刺     | 8   |    |           |    |
| フジ属       | 芽     | 3   |    | 14        | 3  |
| マメ科       | 種子    | 10  |    |           |    |
| サンショウ     | 内果皮   | 13  |    |           |    |
| キハダ       | 種子    |     |    | 1         |    |
| アカメガシワ    | 種子    |     |    |           | 2  |
| モチノキ属     | 種子    | 10  |    |           |    |
| ミツバウツキ    | 種子    | 1   |    |           |    |
| イロハモミジ近似種 | 果実    |     |    | 2         | 3  |
| イタヤカエデ    | 果実    |     |    | 5         | 2  |
| ミツデカエデ    | 種子    |     |    | 1         | 5  |
| トチノキ      | 果実破片  | 4   |    | 62        | 32 |
|           | 幼果    |     | 1  | 7         | 15 |
|           | 種子完形  | 1   |    | 6         | 2  |
|           | 種子破片  | 1   |    | 8         | 2  |
|           | 幼種子   | 1   |    | 10        | 5  |
| ムクロジ      | 種子    |     |    | 28        | 9  |
| ブドウ属      | 幼種子   |     |    | 3         | 2  |
| ノブドウ      | 種子    | 15  |    |           |    |
| マタタビ      | 種子    | 5   |    | 6         |    |
| ヤブツバキ     | 種子    |     |    | 2         |    |
| タラノキ      | 刺     | 12  |    |           |    |
| ミズキ       | 内果皮   | 28  |    | 3         | 10 |
| クマノミズキ    | 内果皮   |     |    | 3         | 3  |
| エゴノキ      | 内果皮   |     |    | 3         | 3  |
| ハクウンボク    | 内果皮   | 1   |    | 4         |    |
| ニワトコ      | 核     | 3   |    |           |    |
| 草本        |       |     |    |           |    |
| ヒルムシロ     | 果実    | 1   |    |           |    |
| イネ        | 穎     | 64  |    |           |    |
|           | 炭化胚乳  | 16  |    |           |    |
| オオムギ      | 炭化胚乳  | 6   |    |           |    |
| コムギ       | 炭化胚乳  | 18  |    |           |    |
| ムギ類       | 炭化胚乳片 | 8   |    |           |    |
| イヌビエ近似種   | 穎     | 8   |    |           |    |
| ウキヤガラ     | 果実    | 4   |    | 2         |    |
| ホタルイ属     | 果実    | 653 |    | 16        |    |

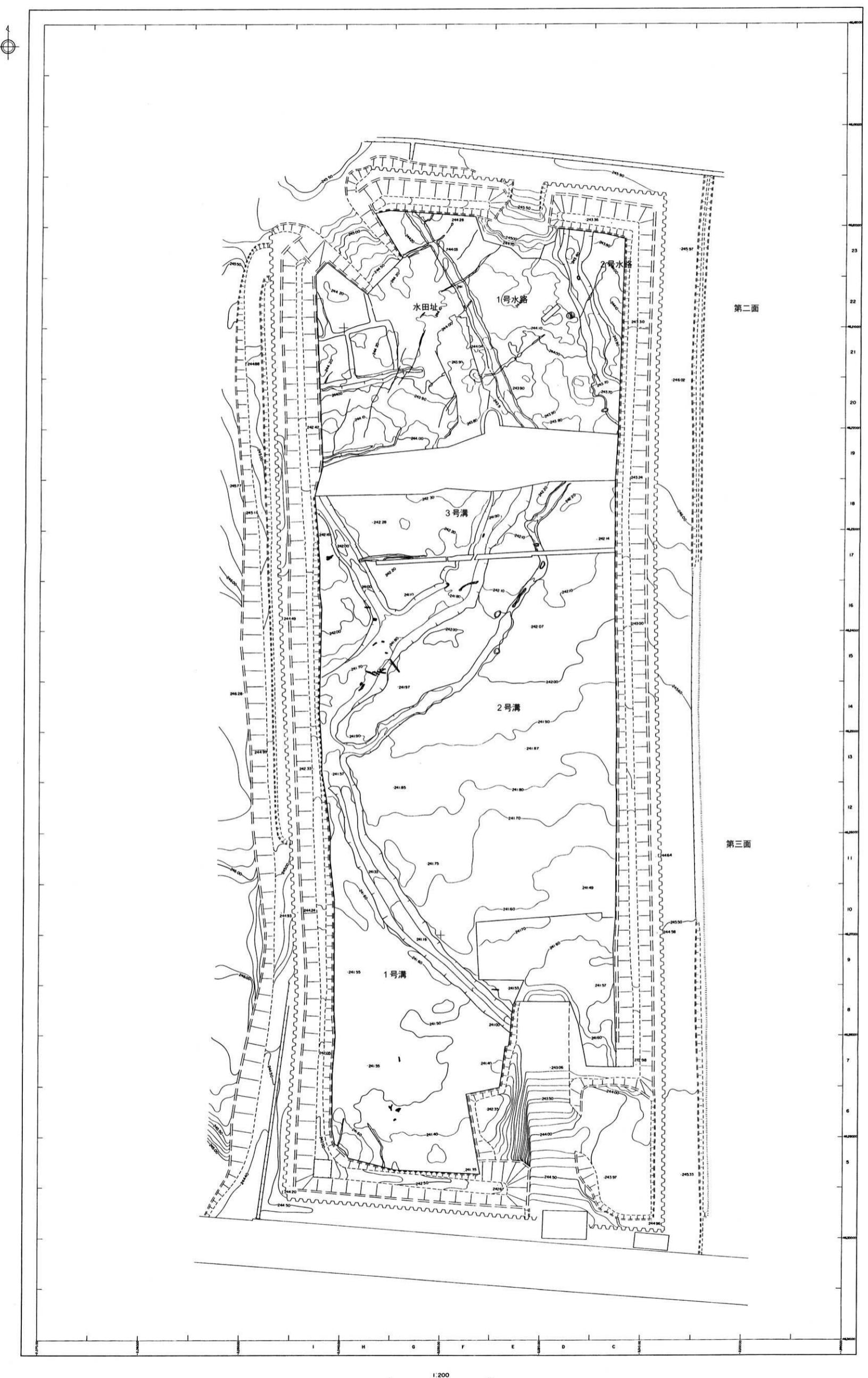
表6-3. 大型植物化石分析結果一覧表3

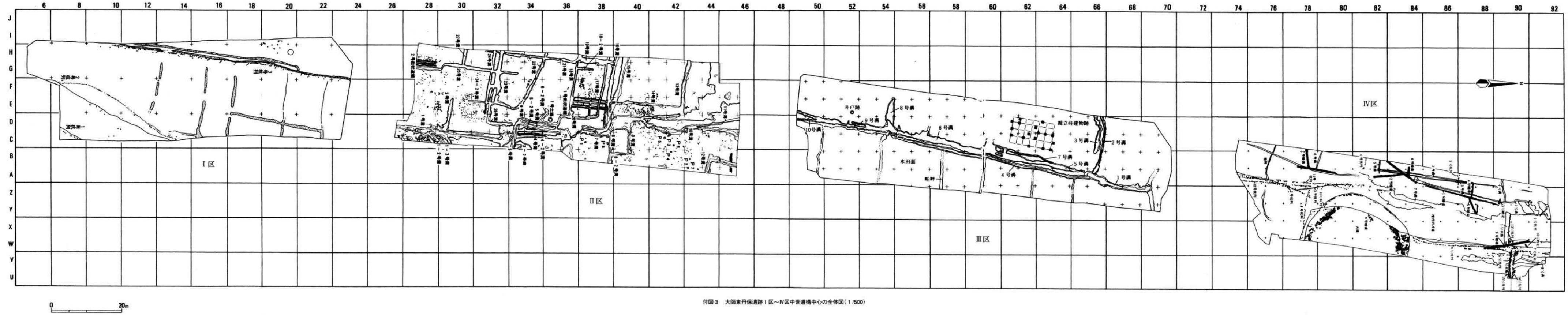
| 分類群名      | 産出部位 | 1面 | 2面 | 3面<br>1ミリ | 他 | 分類群名    | 産出部位 | 1面  | 2面 | 3面<br>1ミリ | 他 |
|-----------|------|----|----|-----------|---|---------|------|-----|----|-----------|---|
| スゲ属       | 果実   | 69 |    | 7         |   | ノミノツヅリ  | 種子   | 11  |    |           |   |
| カヤツリグサ科   | 果実   | 1  |    | 1         |   | ナデシコ科   | 種子   | 1   |    | 1         |   |
| ツユクサ      | 種子   | 2  |    |           |   | タガラシ    | 果実   | 193 |    |           |   |
| イボクサ      | 種子   | 27 |    |           |   | キンポウゲ属  | 果実   | 8   |    |           |   |
| コナギ       | 種子   | 14 |    |           |   | アオツヅラフジ | 種子   | 3   |    |           |   |
| カナムグラ     | 種子   | 12 |    | 2         | 5 | ヘビイチゴ属  | 核    | 7   |    | 5         | 1 |
| カラムシ属     | 種子   |    |    | 1         |   | ツリフネソウ  | 種子   | 3   |    | 1         |   |
| ギシギシ属     | 果実   | 10 |    |           |   | エノキグサ   | 種子   | 12  |    | 4         |   |
| イシミカワ     | 果実   | 49 |    |           |   | スミレ属    | 種子   |     |    | 1         |   |
| タニソバ      | 果実   | 25 |    |           |   | セリ科     | 果実   | 1   |    |           |   |
| サナエタデ近似種  | 果実   | 64 |    |           |   | キランシウ属  | 果実   |     |    | 1         |   |
| ヤナギタデ近似種  | 果実   | 92 |    | 3         |   | ナス属     | 種子   | 5   |    |           |   |
| ボントクタデ近似種 | 果実   | 5  |    |           |   | メロン仲間   | 種子   | 435 |    | 3         |   |
| シロザ近似種    | 種子   | 35 |    | 1         |   | ヒヨウタン   | 種子   |     |    | 54        |   |
| ヒユ属       | 種子   | 14 |    |           |   | ヒヨウタン類  | 果実破片 | 2   |    |           |   |
| ノミノスマ近似種  | 種子   | 10 |    |           |   | ウリ科     | 種子   |     |    | 1         |   |
|           |      |    |    |           |   | オナモミ    | 果実   | 1   |    |           |   |
|           |      |    |    |           |   | メナモミ    | 果実   | 7   |    |           |   |

付図1 大師東丹保遺跡I区第一面全体図

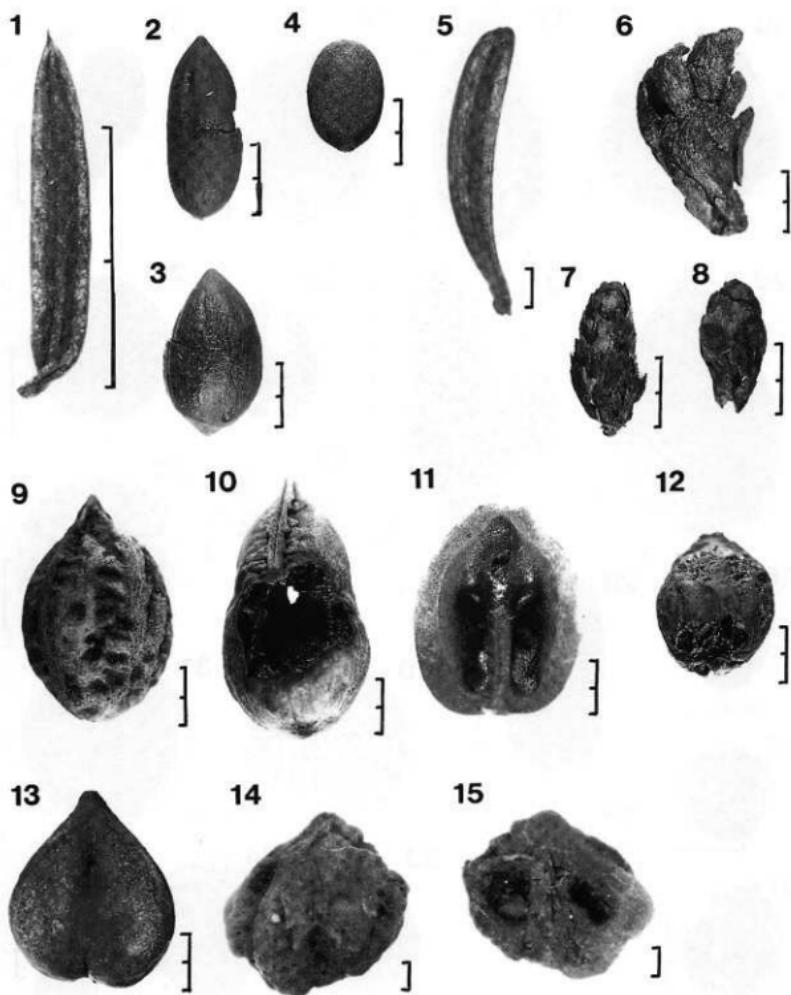


付図2 大師東丹保遺跡I区第二・三面全体図



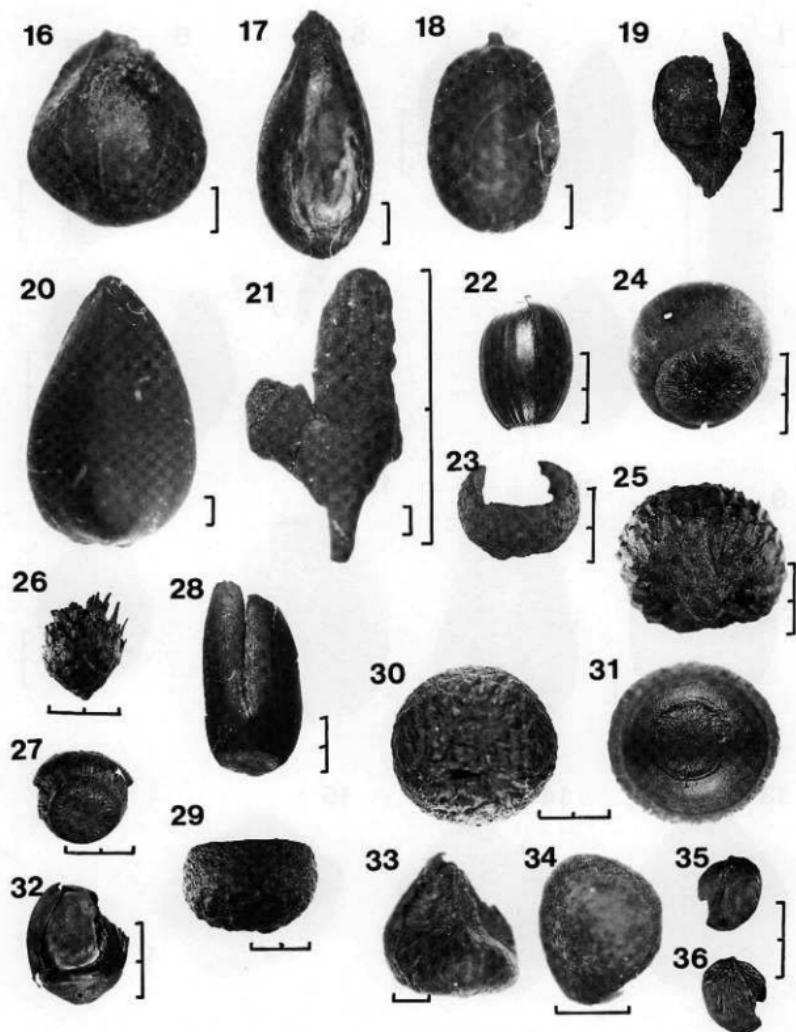


付図3 大師東丹保遺跡I区～IV区中世遺構中心の全体図(1/500)



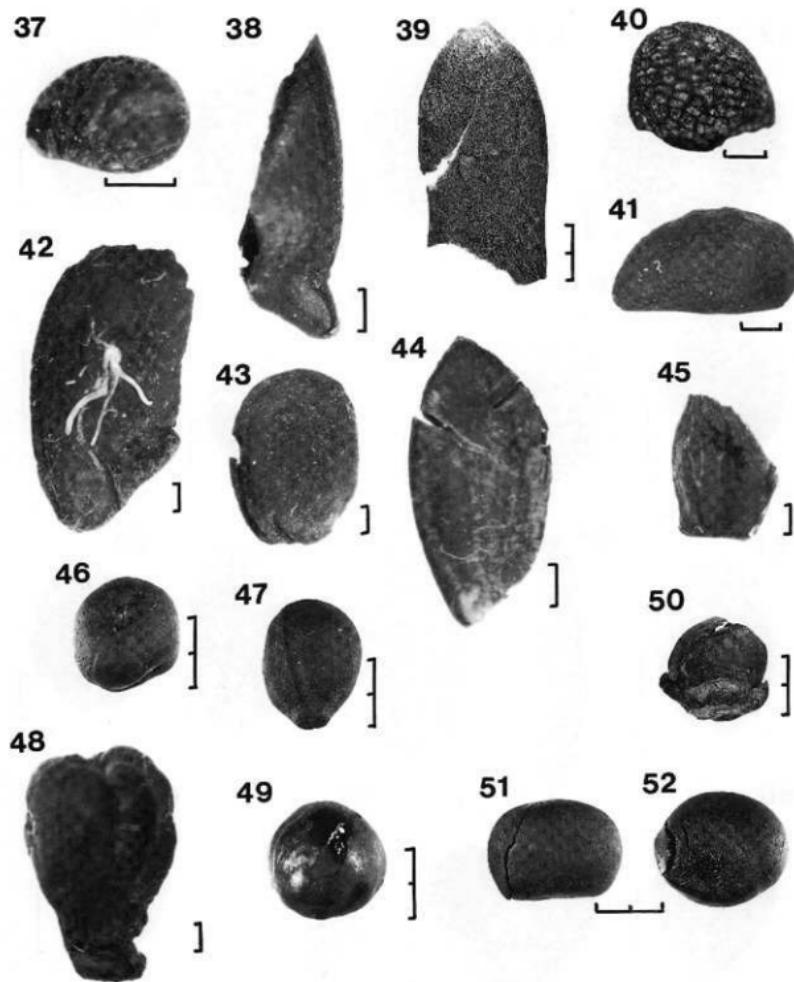
図版 1. 東丹保遺跡の大型植物化石 1 スケールは 1 cm、5.14.15.は 1 mm

1.カヤ、葉 2.3.カヤ、種子 4.イヌガヤ、種子 5.モミ属 6.マツ属単維管束亞属、球果 7.8.ツガ属、球果  
9.オニグルミ、完形 10.オニグルミ、食痕 11.オニグルミ、割れ目のある核 12.オニグルミ、風化核 13.ヒメグルミ、核 14.15.サワグルミ、果実



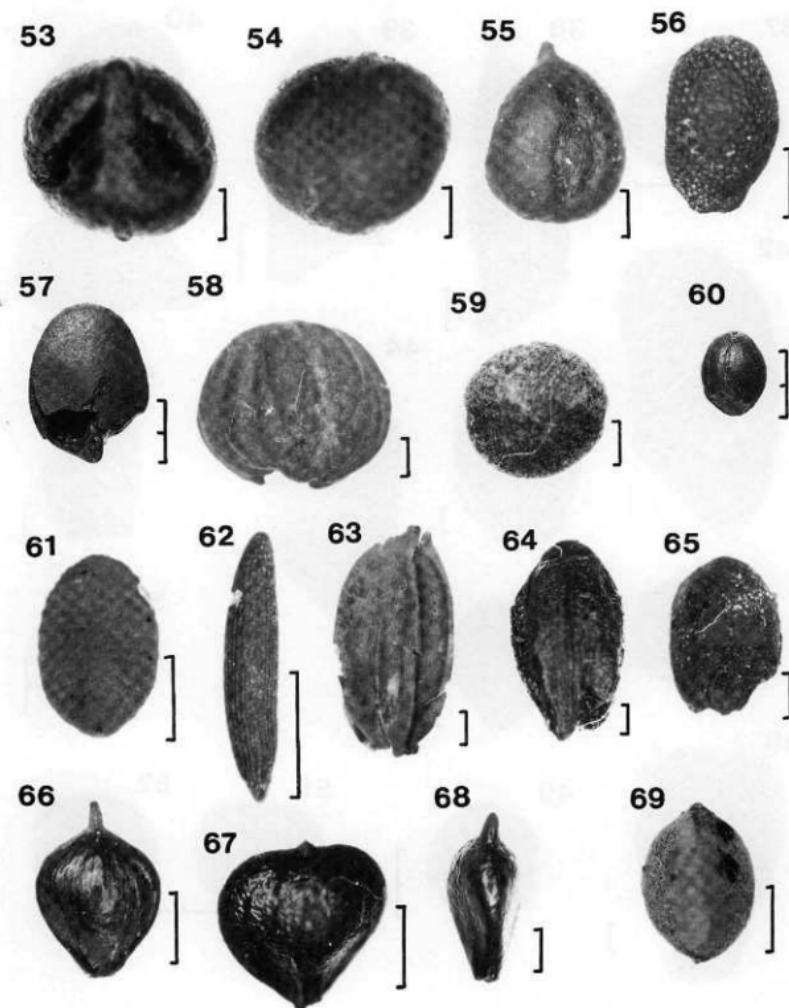
図版2.東丹保遺跡の大型植物化石2 スケールは1cm、16.17.18.20.33.34.は1mm

- 16.イヌシデ、果実 17.アサダ、果実 18.サワシバ、果実 19.ブナ、殻斗 20.イヌブナ、果実 21.イヌブナ、殻斗  
 22.コナラ、果実 23.コナラ、殻斗 24.クヌギ、果実 25.殻斗 26.クヌギ、殻斗 27.ナラガシワ、果実 28.ナラ  
 ガシワ、果実 29.30.31.ナラガシワ、殻斗 32.コナラ属、果実 33.ケヤキ、果実  
 34.クワ属、種子 35.36.ホオノキ、種子



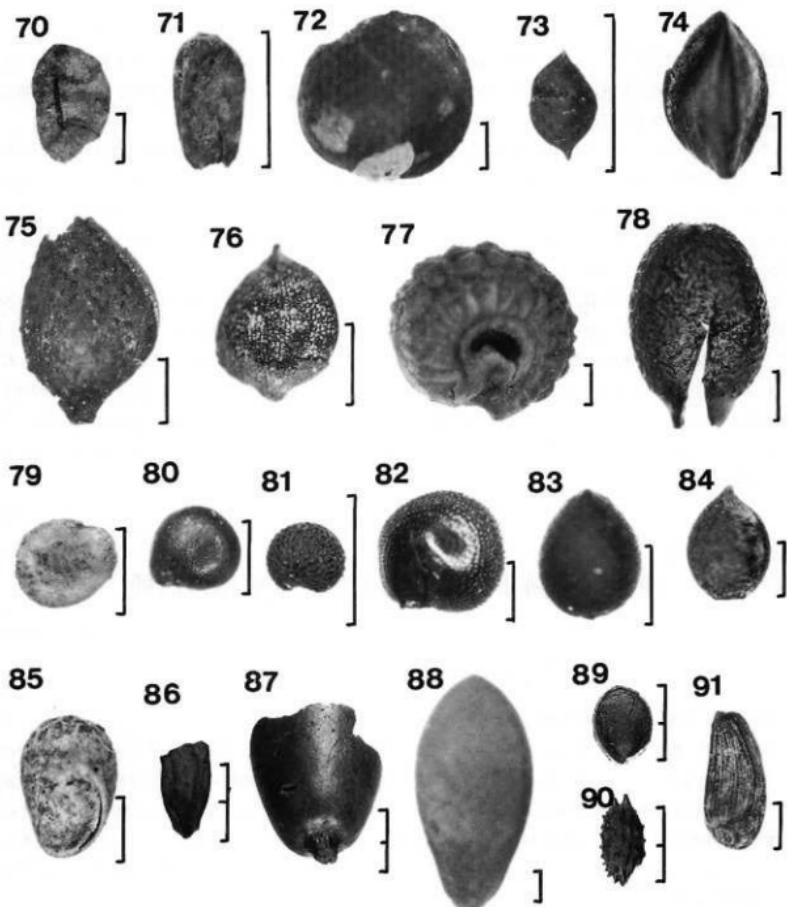
図版3 東丹保遺跡の大型植物化石 3 スケール 1 mm、39.46.47.49.50.51.は 1 cm

37.キイチゴ属、核 38.フジ属、芽 39.フジ属、さや片 40.サンショウウ、内果皮 41.キハダ、種子 42.イタヤカエデ、果実 43.イタヤカエデ、種子 44.ミツデカエデ、果実 45.イロハモミジ近似種、果実 46.47.トチノキ、果実 48.トチノキ、未熟果 49.トチノキ、種子 50.ムクロジ、果実 51.52.ムクロジ、種子



図版4.東丹保遺跡の大型植物化石4 スケールは1mm、57.60.は1cm

53.54.ノブドウ、種子 55.ブドウ属、種子 56.マタタビ、種子 57.ヤブツバキ、種子 58.ミズキ、内果皮 59.クマノミズキ、内果皮 60.ハクウンボク、内果皮 61.ニワトコ、核 62.イバラモ属、種子 63.イネ、穎 64.オオムギ、炭化穎果 65.コムギ、炭化胚乳 66.スゲ属、果実 67.ホタルイ属、果実 68.ウキヤガラ、果実 69.カヤツリグサ科、果実



図版5.東丹保遺跡の大型植物化石5 スケールは1mm、86.87.89.90.は1cm

70.イボクサ、種子 71.コナギ、種子 72.カヌムグラ、種子 73.カラムシ属、種子 74.ギシギシ属、果実 75.ヤナギタデ近似種、果実 76.タニソバ、果実 77.アオツヅラフジ、種子 78.ツリフネソウ、種子  
 79.タガラシ、果実 80.シロザ近似種 81.ノミノツヅリ、種子 82.ナデシコ科、種子 83.エノキグサ、種子 84.スミレ属、種子 85.キランソウ属、果実 86.ヒヨウタン、種子 87.ヒヨウタン類、果皮 88.キュウリ属メロン仲間、種子 89.ウリ属、種子 90.オナモミ、果実 91.メナモミ、果実

## 第2節 樹種について

本遺跡は低地に位置することから、木材や流木などが多く出土した。これらについてサンプルを採取し、パリノ・サーヴェイ(株)に依頼し樹種の同定を行なった。サンプルの採取は第一面の1号杭列、2号杭列、3号杭列、第三面の建築用材と流木を中心に行なった。

まず1号杭列については17本ある内の9本を、2号杭列は38本の内5本、3号杭列は430本中の109本をそれぞれ選択した。その結果、2号杭列でヒノキ属とモミ属とがほぼ半数であった以外、全体ではヒノキが圧倒的に多い傾向が出された。ちなみに109本と最も多くサンプリングした3号杭列では、89本(82%)がヒノキ属、13本(12%)がモミ属、他にトネリコ属6本、キハダ1本という結果であった。抽出しなかったものも全体に類似した木目であったことから、やはりヒノキ属が多く用いられたことが推定できる。

第三面では1点が蓋状の木製品(ヒノキ属)、1点が杭(アカメガシワ)の他は、建築用材および切断されたとみられる木、それに流木であった。表中の用途項目にある「木」というのが切断された木を表す。建築用材については、板材を中心に面取りされたもの、構築物の部分あるいは道具の柄などの可能性あるものをこの名称で表現した。これらについてはクリ、モミ、コナラ、エノキなどの属が用いられている。特に4群(I-5,6区)から出土した長大な板材2枚はいずれもエノキ属であった。これらの木材集中の状況や実測図については、第26図、30図、31図参照。以下にパリノ・サーヴェイ(株)からの成果を記載するが、紙面の都合から解剖学的特徴および現世種の一般的性質の項目については報告を受けているものここでは割愛した。

(新津)

## 東丹保遺跡I区から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

山梨県における過去の木材利用に関する検討は、堂の前遺跡、柳坪遺跡、身洗沢遺跡等で行われてきた(パリノ・サーヴェイ株式会社、1986; 高橋、1987; 千野、1991)。これらの調査結果を見ると、住居構築材と考えられる炭化材にはコナラ属コナラ亜属コナラ節、板状の加工を施す木製品にはヒノキ属、鐵などの農具にはクヌギ節が多く使用されている。釜無川右岸の御動使川扇状地および周辺地域では、二本柳遺跡において斎事を中心とした木製品や畦畔上の立木について樹種同定が行われ、斎事や杭材にヒノキ属やスギ、畦畔上の立木にヤナギ属が多いことが明らかとなっている(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表)。このうち、畦畔のヤナギ属については、植栽された背景に当該期の信仰等の可能性が指摘されている。

今回調査が行われた大師東丹保遺跡は、御動使川扇状地と戸川扇状地に挟まれた沖積地に位置し、I区およびII区の調査で多数の木製品などが出土している。本報告では、このうちI区から出土した、弥生時代中期の流木および木製品、鎌倉時代の杭材等の樹種を明らかにし、過去の植生および木材利用に関する検討を行う。

### 1. 試料

試料は、I区の杭列等から出土した杭を中心とする木製品199点(No.1~181、183~200)である。各試料の詳細については、樹種同定結果とともに表7に示した。

### 2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の徒手切片を作製、ガム・クロラール(脱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微

鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### 3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。No.125, 191, 194, 195の4点は保存が良好ではなく、樹種の特定には至らなかった。これらの試料については、観察できた範囲で木材組織の形態を記した。その他の試料は、十分な観察ができず近似種としたものもあるが、針葉樹3種類(モミ属の一種、ヒノキ属の一種、カヤ)、広葉樹18種類(オニグルミ、ヤナギ属の一種、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種、コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種、コナラ属アカガシ亜属の一種、クリ、エノキ属の一種、ケヤキ、ヤマグワ、カツラ、クスノキ科の一種、イヌエンジュ、アカメガシワ、キハダ、ニガキ、ヤマウルシ、ヌルデ、トネリコ属の一種)に同定された。

(中略)

### 4. 考察

#### (1) 弥生時代の植生について

弥生時代中期の流木18点には、10種類(モミ属・ヤナギ属・アカガシ亜属・クリ・エノキ属・ケヤキ・ヤマグワ・カツラ・イヌエンジュ属・ニガキ)が認められた。流木については、遠距離から流れてきたとは考えにくいことから、遺跡からそれほど遠くない上流部の森林植生を反映していると考えられる。確認された種類には、暖温帯～冷温帯までの種類が含まれており、これらが当該期の遺跡周辺に生育していたと考えられる。

本遺跡周辺では、二本柳遺跡、油田遺跡、向河原遺跡において、花粉分析から古植生に関する検討が行われている(パリノ・サーヴェイ株式会社、未公表)。それらの結果によれば、本地域では基本的に植生の急激な変化はみられず、扇状地上にはモミ・ツガ・スギ等の温帯針葉樹が卓越する植生が推定されている。また、周辺には落葉広葉樹や常緑広葉樹も生育する、暖温帯～冷温帯にかけての植生が成立していたと考えられている。これは、今回検出された木材の樹種構成と調和的であり、本遺跡周辺においても二本柳遺跡や油田遺跡などと同様の植生がみられたものと推定される。

#### (2) 木材利用について

木製品は鎌倉時代の杭を主とし、他に弥生時代中期の建築材57点(No.124～180)と弥生時代中期の蓋1点(No.123)がある。

建築材には、15種類(モミ属・ヒノキ属・カヤ・オニグルミ・ヤナギ属・クヌギ節・コナラ節・クリ・エノキ属・ヤマグワ・クスノキ科・キハダ・アカメガシワ・ヌルデ・ケンボナシ属)が認められた。これらの木材には、流木で認められたものが多く、遺跡周辺に生育していた樹木を利用していたと考えられる。木材に多くの種類が認められる結果は、用途によって使用される種類が異なっていた可能性がある。しかし、本地域における建築材の樹種についての情報は少なく、現時点での過去の木材利用について把握することは困難である。今後、使用目的や部位等が推定できる建築材が出土した際には、その樹種に関する情報を蓄積していくことが必要である。

蓋はヒノキ属であった。ヒノキ属は、軸方向組織の多くが仮道管で占められるため、木理が直立で、板状の加工が比較的容易に行える。遺跡から出土した、板状の加工を必要とする木製品にもヒノキ属は多数確認されており(島地・伊東、1988; 伊東、1990)、古くから木材の性質を利用した選択があったことがうかがえる。今回の結果は、これまで多くの遺跡で認められてきた傾向と調和的である。

鎌倉時代の杭材には、4種類(モミ属・ヒノキ属・キハダ・トネリコ属)が認められ、ヒノキ属がその多くを占める。杭にヒノキ属が多く用いられる傾向は、隣接するII区や二本柳遺跡でも認められた(前出)。杭材という用途から、木材は遺跡内および遺跡周辺で容易に入手できる木材が利用されたと推定される。このことから、遺跡周辺でこれらの樹木が生育していたことが推定される。確認された各種類の生態性等を考慮すれば、モミ属・ヒノキ属は御動使川属

状地などの扇状地上や山地に、トネリコ属は沖積地や谷沿い等に生育していたことが推定される。また、ヒノキ属については植林の可能性も考えられるが、現時点では断定できない。杭材は周辺で入手可能であったこれらの樹木の枝などを伐採したり、流木等を利用したと推定される。

#### <引用文献>

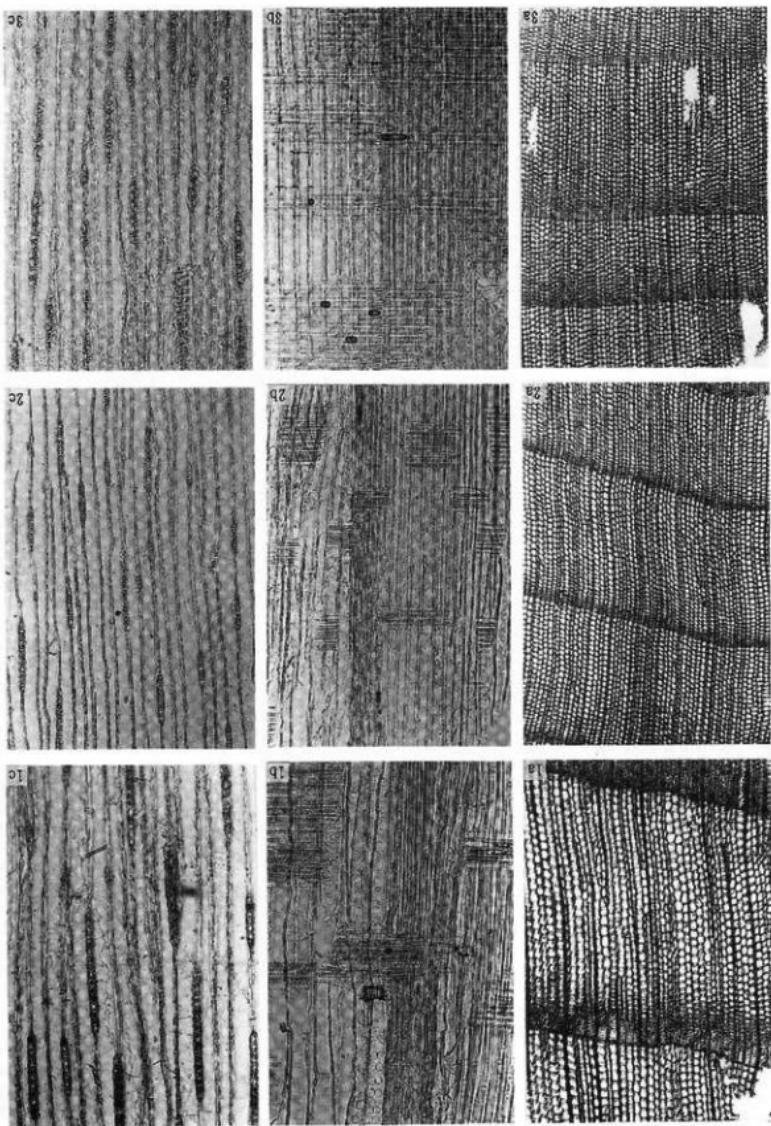
- 千野裕道(1991)身洗沢遺跡出土木製品の樹種について、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要、7、p.33-39.
- 平井信二(1979~1982)木の事典 第1巻~第17巻、かなえ書房。
- 伊東隆夫(1990)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ、木材研究・資料、26、p.91-189.
- 北村四郎・村田 源(1971、1979)原色日本植物図鑑 木本編Ⅰ・Ⅱ、453p., 545p., 保育社。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1986)柳坪遺跡出土材試料同定報告、山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集「柳坪遺跡 中央自動車道長坂インターチェンジ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」、p.165-167、山梨県教育委員会・日本道路公团、
- 島地 謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、296p., 雄山閣。
- 高橋利彦(1987)炭化材について、「山梨県蘿崎市 中田本遺跡・堂の前遺跡」、p.56-60、蘿崎市教育委員会・岐北土地改良事務所。

表7 樹種同定結果

| 番号   | 遺構  | 用途   | 時代   | 樹種名  |
|--|---|--|--|--|
| 1<br>109   | 3号杭列  | 杭  | 鎌倉時代   | ヒノキ属の一種 89本<br>モミ属の一種 13本<br>トネリコ属の一種 6本<br>キハダ 1本   |
| 110<br>114   | 2号杭列  | 杭  | 鎌倉時代   | ヒノキ属の一種 2本<br>モミ属の一種 3本  |
| 115<br>122<br>181  | 1号杭列  | 杭  | 鎌倉時代   | ヒノキ属の一種 8本<br>トネリコ属の一種 1本  |
| 123<br>124<br>125<br>126<br>127<br>128<br>129<br>130               | 3面1溝<br>3面1溝 2群<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇                       | 蓋<br>建築材<br>木<br>木<br>木<br>建築材<br>木<br>木                       | 弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期                     | ヒノキ属の一種<br>モミ属の一種<br>広葉樹（散孔材）<br>ヤナギ属の一種<br>オニグルミ<br>モミ属の一種<br>モミ属の一種<br>モミ属の一種  |
| 131<br>132<br>133<br>134<br>135<br>136<br>137<br>138<br>139<br>140 | 3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇  | 建築材<br>建築材<br>建築材<br>建築材<br>建築材<br>建築材<br>建築材<br>建築材<br>杭<br>木 | 弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期 | クスノキ科の一種<br>クリ<br>モミ属の一種<br>モミ属の一種<br>ケンボナシ属の一種<br>コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種<br>モミ属の一種<br>クリ<br>アカメガシワ<br>ヒノキ属の一種                 |
| 141<br>142<br>143<br>144<br>145<br>146<br>147<br>148<br>149<br>150 | 3面1溝 3群<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇<br>3面1溝 ◇ | 木<br>木<br>建築材<br>木<br>建築材<br>建築材<br>建築材<br>木<br>建築材<br>建築材     | 弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期<br>弥生時代中期 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種<br>コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種<br>モミ属の一種<br>ヤナギ属の一種<br>モミ属の一種<br>コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種<br>モミ属の一種<br>ヤナギ属の一種<br>クリ<br>クリ |

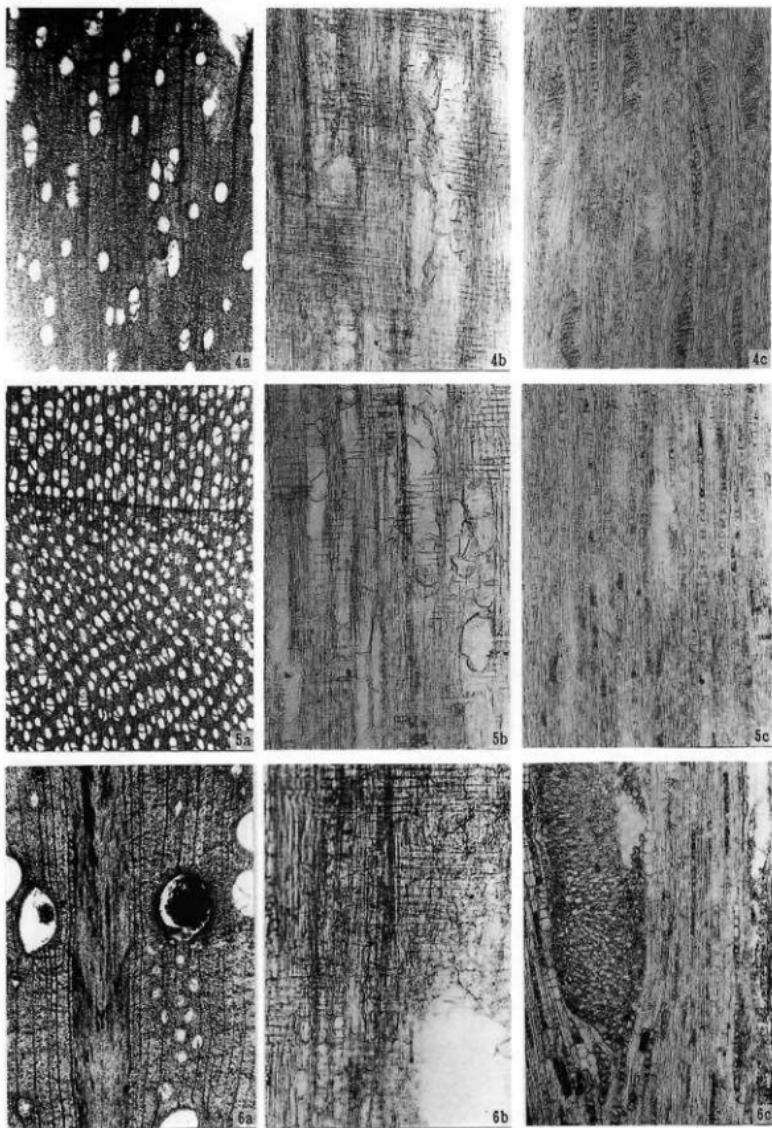
| 番号  | 造構         | 用途  | 時代     | 樹種名              |
|-----|------------|-----|--------|------------------|
| 151 | 3面1溝 +     | 建築材 | 弥生時代中期 | クリ               |
| 152 | 3面1溝 +     | 建築材 | 弥生時代中期 | ヌルデ              |
| 153 | 3面1溝 4群    | 木   | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 154 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | カヤ               |
| 155 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 |
| 156 | 3面1溝 +     | 建築材 | 弥生時代中期 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 |
| 157 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | モミ属の一種           |
| 158 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | モミ属の一種           |
| 159 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 |
| 160 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | キハダ              |
| 161 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | カヤ               |
| 162 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 163 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | クスノキ科の一種         |
| 164 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | ヤマグワ             |
| 165 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | モミ属の一種           |
| 166 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | モミ属の一種           |
| 167 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 168 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 |
| 169 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | モミ属の一種           |
| 170 | 3面1溝 +     | 木   | 弥生時代中期 | ヒノキ属の一種          |
| 171 | 3面1溝 2群    | 木   | 弥生時代中期 | モミ属の一種           |
| 172 | 3面I-5.6 1群 | 建築材 | 弥生時代中期 | コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 |
| 173 | 3面I-5.6 +  | 建築材 | 弥生時代中期 | エノキ属の一種          |
| 174 | 3面I-5.6 +  | 木   | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 175 | 3面I-5.6 +  | 建築材 | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 176 | 3面I-5.6 +  | 木   | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 177 | 3面I-5.6 +  | 木   | 弥生時代中期 | ヤナギ属近似種          |
| 178 | 3面I-5.6 +  | 木   | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 179 | 3面I-5.6 +  | 木   | 弥生時代中期 | エノキ属の一種          |
| 180 | 3面I-5.6 +  | 建築材 | 弥生時代中期 | エノキ属の一種          |
| 181 | 1面1号杭列     | 杭   | 鎌倉時代   | トネリコ属の一種         |
| 183 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | ニガキ              |
| 184 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | ケヤキ              |
| 185 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | エノキ属の一種          |
| 186 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | エノキ属の一種          |
| 187 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | イヌエンジュ属の一種       |
| 188 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | ケヤキ              |
| 189 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | コナラ属アカガシ亜属の一種    |
| 190 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | モミ属の一種           |
| 191 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | 広葉樹(散孔材)         |
| 192 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 193 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | クリ               |
| 194 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | 針葉樹              |
| 195 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | 広葉樹(環孔材)         |
| 196 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | ヤマグワ             |
| 197 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | ケヤキ              |
| 198 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | カツラ              |
| 199 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |
| 200 | 3面1溝       | 流木  | 弥生時代中期 | ヤナギ属の一種          |

a : 水口, b : 犀目, c : 條目  
3.  $\text{M}_2\text{Ti}$  (No.154)  
2.  $\text{Ca}_2\text{Ti}_3\text{O}_7$  (No.1)  
1. 玉藻の一種 (No.81)



図版 1 木材の顯微鏡写真(1)

図版2 木材の顕微鏡写真(2)



4. オニグルミ (No.127)

5. ヤナギ属の一種 (No.176)

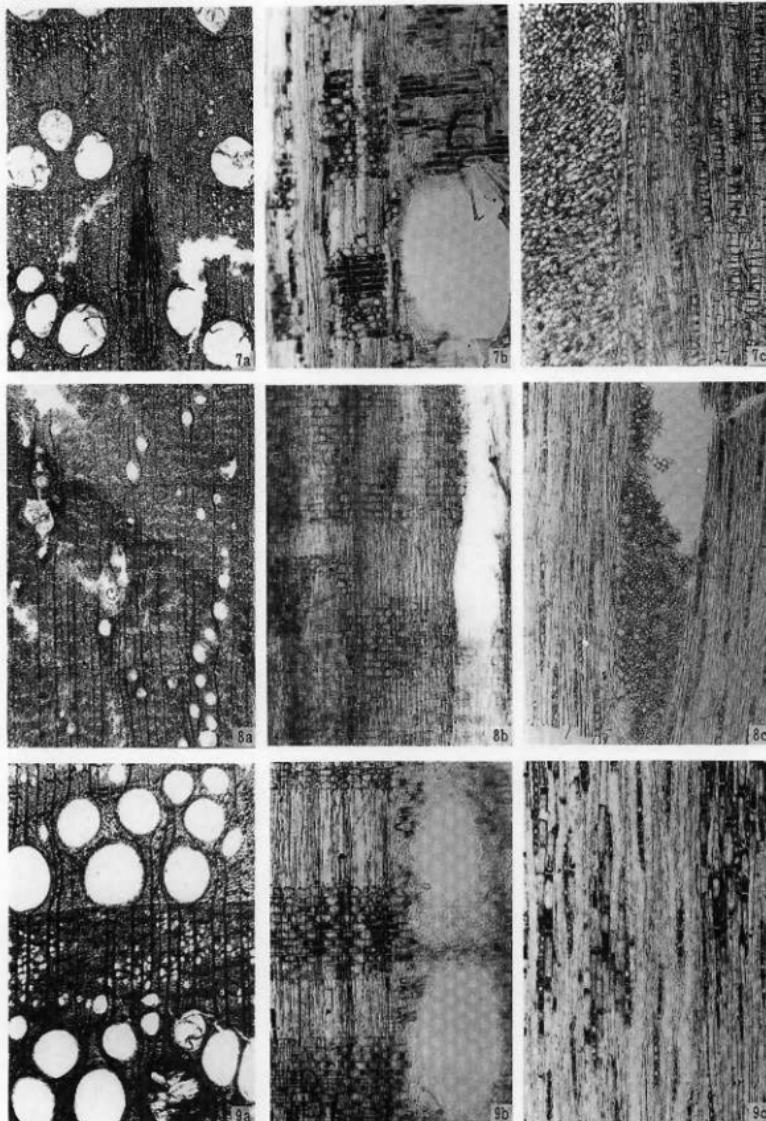
6. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (No.141)

a : 木口, b : 横目, c : 板目

200 μm : a

200 μm : b, c

図版3 木材の顕微鏡写真(3)



7.コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種(No.136)

8.コナラ属アカガシ亜属の一種(No.189)

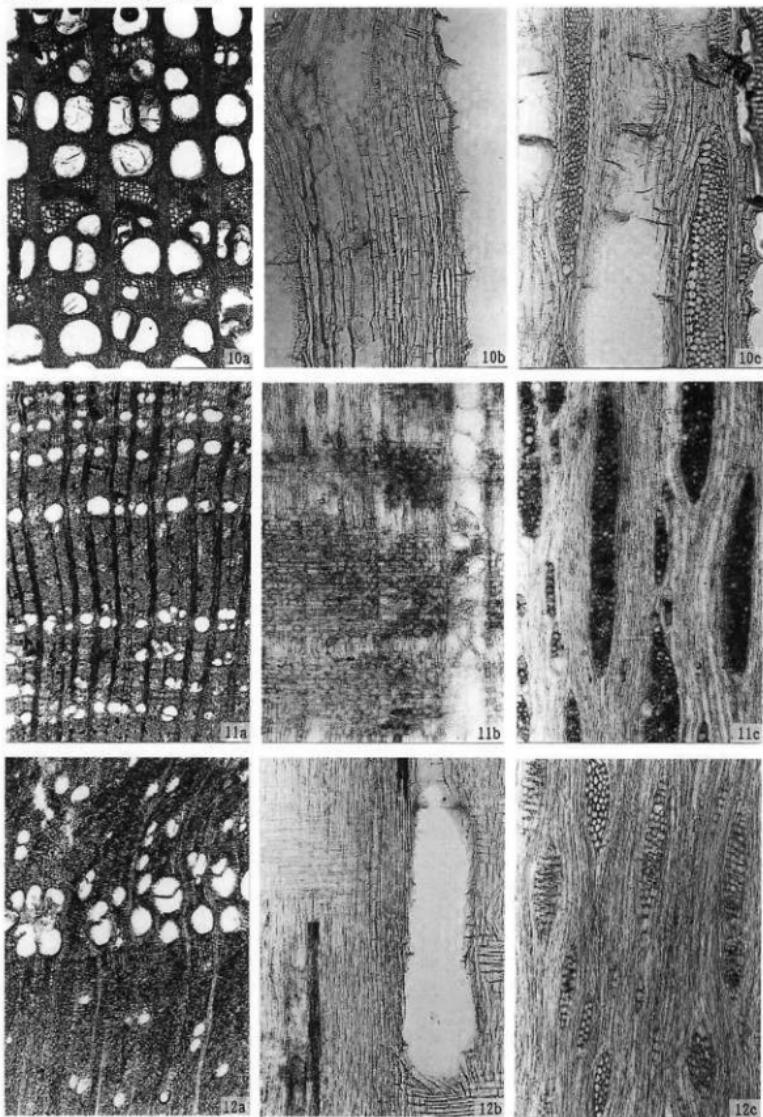
9.クリ(No.193)

a:木口, b:柾目, c:板目

200 μm : a

200 μm : b, c

図版4 木材の顯微鏡写真(4)



10.エノキ属の一種

11.ケヤキ (No.184)

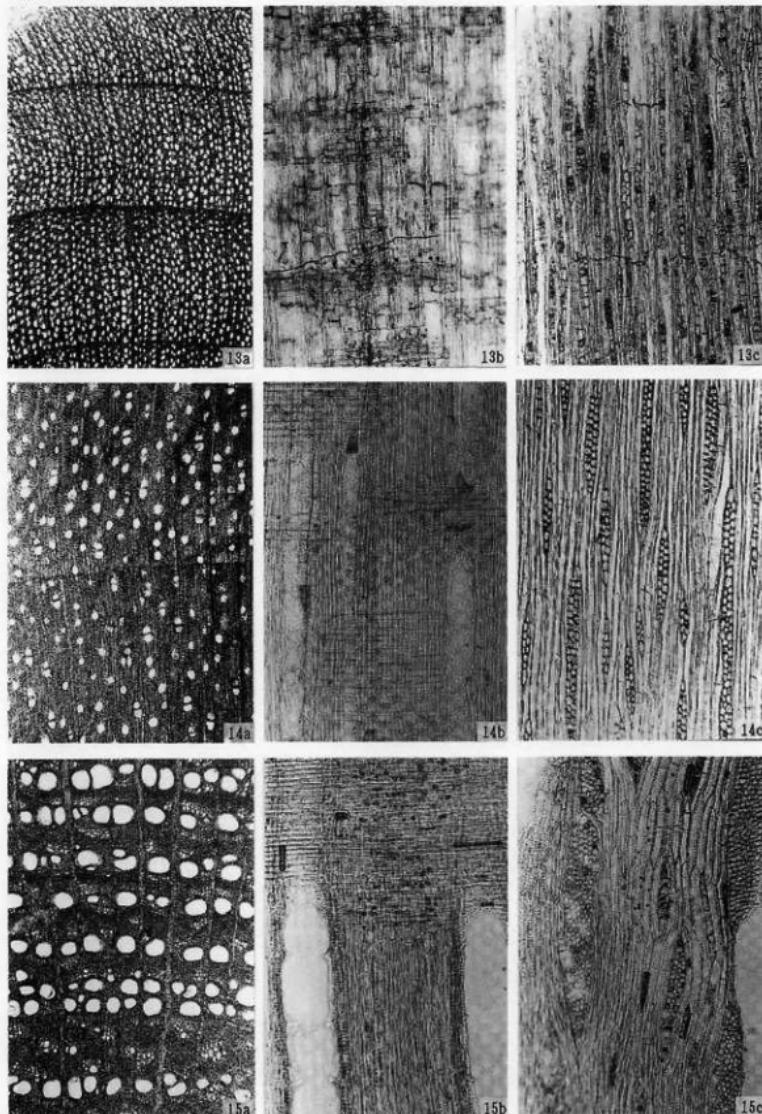
12.ヤマグワ (No.164)

a:木口, b:径目, c:板目

200  $\mu\text{m}$  : a

200  $\mu\text{m}$  : b, c

図版5 木材の顕微鏡(5)



13.カツラ (No.198)

14.クスノキ科の一種 (No.131)

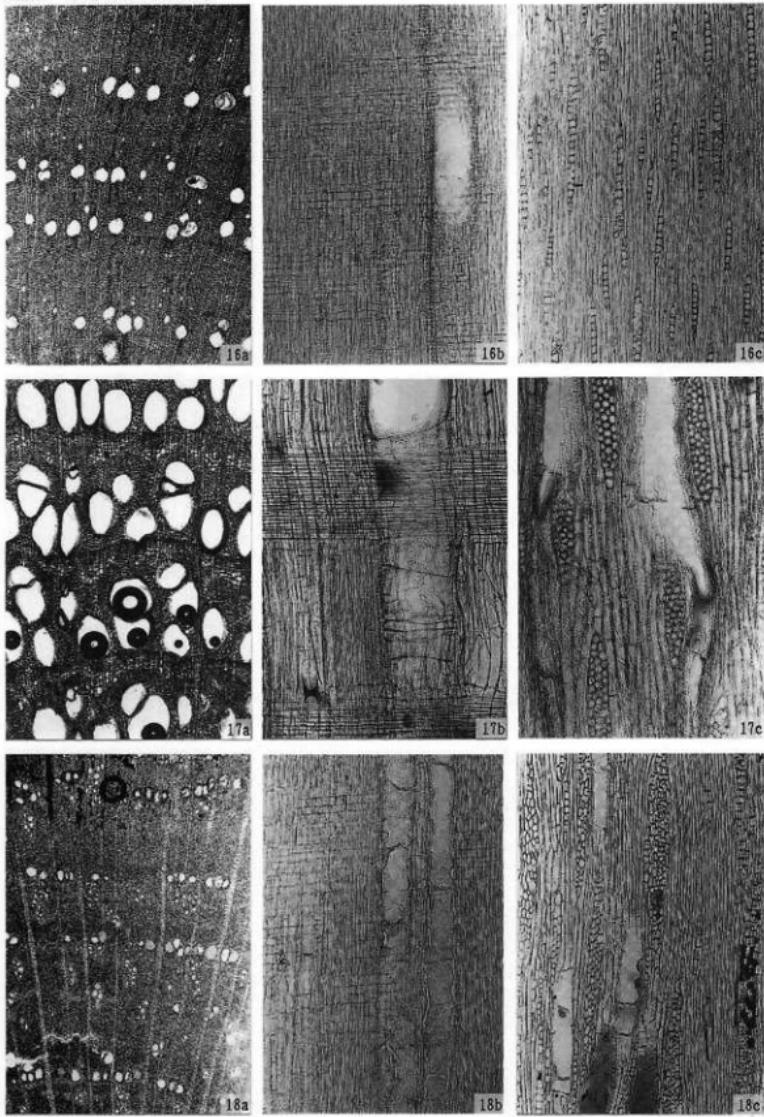
15.イヌエンジュ属の一種 (No.187)

a:木口, b:径目, c:板目

200 μm : a

200 μm : b, c

図版 6 木材の顕微鏡写真(6)



16.アカメガシワ(No.139)

17.キハダ(No.94)

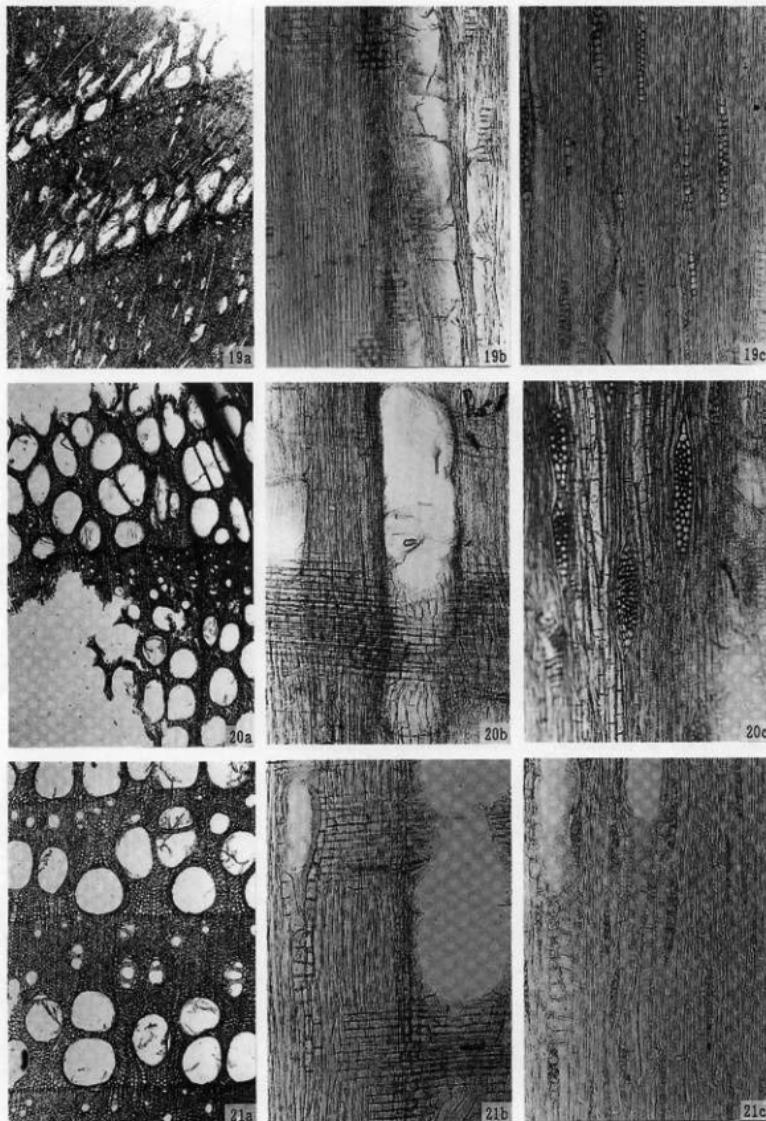
18.ニガキ(No.183)

a:木口, b:柾目, c:板目

200  $\mu\text{m}$  : a

200  $\mu$  : b, c

図版7 木材の顕微鏡写真(7)



19.スルデ (No.152)

200 μm : a

20.ケンボナシ属の一種 (No.135)

200 μm : b, c

21.トネリコ属の一種 (No.181)

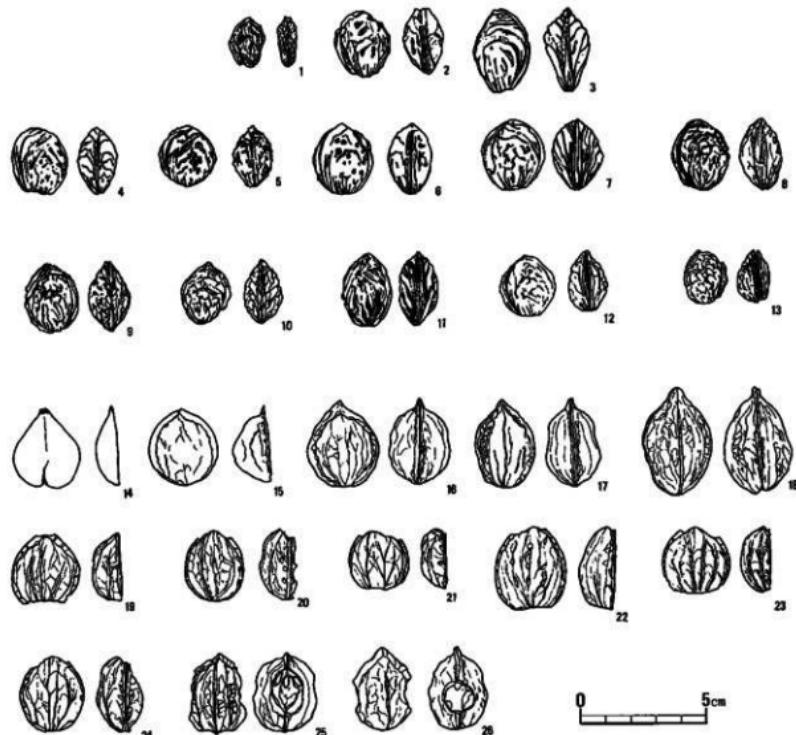
a : 木口, b : 横目, c : 板目

### 第3節 モモ、クルミについて(第32図)

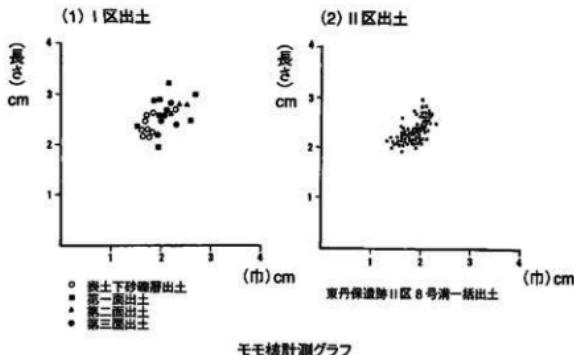
#### (1) モモ(図版18)

本遺跡からは合計26点の桃核が出土した。表4のとおり各面から出土している。特に第一面ではⅠ区からの出土は少ないが、隣接するⅡ区からは相当の量が出土している。詳しくはⅡ区の報告書を参照されたいが、ことに壺串とともに溝中から出土したものは110点がまとまっている。祭祀につながる遺物であることから、鎌倉時代の面である第一面からの出土はそれなりにうなずけるものである。ほかに弥生後期である第二面からは4点、弥生中期の面である第三面からも6点が出土している。ここでは、これら各時代にわたる桃核について比較するとともに、その意味を検討してみる(第32図1~3・一面、4~7・二面、8~13・三面)。

まず種子の大きさについてグラフで表わすと別図のようになる。これによると計測数値の密度から大中小の三つのグループにまとまる傾向が窺われる。長さ2.5cm未満、幅2cm未満が小型、長さ2.5~3.0cm未満、幅2.0~2.5cm未満が中型、長さ3.0cm以上、幅2.5cm以上が大型という分類である。こうしてみると表土下礫層から出土したもののが小型、量は少ないが二面および三面が中型という傾向に、そして一面のものは小型から大型まで非常にばらつきが認められる。同じ中型でも三面には第32図11にみるような縦2.9cm、横1.9cmと大型に近いものも含まれるが、二面のものは幅が2.2~2.5cmと数値が高く全体に丸味のある形状をなしている(第32図4~7)。



第32図 モモ・クルミ(1/2)



る。いずれにしても祭祀に用いたものであり、これがばらつきの原因なのかもしれない。ここで2区の鎌倉時代の溝から斎串とともにまとまって出土した110個を参考にするとグラフ(2)のような傾向になる。ここでは一括で用いられたこともあり比較的ばらつきが少なく、長さ2cmから2.8cm、幅1.4cmから2.2cmの間に多くが集中している。さらにこれらの中集中密度からみると①L2.0~2.4cm、W1.8~2.0cm、②L2.5~2.8cm、W2.1~2.3cm、③L2.9cm以上、W2.4以上、というまとまりが観察できる。この①~③のまとまりはグラフ1に表わしたI区出土の弥生中期から鎌倉以後の大きさの傾向とほぼ共通する。従ってここでは①を小型、②を中型、③を大型と分類しておくことにする。こうしてみるとII区鎌倉時代の8号溝から集中して出土した桃核は小型が最も多く、それに中型を加えると全体の9割以上になるという傾向がつかめる。

このような傾向が何に基づくのか、あるいはその意味は何かは不明であるが、今後弥生以降現在までの資料を比較検討する中で、その意味を探る必要がある。ちなみに江戸後期宮沢中村遺跡の例では長さが3.8cmというように、4cm以上ある現在の品種につながる大きさを有するものがすでに出現しており、食用商品としての改良が進められていたことも考えられる。

奈良県布留遺跡では古墳時代および奈良・平安の層から5,600個以上の桃核が出土している(註1)。この統計処理によると、長さについては古墳時代が2cm~2.7cm、奈良・平安時代が2.2cm~2.9cmのものが大部分のことである。東丹保遺跡の大きさ分類からみると、小型から中型が圧倒的に多いことになるが、平安時代になると古墳時代のものに比べて大きishかも粒がそろっているとされる。栽培との関係があろうが、本遺跡では弥生中期末から長さ2.9cmと大型に近い種子が出土しており、加えて弥生後期後半の面からも2.7cmを超えるものが出土している。

全国的には弥生前期から出土し始め、中期には広く分布するとされるが、本遺跡出土例も加え、特に祭祀と食用という観点からの桃の栽培および利用の実態を歴史的につかむ必要があろう。今後の課題としたい。

## (2) クルミ(図版17)

第一面と第三面からサワグルミが17点、第一面からヒメグルミ1点が出土した以外はすべてオニグルミで301点が確認された。このうち296点が弥生中期の第三面から出土したもので、しかも252点が1号溝からのものである。これらについては吉川純子氏から報告されているが(表6)、完形も含まれるもの食痕や人為的な損傷を伴うものもみられた。これらのいくつかを第32図および表5に示した。第32図14が鎌倉面のヒメグルミである他は全てオニグルミ。15は第二面出土で他は全て第三面出土。16~18は完形、19~24が人為的に割ったとみられる個体で半分になっていることに加え、頂部と基部とが欠けており打撲が加えられたもの。25、26は両側面に孔が開けられており、鼠などの齧歯目類の食痕例である。

弥生中期・後期が中型、縄層中が小型というの以外な感があるが、縄層中というのは鎌倉以降の洪水で運ばれたものと思われ、このような事情によるのかもしれない。また第一面出土の核に大きさのばらつきがあることについては、3号杭列付近と水田址6および7区からの出土であり、上流地域(例えば2区)で祭祀に用いられたものが流れてきた可能性もある。ただ3号杭列付近からは斎串も出土しており、水田際で祭りが行なわれたこともあり得る。

註1 太田三喜他「出土果実および種子の同定」『埋蔵文化財天理教調査団』1982

## 第4節 大師東丹保遺跡出土のスコリア質テフラ

帝京大学山梨文化財研究所 河西 学

### はじめに

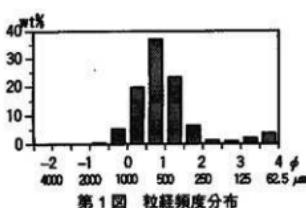
甲西町宮沢に位置する本遺跡I区において弥生時代中期末頃の第三面からスコリア質テフラが検出された。ここでは大師スコリアと仮称する。テフラは流路および遺物包含層中に検出された。流路では、普通厚さ1~2cm、最大5cmで層状に連続して認められる。流路以外の平坦面では、黒褐色有機質粘土シルト層中に斑点状(バッチ状)に挟在される。甲府盆地内のこの時期のスコリア質テフラ層としては極めてまれな事例である。ここではテフラに関する事実記載を中心に報告する。

### 観察結果

テフラは、肉眼観察では、分級良好、粒径は最大3.5mm、普通0.5~1.5mmである。テフラは、肉眼で黒色スコリアを主体とする。灰白色スコリアも少量含まれる。赤褐色スコリアがまれに認められる。スコリア粒子は発泡が中程度~やや不良である。肉眼で認められる斑晶鉱物は自形斜長石が多い。1/4~1/16mm粒径砂分を粒のまま封入したプレパラートを偏光顕微鏡下で観察すると、斜長石のほかに、カンラン石斑晶が多く含まれる。半自形~他形が多いが自形も少し認められる。ただしテフラ全体に占めるカンラン石の量は多くない。

水洗したテフラを約50g秤量して0.5 $\phi$ ( $\phi=1$ )間隔の分析ふるいを用いて粒度分析を実施した。粒径頻度分布図では0.5~1 $\phi$ (粗粒砂)にモードをもつほぼ対称形の頻度分布が示された(第1図)。極細粒砂(3 $\phi$ ~4 $\phi$ )には細粒方向に向かって増加する傾向が認められる。しかしこれら極細粒砂は、顕微鏡下で観察するとテフラ粒子は極めて少なく、石英・斜長石・斜方輝石・单斜輝石・角閃石・不透明鉱物・岩石片などからなるあまり新鮮ではなくやや円磨された粒子、および植物珪酸体などから主として構成される。これらの極細粒砂は、スコリア質テフラ粒子とは起源を異にし、遺跡周辺あるいは上流域から供給された泥質堆積物中に含まれる堆積性の砂粒子ととらえられる。そこでテフラの粒度係数を算出する際に、これら堆積性極細粒砂の影響を除外して、FOLK & WORD(1957)の式により図解法で粒度係数を算出し、表示した(第1表)。

次にテフラの細部を観察するためにテフラ試料を樹脂に包埋して、薄片を作製し、偏光顕微鏡下で観察した。鏡下でのスコリアは黒褐色で不透明に近いものから、透明感のある緑褐色~褐色のガラス質のものまで多様である。気孔は、円形~梢円形を主体とし、極めてまれに不規則形を呈する。気孔の大きさは50~150 $\mu\text{m}$ で、ときに200 $\mu\text{m}$ を示すものもある。全体に気孔が少なく、孔壁が厚いなど、スコリアの発泡があまり良好ではない状況が認められる。斑晶鉱物は、斜長石とカンラン石からなる。斜長石は、柱状自形で、単独粒子もあるが、複数の斜長石が集合した状態(集塊状)を示すものも少なくない。斜長石は、ふつう径150~850 $\mu\text{m}$ 、最大径925mmを示し、アルバイト双晶・累帶構造が顯著で、また多くは黒褐色ガラスを多く包有するためやや汚れた印象が特徴的である。最大対称消光角によると斜長石の組成はバイトウナイト程度と推定される。カンラン石斑晶は、輪郭が直線的で稜が角ばった新鮮な自形結晶が多く、径230~900 $\mu\text{m}$ 、周囲に反応縁は認められない。ときに複数のカンラン石が集塊状を呈する。石基は、スコリア粒子ごとにガラスと微晶(マイクロライト)との割合が多様である。ガラスは褪~緑褐色で、微晶は、長柱状~針状の自形斜長石、粒状~柱状のカンラン石・輝石などから構成される。微晶は、ときに長さ50 $\mu\text{m}$ 程度の斜長石針状結晶も認められるが、全体的にその粒径は10 $\mu\text{m}$ 程度の極めて細粒なもので、粒径が均質である。したがって斑晶以外の斜長



第1図 粒径頻度分布

第1表 粒度係数(図解法による)

| 粒度係数 | FOLK & WORD(1957)による評価 |
|------|------------------------|
| 中央粒径 | 0.79 $\phi$            |
| 平均粒径 | 0.79 $\phi$            |
| 分級度  | 0.51<br>やや良好           |
| 重度   | 0.008<br>対称            |
| 尖度   | 1.07<br>中間的            |

石が石基中に目立つことはあまりない。岩片がわずかに含まれる。インターラーチ組織およびインターラーチ組織の石基をもつ玄武岩質岩片が認められる。

#### 考察

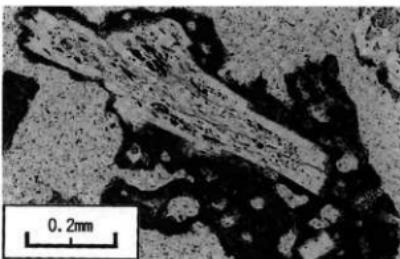
テフラは、カンラン石玄武岩質のスコリアからなる降下テフラであり、堆積層の成層状態からするとおそらく水中堆積に近い堆積環境下であったと推定される。遺跡周辺におけるカンラン石玄武岩質スコリアを噴出する可能性のある火山は、遺跡の南東方向約33kmに位置する富士火山がもっとも可能性が高いと考えられる。

富士火山は、弥生時代にもテフラの噴出活動が知られている。この時期の最大の噴出は湯船第2スコリア(Yu-2 S-22)である。湯船第2スコリアは、富士山最後の大規模な山頂噴火の噴出物である(宮地,1988)。上杉ら(1987)は富士山北麓において約2200年前噴出した湯船第2スコリアより上位にS-23-1、S-23-2、S-24-1、S-24-2を報告している。上杉(1990)によれば、湯船第2スコリアは弥生初期、S-23-1～2、S-24-1は弥生中期、S-24-2は弥生中期～古墳時代のテフラであるとされる。年代層位学的に見ると、本遺跡のスコリア層は弥生中期末であることから、まずS-23-1、S-23-2、S-24-1、S-24-2などが候補になる可能性がある。

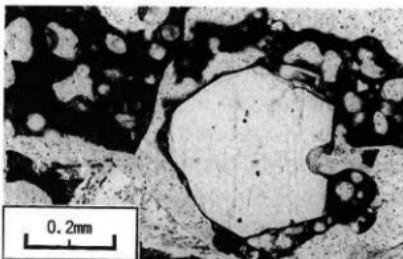
しかしこのテフラも甲府盆地における分布はほとんど知られていない。野外調査によって標識テフラとの層位関係を把握しようとしたが、富士火山北西域において当該テフラを含む良好な露頭を見ることができなかつた。そこで從来知られている富士火山起源の指標テフラの岩石薄片における組織の特徴と比較することを試みた。比較試料として静岡県小山町の富士小山ゴルフ場北から採取したものを利用した。

その結果、Yu-2～S-24-2は概して類似性が高く、褐色ガラス質包有物をもつ斜長石斑晶は共通して認められる。それ以外の気泡の状態や斑晶鉱物などに關しても類似性が認められる。石基中の微晶に関しては、Yu-2の上部およびS-23-1～S-24-2においてはスコリアの石基中に含まれる針状の斜長石が薄片で両端が二股に鋭く切れた燕尾状の特徴を示すが、東丹保遺跡のスコリアの石基には燕尾状斜長石はきわめて少ない。この点で湯船第2スコリアの下半部との類似性が若干あるかもしれない。ただし比較試料が富士東麓の1地点だけであること、湯船第2スコリアでは5層のフォール・ユニットが認められていて、それぞれのユニットごとに分布方向や岩相が異なる可能性があること、フォール・ユニット内でも多様のスコリア粒子が含まれている可能性があること、および從来報告されているテフラ年代と東丹保遺跡での層位とが差異が生じていることなどから、今回の観察結果だけをもとに結論を急ぐわけには行かない。今回の調査は限られた条件の下で行った予測的なものであり、今後対比に向けて詳細に検討していく必要性を痛感する。

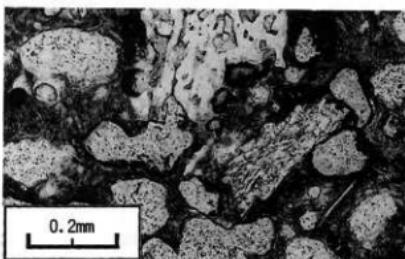
注1) 粒子の径が  $d$  (mm) のときの  $\phi$  スケール値は次式で示される。 $\phi = -\log_2 d$



第2図 大師スコリア中の斜長石



第3図 大師スコリア中のカンラン石



第4図 湯船第2スコリア中の斜長石

## 文献

宮地直道(1982)新富士火山における約2000年前の山頂噴火とその噴出物。火山第2集、27、332。

宮地直道(1988)新富士火山の地質。地質学雑誌、94、433-452。

上杉陽(1990)富士火山東方地域のテフラ標準柱状図—その1：S-25-Y-114—。関東の四紀、16、3-28。

上杉陽・堀内真・宮地直道・古屋隆夫(1987)新富士火山最新期のテフラー—その細分と年代—。第四紀研究、26、59-68。

## 第5節 年輪年代測定と遺跡の時代

本遺跡のⅠ区およびⅡ区から出土したヒノキ製品について、奈良国立文化財研究所光谷拓実氏に依頼し、年輪年代測定を行なって戴いたところ、次のような成果が導き出された。

|     |            |           |            |              |
|-----|------------|-----------|------------|--------------|
| 資料名 | ①大師東丹保遺跡Ⅰ区 | 3号杭列出土木製品 | 計測結果       | 西暦1137年      |
|     | ②          | 〃         | II区 4号建物柱根 | 計測結果 西暦1169年 |

これについて光谷氏からは以下のコメントを戴いている。

①については、木製品の外側には優に100本は越える年輪があるものと推測できる。②についても材木の中心を用いていることから、さらに50本位の年輪があるものと推測できる。

以上の成果から本遺跡中世面の時代を検討してみる。

①Ⅰ区3号杭列出土木製品は、第14図7に示したヒノキの板であり、折敷とみたものである。細い傷が多いことからまな板のような使用も行なわれた木製品の可能性がある。出土位置は3号杭列の杭の一部にたてかかったような状態で出土した(図版4-3)ものであり、第一面の杭列が機能していた時期のものとみてよい。この木製品からたどることのできる年代が西暦1137年であり、この上限を表わしている。実際には光谷氏のコメントにもあるようにこの木製品製作に用いられたヒノキがさらに100年以上の年輪を持っているとすると、13世紀中頃を上限とした時期に伐採された可能性が生じてくる。

②Ⅱ区4号建物柱根は1辺が4寸の面取りされた角柱である。第一面に7本配列する柱のうちの1本である。詳しく述べてはⅡ区の報告書に記述してある。これについては西暦1169年という数値であるが、仮に年輪50本を加えると13世紀前葉後半の時期に伐採された木材からつくられた建築材ということになる。

これらの年代と発掘された遺物の編年とを比較してみる。特に土器の年代については多くが出土したⅡ区の報告書に詳しいが(註1)、中世都市鎌倉からの出土例も参考とすると、13世紀後半から14世紀始めにかけての遺物の組み合わせとなる。従って、①のⅠ区木製品年代は土器年代とオーヴァーラップする部分が多いものと思われ、從来の土器編年が絶対年代と一致する可能性をもたらしたものとして評価できる。②のⅡ区建物柱については30年から50年程度古い測定数値となるが、さらに多くの年輪の存在あるいは伐採時期と建物構築時期の間隔、さらには建築用材の再利用といった可能性も考えられる。いずれにしても鎌倉時代に伐採されたヒノキが用いられていることになり、遺跡年代の上限を押さえることができたことは言うまでもない。今回、はからずもⅠ区とⅡ区とで年輪年代測定可能な資料が整い、上記のような成果が得られたことは大きな意義がある。土器の時期についてご指導いただいた鶴見大学河野真知郎氏、年輪年代測定をお願いした奈良国立文化財研究所光谷拓実氏には心からお礼申し上げる。

(新津 健)

註1 Ⅱ区からは、かわらけ、鉢、山茶碗系鉢、常滑系陶器、青磁などが多く出土し13世紀後半から14世紀初頭の生活用具のセットがとえられている。Ⅰ区からはこのような土器類の出土は少ないが、面の広がりとしてはⅡ区が祭祀・居住域、Ⅰ区・Ⅲ区・Ⅳ区がその周囲にある生産域という一体性でつながっているものと考えている。

## 第5章 遺構遺物の検討

### 第1節 鎌倉時代

#### (1) 杵列と水田址

まず確認された5本の杭列の時期および性格についてまとめておく。4号、5号については、西側の高台部分のみに見られること、形態的には皮のついた丸杭や板が用いられていること、層位的には下の砂礫層まで達しているもののが少ないことなどから近世以降のものと考えられる。ことに第13図1の肥前系磁器や第14図1の下駄がこの付近にて出土していることから、江戸時代を中心とした時期のものと見られる。この2本は直交するかたちに走っており、この方向が古い時代からの地割り方向と一致することから水田区画に基づいた水路や道筋に打たれた杭列とみることができよう。

1号、2号、3号は鎌倉時代を中心とした時期のものと考えられる。その理由については、層位的には第一面にて確認され、それが下層の砂礫層深く打ち込まれている点にある。しかも各列の杭の中には、地上に出ている頭の部分が南西方向に傾きながらばっっているものも含まれることから、第一面を襲った洪水により損傷を受け、埋没していったものとみられる。さらにこの第一面は北に位置するⅡ・Ⅲ・Ⅳ区にも共通して広がっている(付図3)ことから、同じ時期の生活面が相当広範囲に残存していることになる。この面の時期は特にⅡ区の出土遺物から決定できる。Ⅱ区からは建物跡、大小の溝やそれにより区画された生活面などが発見されたが、これらの遺構にともない非常に多くの木製品、土器、陶磁器が出土している。これらの土器類や陶器類から、第一面の遺構群は13世紀後半から14世紀前半といった鎌倉時代後半期に位置付けられるものである。また、前章第5節で触れたように年輪年代測定の成果からも13世紀前半を通過することはないという確証は得られている。こうしてみるとⅡ区と同じ面であるⅠ区第一面から確認できた1号～3号杭列および水田区画は鎌倉時代のものとみなすことができる。ここからの出土遺物は少ないが、3号杭列からは第14図6の漆塗椀や2の蓋、7の折敷、第15図18の斎串などの木製品、第13図9の鉢形土器などが出土している。漆塗椀や斎串、鉢形土器はⅡ区と共に通る遺物であり、同時期を物語るものであり、特に第14図7の折敷の年代も前述のとおり13世紀中頃とみられるものである。また3号杭列と類似した形態の杭列はⅡ～Ⅳ区にも走っており、加えて方向性も一致することから時代も共通するものと思われる。

さて、本Ⅰ区の杭列の用途を考えて見る。まず発掘区南東側にてほぼ平行に走っている1号と2号の方向は、真北からみてN-31°～35°-Eであり、N-8～-11°-Eの方向に走る3号杭列や水田の方向と比較して相当東に振れている(第4図)。水田や3号杭列が長期間続くこの地域の基本的地割りとすると、1号、2号はそれとは異なった自然流路に関わる杭列という見方ができる。この1号・2号間は15m程であり、特に1号杭列寄りの11mの間に第一面とした粘土層が全くみられず、砂礫の堆積層であったことから、この部分を中心に自然流路が形成されていたことが窺われる。この流路から水田を守るために両岸に打たれた杭が1号および2号であったと見なされよう。水田との関係については、1号杭列寄りの11mの間の一段下がった砂礫層部分が最初の流路であり、水田址第6面もこの時期には完全な形状であったと思われる。この最初の流路の岸に打たれた杭も數本確認できている。その後流路はさらに西に広がってくることになる。2号杭列は水田址の第6面の南東隅をかすめていることから、これは洪水により新しくできた流路の岸に打たれものと考えられる。さらにこの杭列の外側にも粘土面を削った痕跡が何条もみられ、水田がさらに削られて行ったことが観察できる。なお、1号杭列の東側にも流路が広がることから、複数の洪水により流路も幅や位置を変えている様子が窺われる。

3号杭列についてはN-8°-Eを中心としており、水田の方向やⅡ～Ⅳ区の遺構群と共通した方向に走っていることから(付図3)、基本的な地割り方向に打たれたものである。この3号杭列を境にして30～50cm下がった東側が水田域、やや高い西側が1号遺物群や時代がやや異なるものの1号土坑などが構築された生活域となっている。この3号杭列の水田側直下には水路が設けられていた可能性が高い。これらのことから3号杭列は当初水田域と居住域とを区画して

いた水路際に打たれた護岸と区画の機能をもった杭列であったとみられる。その後の複数の洪水により水田が被害を受けるとともに、居住域にも影響が及ぼされることから、一層3号杭列の補強が繰り返されたものと考えられる。水田が完全に流された跡も西側地域を居住域ないし水田域として利用するため、さらに補強されたことも有り得よう。

水田については、本区以外にもⅢ区にて発見されている。本区の水田については一辺が11mから15mの規模であり、基本的には水田址第2面の15m四方が標準であろう。Ⅲ区では12mから17mとやや大きめであるが、鎌倉期の水田構造が10mから20m以内の規模にあることが分かる。今回発掘された事例は水害により相当搅乱されており、詳細な水田構造や施設は分からなかった。本区の状況では西側の水路から取水し、ゆるやかな傾斜を利用した掛け流しの水田であった可能性がある。

なお、杭列の項目でも述べたが、水田と3号杭列とは一体となった施設であり、地割方向もN-8°～11°-Eと一致するものである。この地割方向はN-6°～8°-Eにある現在の土地区画の方向と類似していることは重要である。この一帯は田島条里として古い地割が今なお生きている地域であるが、これが少なくとも鎌倉時代にまでたどることができる訳である。ちなみに、本遺跡第二面の弥生後期の水田は真北からN-12°-W、水路はN-28°-Wというように鎌倉期の地割とは逆方向に掘れている。従って、現在なお生き続ける条里は弥生後期以降鎌倉時代の間に設定されたものということができる。

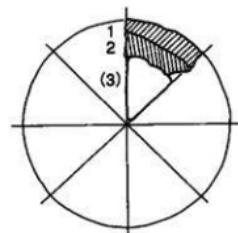
## (2)杭の製作

杭の作り方には一定の方法が認められた。これについて3号杭列の例で復元してみる。

まず、第16図1および2に示した接合資料を参考にする。木の皮に近い部分とみられる1から推定すると、直径24.6cmの丸太が用意されたことになる。この丸太に1と2の杭をあてはめると47°の角度で割られていることから、8分割されたことが分かる。こうして三角柱状の木材が作られる。2は1の内側に接合することから、さらにこの木材を木目と平行に削っていき、板状および角状の杭をとっていくことになる。この状況を第33図に示したが、現存する1と2以外に少なくとも(3)とした杭が存在したはずであり、このような直径25cm程度の木材からは24本程の杭が作られることになる。この木材は長さ1m程度に裁断されていることから、仮に10mの長さのヒノキ1本からは240本の杭が取れることになる。但し実際に使える木材はもっと短かったであろうし、建築用材の残りを利用したこととも考えられ一度の工事に用いられた原木の量は単純には計算できない。また1号杭列の例であるが第19図12のような廃材が用いられた例もある。

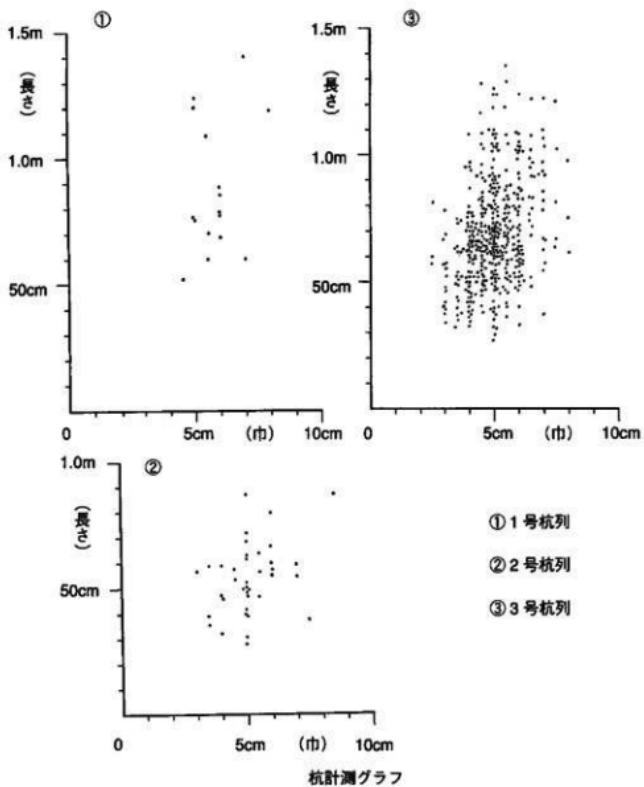
いずれにしても最後に先端を削り杭ができ上がるが、表皮の残っているものがみられないことから、皮はついていなかったようである。ヒノキ類が多いことから栓皮の利用を考えると、既に丸太の段階で表皮は採取されていたものと思われる。このようにみると、材木の外側方向のものが板状になり、芯に近くなるにつれて第16図4、第17図7、18図10のような角材となり、さらに中心部分に近い18図9のような断面が楔状の杭となって表われる。この他、第19図13のような例もあり、細めの丸太では最初に分割されたものがそのまま使われたことが分かる。

さて、このようにしてつくられた杭ではあるがその長さは一定の規格があったようである。3号杭列に関するグラフからみると、50cmから140cmまでの長さが認められる。もちろん地表に出ていた部分が破損しているものも多いとみられることから正確さにかけるが、この表を参考にすると30cm～45cm、46cm～85cm、86cm～110cm、111cm以上というまとまりがあるが、概ね90cmを境に大小二つに分かれる傾向が認められる。さらに第10図の杭列側面図をみると長いものと短いものとが交互に打たれているようであるし、また補修時の違いにもよるものとも言える。前項でもみたように何度も洪水にみまわれた様子があることから、長期間にわたり護岸としての杭列が補修されてきたことが杭の規格



(第16図 1・2の接合)

第33図 杭製作の復元(1/6)



からも窺われる。なおこれらの杭に加え、II区から出土した木製品もヒノキ類が非常に多く使われていることから、当時のヒノキ需要の高さを知ることができる。同時に供給源についても、資源の確保という点から林の管理・育成が相当行なわれていたと考えたい。

#### (3)歴史的背景

第2章の地理的環境の項でもみたとおり、大師東丹保遺跡のある一帯は、特に弥生時代以降の遺跡が豊富な所である。ことに古代の大井郷にも比定される地域であり、後の大井莊を経て戦国時代に至るまでの遺跡や寺社

の残る、歴史的環境に恵まれた地域である。遺跡の分布と地形との関係についてもすでに第2章でふれたが、標高400mラインの丘陵上には、縄文、弥生、古墳時代の集落遺跡、丘陵突端に前期古墳、丘陵を下った標高300m程の扇状地の扇尖部は後期古墳密集地となり、さらにここから扇状地を中心に鎧物師屋遺跡や木遺跡に代表される縄文時代や平安時代の集落が広がっているという時代による地区区分が認められている。さらに扇尖部末端には「大井」「清水」「船沢」という地名からも分かるような湧水地帯が伸びており、この湧水により解析された標高250m前後の微高地に弥生時代から中世までの遺跡が発達している。特に甲西町地域には、弥生後期の住居が調査された住吉遺跡(註1)、隣接して弥生、古墳、中世の遺物のある清水遺跡、古墳時代中期の住居が発掘された船沢遺跡、古墳時代から平安時代の土器が出土した滝沢通り遺跡などがある。

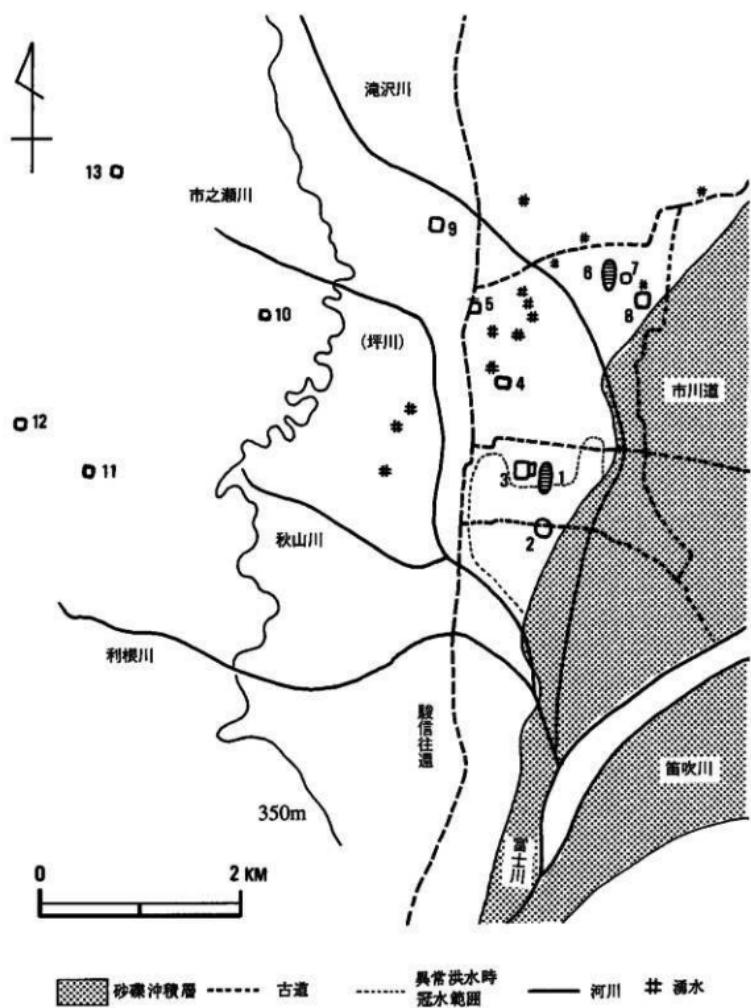
今回調査の行なわれた大師東丹保遺跡はさらにこれら扇尖部より沖積地寄りの低地に位置している。実はこの立地条件がこの遺跡の性格を位置付けているものと考えられるが、まず東丹保遺跡全体を概観する(註2)。確認できたもっとも古い時期はI区の弥生中期の溝、弥生後期の水田址であり、これまで分かっていた住吉遺跡や清水遺跡などに統き水田が広がっていたことが分かる。従って扇尖部末端の微高地帯に集落が形成され、その前面の低地が水田に開発されていたことになる。次に遺構が確認できた時期は古墳時代でIV区から確認できた古墳がこれにあたる。かような土地に古墳が造営されたこと自体驚きであるが、油田遺跡で調査された古墳時代の面からは大木の根が検出され、その周囲に広がる土器から祭祀遺構ととらえられている(註3)。この時期に河川流路の変更等の現象が生じ、沖積作

用が一時停止したものかもしれない。その後再び土砂の堆積が盛んになり、現地表下約1mの時点で、鎌倉時代の生活の場へと移ってくる。この時期の遺跡の中心はII区であり、面取りされた4寸角柱で構築される建物や、溝で区切られた多くの小区画からなる水辺祭祀跡が発見されている。この区画の南にI区、北にIII・IV区が位置しておりII区の祭祀区を取り巻いて概ね水田域となっていたようであり、中世集落の景観の一端を窺うことができる(付図3)。問題はII区から発見されたような大規模な祭祀を行なう主体者の位置付と、その居住区および一般の集落位置である。祭の主体者についてはやはりこの地域の支配層に属するものと考えられ、ごく近くにその屋敷地があったものと考えたい。発見された4寸角柱建物は発掘区の北東隅に位置することから、さらに東側に建物中心が延びることになりこの方面も注意すべきであるが、IV区では発掘区西端から地割と平行する総柱の掘建柱建物跡が発見されているとともに西から溝が流れ込んで来ており(付図3)、この方面に注目したい。明治21年陸地測量部の2万分の1地図を観察すると、本遺跡のすぐ西に一辺が150mほどの方形区画が認められる。清水八幡社を中心とする現在の清水集落にある箇所である。ここには地名のものとなった「独鉢の井」があったとされる(註4)。この方形区画あたりに屋敷があり、さらにそれに統じて湧水帯先端に沿うかのように集落が広がっていた可能性を考えてみたい。つまり扇端部の沖積地に面した突堤に祭祀を執り行った主体者の居住地があり、その前面の湿地に祭祀区画が設けられていたと推測しておこう。さらにII区から発見された面取りされた柱の建物はその祭を行なったいわゆる祭殿のような施設ではなかったろうか。

以上のような立地が本遺跡の特徴であるが、ここで付近の中世に関わる主な遺跡の位置と地形の関係を図示しておく(第34図)。東側のアミ部分は山梨表層地質図(註5)により砂礫冲積層とされる範囲であり、低湿地をなす。反対側は標高350m以上の台地および扇状地であり、その扇端部には湧水帯がある。この湧水帯を背面に控えた低湿地間に大師東丹保遺跡が立地するのである。

では、なぜ鎌倉時代になりこのような低地をとりこむ立地になったのであろうか。これについては本遺跡の下層の堆積状況が参考になる。鎌倉時代の面の下には弥生後期の水田や中期の面が確認されたが、それぞれの生活面の間は砂礫の互層であった。このような堆積層から地形の変化を追ってみると、弥生中期には現在の地表から約4m下に生活面があったが、後期にはそれが1mほど埋り、さらに13世紀には1m埋っていることになる。洪水のたびに低地は埋りていき現在の地形に近づいていくのである。これに対して湧水帯のある微高地の地形変化は非常に少ないものとみられる。住吉遺跡や清水遺跡では地表下1mたらずで住居が発掘できるからである。こうしてみると弥生時代には湧水帯の末端とその先に広がる沖積地との間には相当の段差があったものと推測されるが、その段差は度重なる洪水で徐々に埋没して行き、現在の緩やかな傾斜を持つ地形へと変化して行ったものと考えられる。その洪水の起きた理由の一つに弥生中期後半からの開発があったものと思われる。ことに平安時代には木舟遺跡(註6)や村前東遺跡(註7)のような大規模な村が扇状地中央部から扇端部にかけて現れてくる。このような村の開発が山林や原野の開墾を促進し、それにより土砂の流出がさかんになって沖積地が急速に埋っていたのであろう。こうして新しく広がって行った沖積地の奥にも生産地域を開拓するために、集落は一層先端部にでていくことになる。東丹保遺跡の例では、これが13世紀のことである。このように埋りつつある沖積地ではあるが低地であることには変わりなく、その後の洪水により大師東丹保の集落も流されている。洪水常習地という特徴は現在までも続いている。第34図に示した破線域は山梨表層地質図記載の異常増水時の冠水範囲であり、昭和30年代までには度々生じた現象である。

では古代から中世にかけてこの一帯が開拓された歴史的な背景はどのようにとらえられているのであろうか。この地域もやはり甲斐源氏とのつながりの強いところである。古代の大井郷にあたる地域であり(註8)、発掘された櫛形町木舟遺跡や村前東遺跡などもこの郷を形作る集落であったとみられるが、このような村の生産力を背景に平安末期から鎌倉時代にかけては加賀美氏一族がこの一帯を支配していたとされる。若草町加賀美にある法善寺はかつての加賀美遼光の館であったとも伝えられている(註9)。遼光の長子光朝が秋山氏を名乗るが今も甲西町秋山に光朝にかかるとされる遺跡や伝承が残されている。また次男の長清の館の伝承地も櫛形町小笠原に残っている。歴史的には治承4年の頼朝挙兵や文治5年の頼朝奥州征伐などに加賀美氏一族の名前が上がり、また承久の乱にあたっては大將軍の一人として長清の名もみられるとおりであり、平安末から鎌倉前期における西都地域の趨勢を読み取るこ



- 1 大師東丹保遺跡 2 富田城 3 清水八幡社付近の区画 4 古長禪寺  
 5 神部神社 6 二本柳遺跡 7 福寿院 8 法善寺 9 小笠原氏館跡  
 10 上野城(椿城) 11 雨鳴城 12 城山 13 笹若

第34図 大師東丹保遺跡周辺の環境

とができる。大師東丹保遺跡の年代は出土した土器類から13世紀後半から14世紀初頭とみられることから、この遺光に統く一族にかかわりを持っている可能性がある。山梨郷土史年表を参考にすると(註10)、13世紀前葉に遺光、中頃に長清が没しており、13世紀後半から14世紀始めは長清以降の時代となる。年表では、1283年「大井莊最勝寺」、1316年「古長禪寺」という事項がみられるが、まさにこの時期が大師東丹保遺跡の営まれていた時期である。その後南北朝以後武田信玄の子信明がこの地域を領し大井氏を名乗るとされる(註11)が、これは14世紀中頃のことである。従って大師東丹保遺跡で発見された建物や水田が機能していたのは、小笠原長清が没し大井信明がこの地を領するまでの間の一期間ということになろう。小笠原氏は長清の頃から信濃佐久地方とかかわりがあり、甲斐の地を離れていく。長清自身も鎌倉とのかかわりが強く、最後は京都で没するとも言われる(註12)。小笠原という地名は現在明野村と御形町に残っており、このうち原小笠原莊が御形町小笠原地域に比定され(註13)、しかもこの地は小笠原氏が甲斐国を去った後にも、小笠原氏の惣領職相伝の所領となっていたことから、この一帯は依然小笠原氏とのかかわりが強かったとみられる地域である。もっとも原小笠原莊と大井莊とのかかわりや範囲の問題も残る。『甲斐国志』では相沢(甲西町貼沢)を大井莊の北限としているからである。なお大井莊に関しては、現在の鰐沢町に館を構えたとされる大井莊司入道なる人物が知られている(註14)。この柄姓大井氏については13世紀後半にその名をとどめているが、秋山敬氏は1334年の段階でこの館跡に連華寺が建てられているという社記・寺記の記載から、これ以前に滅んでしまったとされている。時期的には大師東丹保遺跡と一致するが、さらに秋山氏は大井莊の範囲を確認した上で、莊司の館を鰐沢とするには南に片寄りすぎているとし、その理由として下地中分に基づく南条北条の支配区分がなされていたと指摘する(註15)。秋山氏の説からすると、大井莊のうちでも北条に位置することになる東丹保遺跡一帯は莊園領主支配地域ではなく、在地領主が支配する地域であったことになる。このように大師東丹保遺跡については、小笠原氏あるいは柄姓大井氏がかかる時期の遺跡ということができるが、莊園の分割支配という点からは甲斐源氏一族の勢力範囲であり、しいて言えば小笠原氏一族の支配下にあったと推測できる。

ところでⅡ区からは膨大な量の祭祀に関わる遺物を中心として、青磁・白磁等の輸入磁器類、刀子・鎌・鐵等の鉄製品それに硯、櫛、扇等が出土している。これらの遺物は一般的な集落以上のものであり、特に祭祀を執り行うという点からみて、この地域を領した階層につながる遺跡という見方ができる。この意味から、大師東丹保遺跡および周辺に展開するとみられる壁敷ないし居住区域は、この一帯の支配層にかかわるものであったと推測したい。

この大師東丹保遺跡の発見は中世前期の集落立地を考える上で重要な問題を提起した。先にもふれたように第34回にみるように、扇状地の前面に広がる冲積地を取り込んだ立地に所在するからである。このような在り方は前述した加賀美氏にかかる現若草町の加賀美から十日市場一帯にも共通する。この地域は御動使川扇状地の末端にあたり、村前東遺跡・新居道下遺跡など平安時代の集落が発達している。この扇端部の前面(南側)に冲積地が広がっており、その境界付近に加賀美遺光の館跡と伝えられる現在の法善寺が位置している。このような、背後に平安集落の発達する扇状地中央部から扇端部を持ち、前面に冲積地が広がるといった場所に平安末から鎌倉前期の集落が立地する可能性が窺われる所以である。

從来11世紀後半からの平安末期から中世にかけての集落址は非常に少なかったが、それまでの立地とは異なった、低地を取り込んだ地域に埋没している可能性が指摘できようか。

なお秋山敬氏は先の論文中で、大井莊の成立を元永2年(1119年)を遠く遡らない時期に布施莊から分かれ成立した、新しい莊園であるとされた(註16)。元來扇状地中央部から扇端部にかけて発達していた平安集落を基盤に大井郷が形成されていたとすれば、12世紀以降の冲積地への開発が新しい莊園を生み出した一つの原因ということはできないであろうか。

このような背景を持つ東丹保遺跡周辺については、14世紀後半に武田氏の系統にある信明が大井氏を名乗って以来その一族に引き継がれ、戦国末期までには富田城、上野城といった城館遺跡や寺、集落、道、市場そして水田等の中世空間の広がる歴史的環境が展開していったものとみられる。

(新津 健)

## 第2節 弥生時代

### (1)弥生時代の生活環境

今回の調査で確認できた生活面で最も古い時代のものは、弥生中期後半であった。現在の地表下約4mにあるこの面からは、自然流路とみられる小河川が発見されたが、同時にその内外から建築用材や土器、石器が出土したことから、ごく近くに集落が形成されていたことが窺われる。本遺跡調査と同じ路線内の調査で確認された油田遺跡(本遺跡の北1km)や向河原遺跡(同1.5km)からはより古い弥生中期中葉の土器が多く出土しており、特に向河原遺跡では水田跡も発見されている。このことから、現在の集落が形成されている扇状地扇端部よりさらに富士川に近い沖積地にも中期の水田が営まれており、その近くに集落が発達していたことが推測できる。

さて、本遺跡の中期面からの重要な発見の一つは火山灰である。この検出状況については第3章で述べたが、主に溝の底付近や壁部分に堆積していたものである。特に3号溝の土層観察からは5cmの厚さが確認できた(第24図)。溝以外からも、第三面とした中期面全体についても、所々の小さな湿地部分にわずかずつではあるが火山灰の堆積が認められた。これらのことから、火山灰は上流域から流れてきて溝の中に溜まっただけのものではなく、この地域一帯に降灰したものであることが分かる。しかも第三面全体から検出されたことから、本遺跡部分は中期の時点では水田等の耕作は行なわれていない、自然状態の湿地であったことが推測できる。人の手が入っていれば火山灰が肉眼でとらえられるような堆積はしていないと思われるからである。ちなみに上流域である油田遺跡や二本柳遺跡では土壤分析により火山灰の存在がやっと知られている程度である。また溝中に厚く堆積していたことは、上流域から運ばれてきたこともありうるが、非常にゆるやかな流れであったと思われる。このことは発掘された3本の溝のうねり方からもわかる。

この中期面を覆っていた細かい砂ないし粘質土中や、溝内の堆積土中からは植物種子類が多く検出されており、これについては第4章で報告したとおりである。確認された主な植物について木本では、モミ属の葉、カヤ・トチ・クルミ・コナラ・ナラガシワ・クヌギ・ケヤキなどの果実および殻斗が目立つ。またホタルイ・ウキヤガラなどの湿地性草本やヒョウタンおよびメロン仲間もみられる。以上のことから弥生中期面は「湿地性草本が繁茂する湿地または流水域で、周辺にナラガシワ、クヌギなどの落葉樹を主な構成種とし、温帶性針葉樹を交えた森林が広がっていた」という吉川氏の報告にある環境が復元される。またこの面からは青色の鉱物も採集されており河西学氏により湿地で形成される「藍鉄鉱」と判断されている。

以上のように、溝の走り方、火山灰の堆積、湿地性草本、藍鉄鉱の検出などからみて弥生中期の本遺跡は富士川後背地に続く湿地であったとみなされる。この湿地を利用して水田が形成されていたとみられるが、本遺跡部分は水田域のさらに下流域であったと推測できる。一方本遺跡西側は扇状地末端の高台となっており、集落や生産域が形成されていたものとみられ、さらに落葉樹と針葉樹の混じる森林がこれを取り巻いていたものと考えられる。出土した建築用材はこの集落の建物に関するものとみられるが、同時に出土したヤナギ属の流木は水辺に生育したものであろうか。またトチの皮や種子、クルミ核などが非常に多く出土しており、特にトチについては幼果や、皮に包まれたままの種子も見られたことから、これらの木々が沢沿いに繁っていたことも推測できる。なお、1号溝中からメロン仲間や多くのヒョウタン種子が出土したことは、中期の栽培種を知る上でも重要である。

弥生後期の面は、中期面の上約1mに広がっている。この二つの面の間に砂礫層が堆積しているが、洪水により形成されたものであろう。ここからは水田が4面と水路2本が発見された。水田は一辺が5m程度の小区画のものである。中期では湿地であったこの地区が洪水によりやや高まり、その結果水田として利用できる場所になったことになる。ただし水の影響を受けやすいことは変わりなく、この面も洪水を受けており畔や床面の遺存状態は良くなかった。この水田の西側には同じ時期の集落遺跡として住吉遺跡や清水遺跡が知られており、これらの扇端部に位置する高台と、本遺跡で発見された水田域とは現在にくらべてより高低差の大きい地形であったことが推測できる。

なお、後期面の水田の区画方向や水路の走る方向は、この面の上層にある鎌倉時代の地割り方向とは異なり、それよりも30~40°西にずれていることは重要である。古代から中世に形成される条里地割以前の自然発生的な集落や水田

の区画が残されており、両者の比較も可能である。後期面を走る水路の上流域に湧水や河川があったことになり、現在の海沢川を始めとした河川の位置も推測できる。ちなみに後期面を襲った洪水の方向も水路とおなじであり、この上流域に大きな河川が走っていたことが分かる。

## (2)噴砂について

弥生後期の面を切って地割れの跡が10数本確認できた。地割れには下層の砂が噴き出している「噴砂」を伴うものもある。これらは水田の畔や水路を切っており、小さながらも段差やすれを生じさせている。この地割れを起こした地震の時期についてであるが、1号溝を切っている5-6セクション(第22図)が参考になることはすでに第3章で述べているとおりである。すなわち、弥生後期面の上20cmに砂が噴き出している様子が認められている。後期面上のこの20cmという砂層の堆積時間が問題となるが、後期面から出土した土器は後期でも後半期であることから、地震は後期末から古墳時代初頭に起こった可能性がある。寒川旭氏の御教示では、南海地震と東海地震とは相前後して起こる可能性があり、ちょうどこの時期に南海地震の痕跡がたらえられているとのことである。これは徳島県黒谷川宮ノ前遺跡で確認された弥生Ⅱ期とされる水田面を覆う噴砂であることから、弥生末から古墳時代初頭に発生した地震によるものとみられている(註17)。これと同じ頃に発生する東海地震の痕跡を本遺跡にもとめられる可能性を御指摘いただいた。さらに本遺跡Ⅱ区の弥生後期面でも地割が検出されており、このデータについてはⅡ区の報告書にまとめてある。

(新津 健)

## 註

- 1 甲西町教育委員会『住吉遺跡』 1981
- 2 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第86集「大師東丹保遺跡」山梨県教育委員会他1994、同102集「大師東丹保遺跡2」山梨県教育委員会他 1995
- 3 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第87集「油田遺跡」 山梨県教育委員会他 1994
- 4 山梨県歴史の道調査報告書第10集「市川道」山梨県教育委員会 1988
- 5 第34回作成参考資料 山梨県農務部農村整備課『土地分類基本調査』鰐沢 1987、経済企画庁『土地分類基本調査地形・土じょう調査』鰐沢 1964
- 6 淀水博『木本遺跡』御影町教育委員会 1987
- 7 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第112集「村前東A遺跡概報3」山梨県教育委員会他 1996
- 8 坂本美夫『甲斐の郡(評)郷制』『研究紀要』1 1983
- 9 山梨県教育委員会『山梨県の中世城館跡』 1986
- 10 山梨郷土研究会『山梨郷土史年表』 1981
- 11 清雪俊元『中世』甲西町誌 1973
- 12 秋山敬『鎌倉時代の西郡と若草町』『若草町誌』1965
- 13 秋山敬『小笠原牧と小笠原莊』『甲斐路』42 1981
- 14 秋山敬『大井莊の展開と在領主』『鰐沢町誌』1996
- 15 秋山敬『大井莊について』『甲斐路』37 1980
- 16 註15に同じ
- 明治21年陸地測量部作製『鰐沢・小笠原』1/2万地図
- 17 寒川旭『地震考古学』中公新書 1992

# 図 版



北方上空からの全景

図版 1

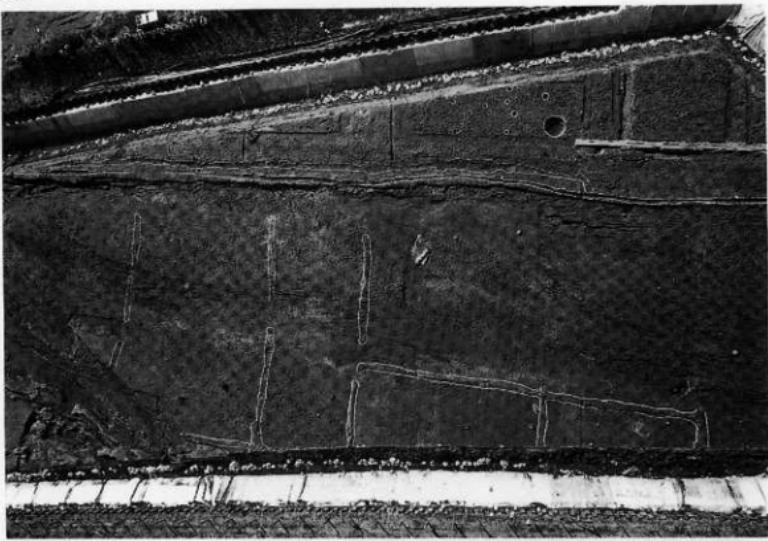


#### 1. 遺跡全景(南方上空)

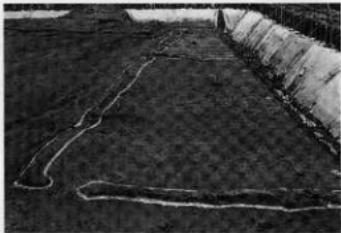


2. 遺跡の層序

図版 2



1.第一面の遺構(水田、3号杭列等)



2.水田の畦畔



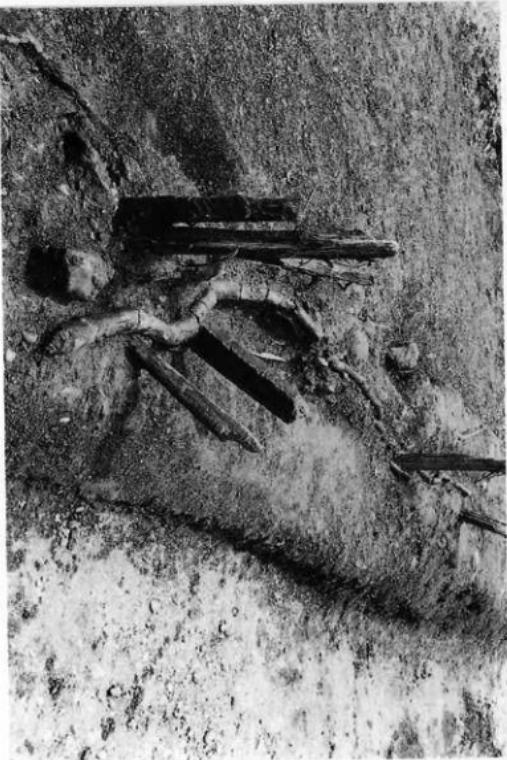
3.発掘中の水田址



1. 1号杭列の平面



2. 1号杭列の側面



3. 1号杭列(部分)

図版 4



1. 3号杭列と溝↑

2. 3号杭列のたちわり風景↓



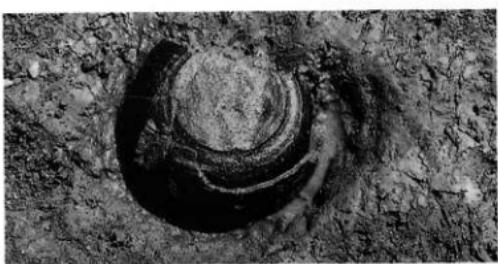
3. 3号杭列出土の木製品



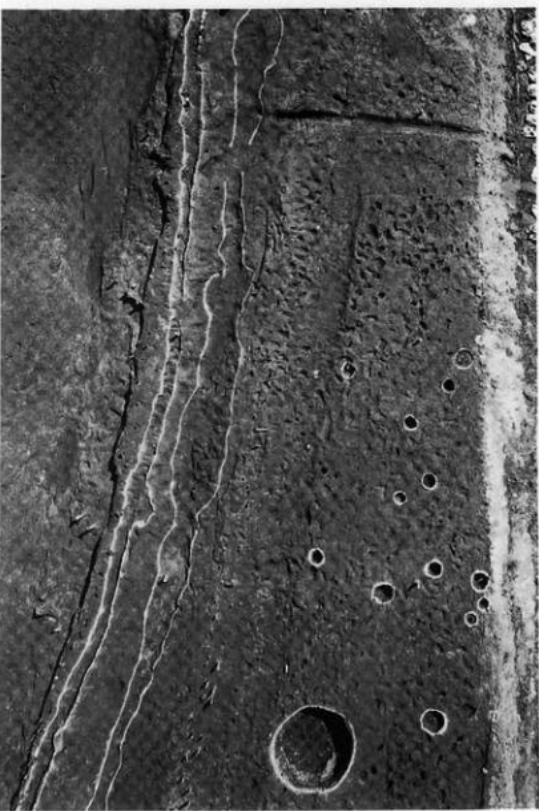
1. 3号杭列の側面



2. 同上のしがら組み状況



3. 付近の検出土状況



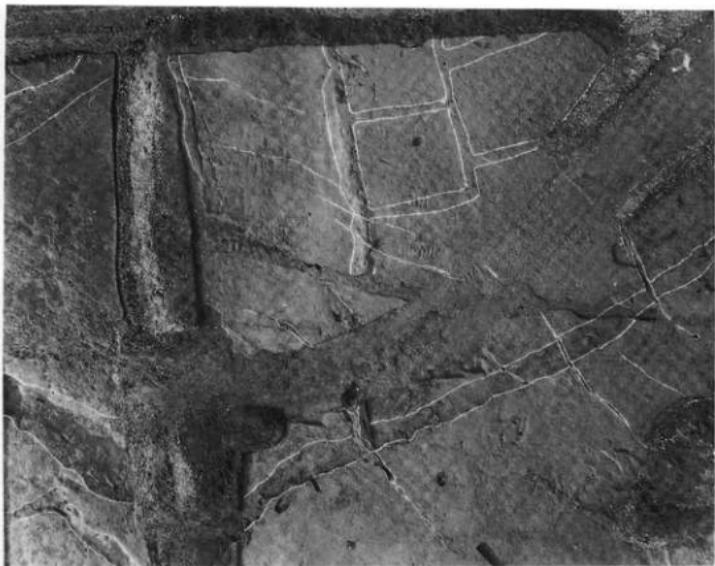
1. 1号土坑と1号建物群



2. 1号建物群の柱根



3. 1号建物群の柱根



1.第二面全景(細いラインは地割れ痕)

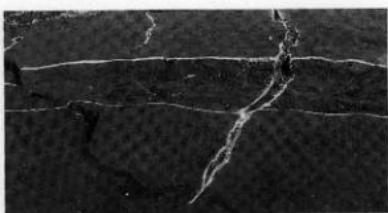


2.第二面の水田址

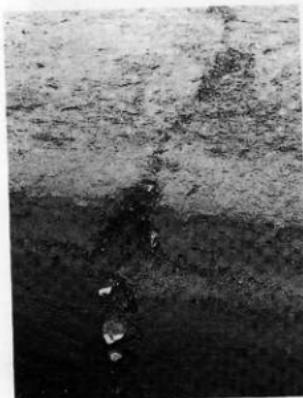
図版 8



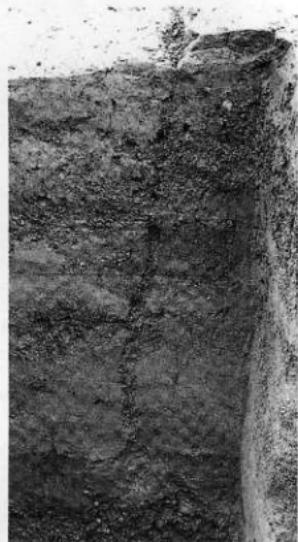
1. 壑を切る地割れ



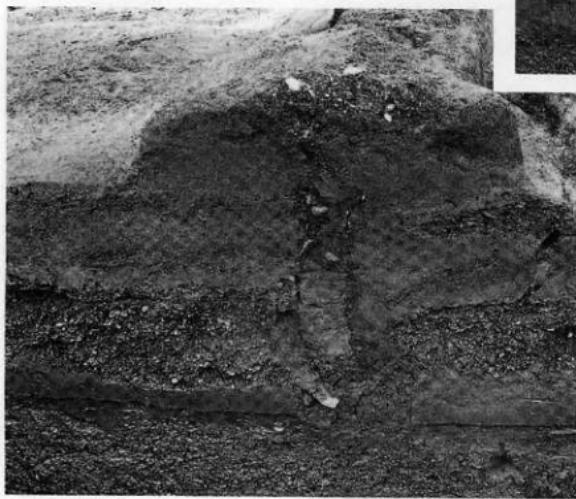
2. 水路を切る地割れ



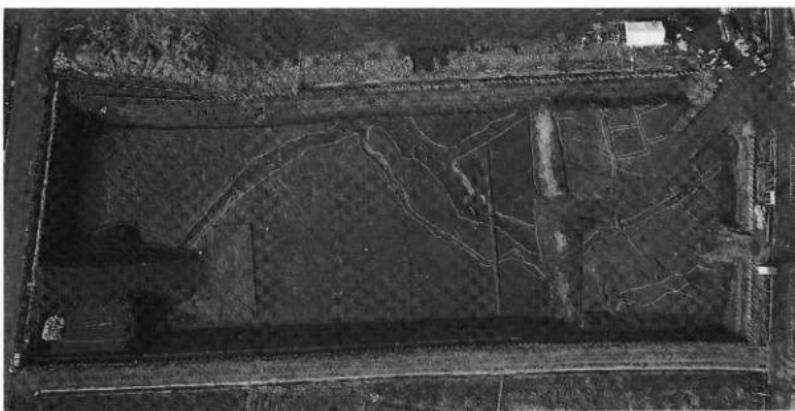
3. 噴砂断面  
(1-2)



4. 噴砂断面  
(3-4)



5. 噴砂断面(5-6)



1.第三面全景



2.  
1  
号  
溝



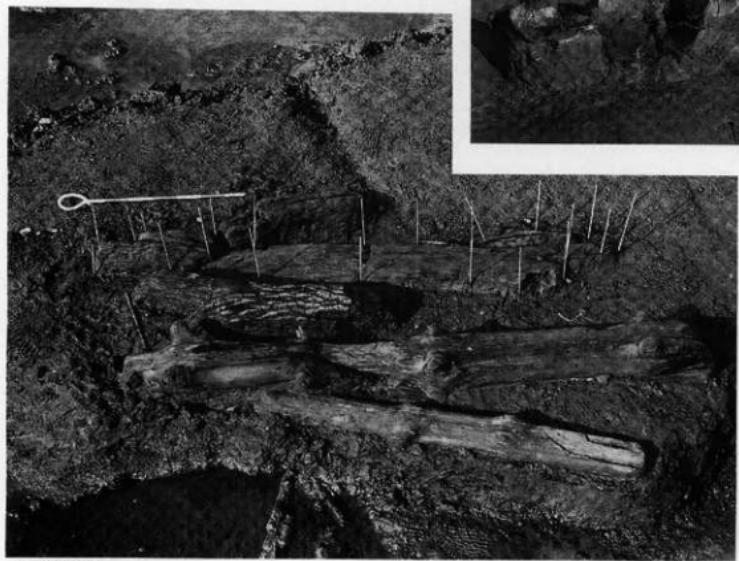
3. 1号溝

図版 10



1.発掘中の1号溝(1群木材)

2.弥生土器出土状況



3.3群木材



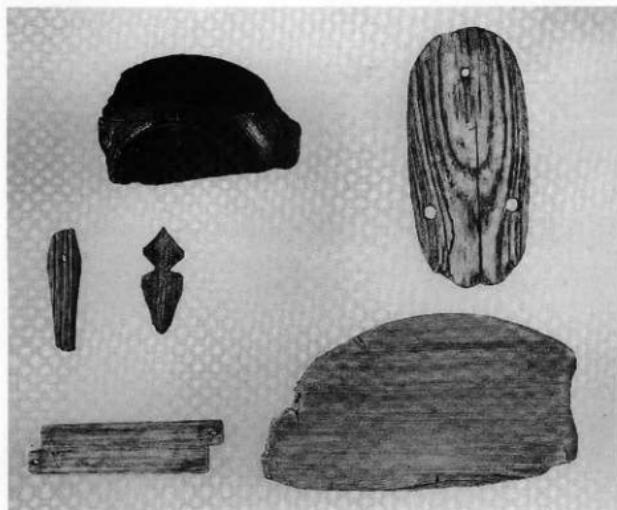
1.第三面のスコリア層(3号溝)



2.スコリア層部分(3号溝)

図版 12

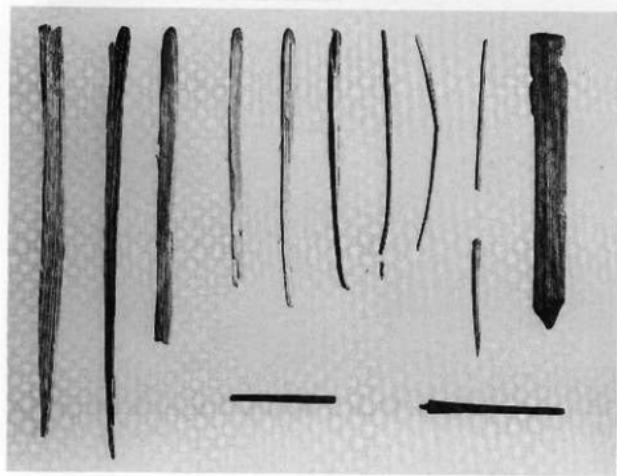
1.木製品①

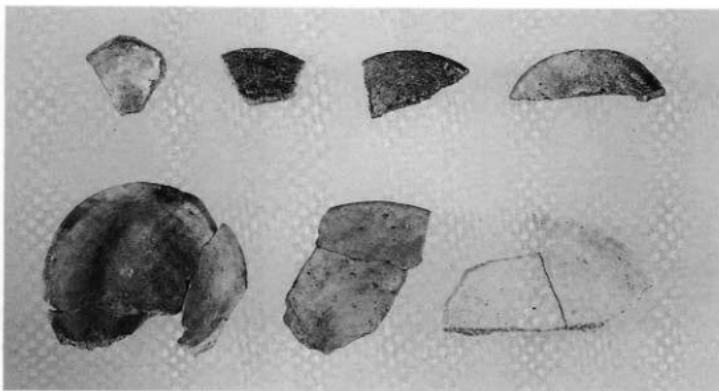


2.木製品②

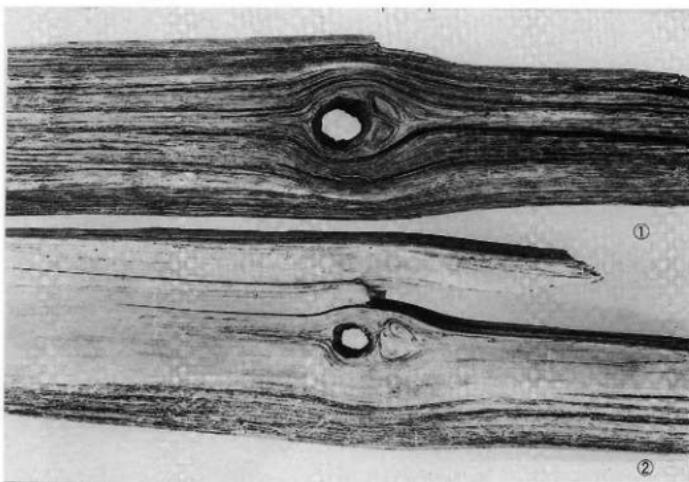


3.木製品③

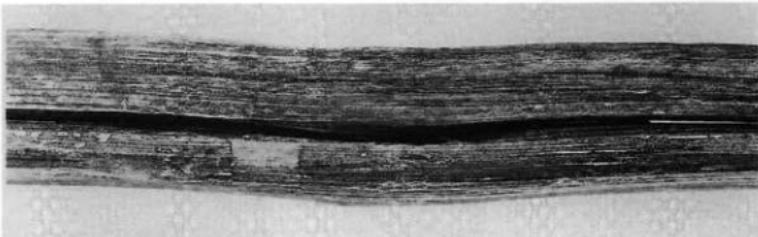




1.第一面出土かわらけ

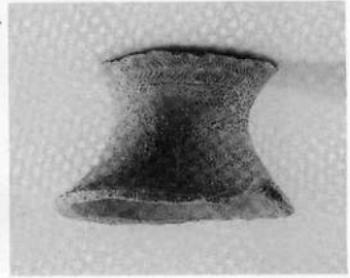
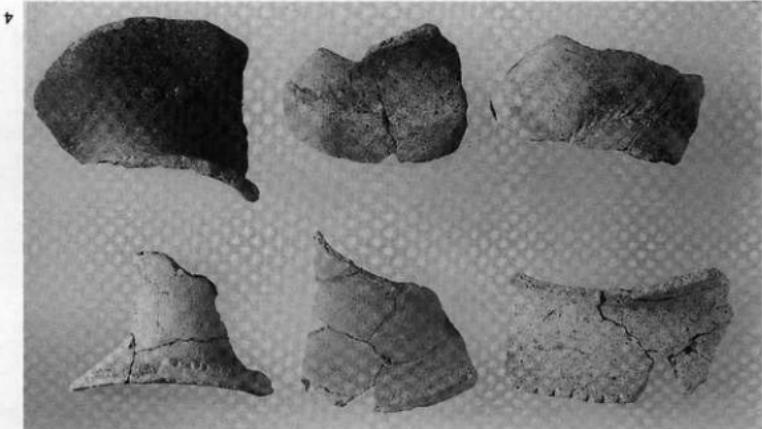


2.杭の接合(①が②の内側)

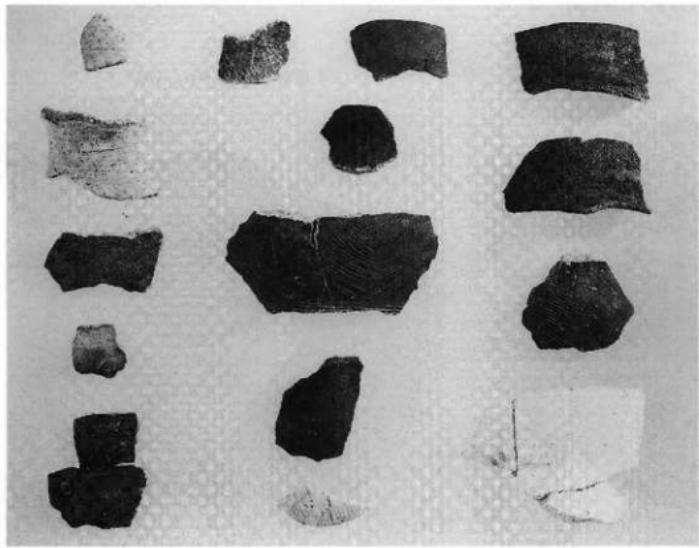
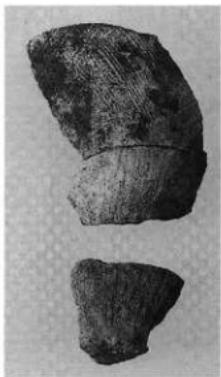


3.杭の接合(上が①)

1~4. 第二面出土の漆生土器

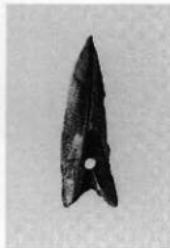


図版 14

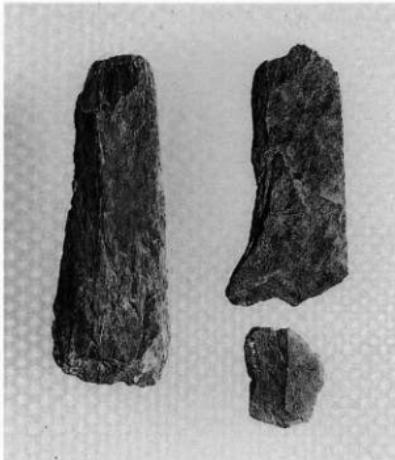


1 ~ 4 .第三面出土の弥生土器

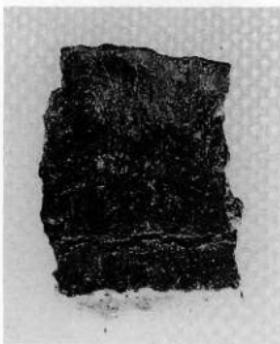
図版 16



1. 牙鋒



2. 打製石斧



3. 漆で接合された土器片

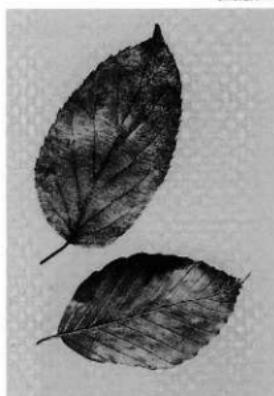
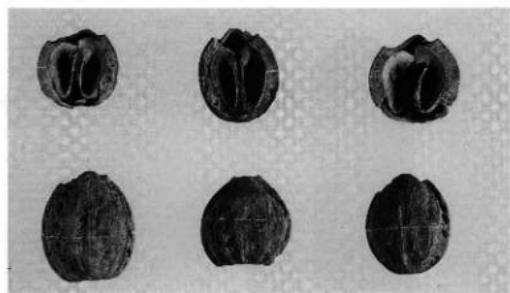
(1 ~ 5. 第三面の出土遺物)



4. 黒漆(?)の塗られた土器



5. 漆状の塗布ある土器



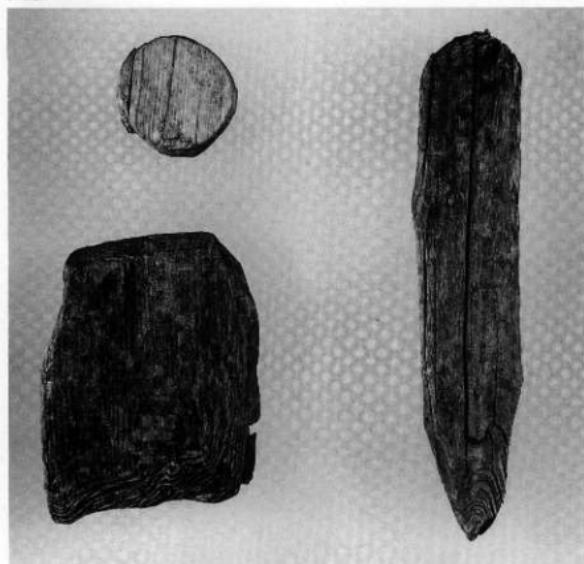
2. クルミ (左 2 個は完形、右 2 個は動物食痕)



3. クルミ (1号満出土)

1 ~ 4. 第三面出土遺物

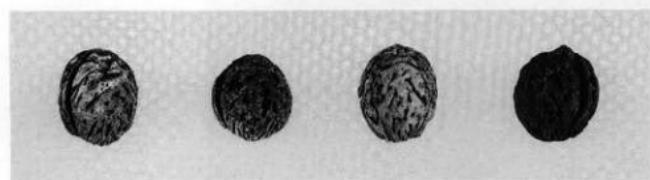
図版 18



1.第三面出土  
木製品



2.第一面出土  
モモ核



3.第二面出土  
モモ核



4.第三面出土  
モモ核

### 報告書概要

|                             |  |                     |  |
|-----------------------------|--|---------------------|--|
| フリガナ                        | ダイシヒガシタンポイセキ                             |                     |  |
| 書名                          | 大師東丹保遺跡 I 区                              |                     |  |
| 副題                          | 国道52号改築・中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書        |                     |  |
| シリーズ                        | 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第131集                  |                     |  |
| 著者名                         | 新津 健・田口明子                                |                     |  |
| 発行者                         | 山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京第二建設局        |                     |  |
| 編集機関                        | 山梨県埋蔵文化財センター                             |                     |  |
| 住所・電話                       | 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 400-15 0552-66-3881 |                     |  |
| 印刷所                         | 横河グラフィックアーツ株式会社                          |                     |  |
| 印刷日・発行日                     | 平成9年3月21日・平成9年3月28日                      |                     |  |
| 所在地                         | 山梨県中巨摩郡甲西町大師字東丹保                         |                     |  |
| ダイシヒガシタンポイセキ<br>大師東丹保遺跡 I 区 | 25,000分の1 地図名・位置・標高                      | 小笠原                 | 北緯35° 35' 09"<br>東経138° 29' 41" 標高245m |
| 概要                          | 主な時代                                     | 弥生時代、鎌倉時代           |  |
|                             | 主な遺構                                     | 弥生の水田址、鎌倉の水田址、杭列    |  |
|                             | 主な遺物                                     | 弥生土器、石器、木製品、鎌倉木製品   |  |
|                             | 特殊遺構                                     | 噴砂                  |  |
|                             | 特殊遺物                                     | 木製品、モモ・クルミ等の種子類     |  |
|                             | 調査期間                                     | 1993年4月12日～同年12月27日 |  |

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第131集

1997年3月21日 印刷

1997年3月28日 発行

### 大師東丹保遺跡 I 区

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根923

TEL 0552-66-3881

発行 山梨県教育委員会

建設省甲府工事事務所

日本道路公団東京第二建設局

印刷 横河グラフィックアーツ株式会社

